○密室の伴はぬ講壇は常に無益に屬す。
○說教者は祈らねばならず、また祈られねばならぬ。（佛國の諺）
○言語の切先は槍の切先よりも鋭し。（ピタゴラス）
○默せよ然らざれば默するよりも善きことを語れ。（ラエデール）
○言語に次いで沈默は世界に最も勢力あり。
○神は其の使をして福音のため死せしめたり、彼らは墳墓の中にありて今尙その生前に於けるよりは雄辯に說教しつゝあり。（ブルーソン）
○人を說服せんには先づ自ら說服されねばならぬ。
○眞正の辯士は、一人にしてよく詩人たり哲學者たり而して情熱の人なり。（フェネロン）
○塩となり光ともなる此の世より、とり給へとは我も祈らず。（奥野昌綱）
○罪人よ汝は破滅の天幕中に眠つてゐるのである。（シセロ）
○我が生涯こそ我が遺言なれ。（デビス）

例　話

一五五　鶯鳥に短冊を

米國のイリー湖畔にジャック・ミラーといふ一農夫あり、熱心な基督者であつた。傳道したいと思へど、話は下手であり、元より無學であれば文章も書けぬ、さて如何にしたなら少しでも傳道が出來るか、と思案をめぐらせた。愛は發明するといふ、彼は次の如き一方法を考へついた。彼の住む田舍へは、年に二度ほど野生の鶯鳥が飛んで來る、これを網で捕へて其の一羽々々に、聖句の書いた短冊を結び付けた。かくする鶯鳥は一年に約二百羽位に上る。この短冊を結びつけられた鳥は、冬なら南へ往き南米まで達し、夏なら北方エキスモー人の住む、邊まで往く。處が神は此のミラーの行爲を祝し、手の爲す業を導き給うた。即ち二千哩も先の地で、此の鶯鳥の携へた聖句付短冊を讀み、神信仰の道を勵み、中には悔改めて神に立歸る者もあり、ミラーの机には、これら御禮の手紙が山積するに至つた。（傳道の書一一・一）

一五六　警句の書いた洋傘

トルコ人にジョーといふ者あり、米國に住んでゐた。彼は傳道精神の燃えた人で、何とか有難いイエスの福音を語りたいと考へた。思ひ附いたのは、自分が歩行中使用する大傘であつた。彼は某傳道團の出版及び供給部員で、始終旅行をして居た。彼は此の洋傘に次の如き警句を、所せまき迄に書いた。「汝は永遠を何處で過さんと欲するか、」「イエスは力ある救主なり、」「神と正當なる關係を保て、」「正義の道を踏んで怖るゝ勿れ、」彼は洋傘の柄に、自轉車用のベルを附け、人通り多き所へ來ると、「チリン、チリン」と鳴らす。もし人が集り來れば、乃ち一席辯じ、自分の罪から救はれた事を證した。（テモテ後書四・二）

一五七　支那人封永生

横濱に住んで居た封永生は、無學な一支那人であつた。商賣上失敗し落膽の結果、投身自殺を企て、さんぶと飛び込んだ所を救はれ、後に神信仰の道に志し、熱心な信者となりたる感心な人であつた。明治時代の横濱は、まだ石油ランプを使用してをり、彼は此のランプの口金直しを其の職業としてゐた。その仕事に出で立つや、頸の兩脇から左右に袋を吊げ、直し賃一錢のうち五厘を左に、後の半分を右に入れて居た。前者は己が生活費に當て、後者は神への獻金及び傳道費に當てたのである。そして一日の生活費が出來ると、もう後は一切仕事をやめ、路傍に立つて、熱心に傳道をした。彼の傳道は仕事最中にもなされた。乃ち口金を直す時に使用する鏝が、火で赤く燒ける迄の時を利用し、自分の周圍に集つた人々相手に、イエスの福音を語つた。そんな時に常に歌ひ出した讃美歌は、「イエスよ心をきよめて、われをまたくなしたまへ、」といふのであつた。怪しげな節ではあつたが、熱情がこもつて居た。こんな姿の彼は、人々から、「やれ半狂人だ、」「やれ南京さんだ、」「ランプの口金直しだ、」と惡口されたが、平氣でイエスのため恥を忍んだ。或人が支那語の教師に世話するから、教師になつては、と勸めると、「身分でもよくなると、自分を恥ぢて遠慮し、傳道が出來ぬかも知れませぬから、」と斷り、やつぱりランプの口金直しで、自由に福音を傳へた。死んだ時には、二百人も會葬者があり、横濱郊外に葬られた。市民は顔を見合せ、「あれが、南金さんの葬式ださうな。何と立派な葬列ぢやありませぬ

か、」というた。（ダニエル書一二・三）

一五八　生死の大問題を

リチャード・バックスターは傳道の熱情に燃えた宗教家であつた。その傳道するや、死に瀕した人が、將に息を引取らんとする者に語る如く、心血を吐露して語つた、と言はれてゐる。彼の健康が虚弱で、何時死ぬかも判らぬ、といふ狀態であつたからでもあらうが、鋭いメッセージを告げて歩いた。或時「私は此のやうな生くる死ぬるの大問題を、冷淡に落着き拂うて語れる、といふのが不審でたまらぬ。私は何故、涙を以て說敎し、講壇を降りては手を伸べ、罪人を捉へて之をキリストに導き得ないのを怪しむ。私は又、自分が集會で見た罪人の顏を、思ひ浮べつゝそれでも歸宅して平氣で眠れるのが奇怪千萬である、」と言ひ、それこそ火の車の如く熱く燃えて傳道した。彼逝いて三百年、いま尙彼は傳道界の明星として輝き渡つてゐる。（コリント後書五・一三）

一五九　澁澤子爵に傳道

大正十五年の秋、澁澤子爵は當時來朝中の宗教家ブラムエル・ブースを自邸に招き、接待會を開いた。ブースは客間にて一應來會者に挨拶を述べ、固い握手を終つて庭園に出た。講演會場に向ふためである。東洋屈指の實業家と西洋でも名高い宗教家とが歩調を揃へて花咲く庭の砂利上を歩んでゐた。話は植込まれてある樹々の事から、心に植えらるべき信仰の木に就き移つて往つた。此處ぞ傳道の好機と見たブースは庭園の美を賞めつゝやがて子爵にむかひ、「しかし私の往きつゝある天の御國には、とても地上に比べものなき立派な庭園があります。貴君も是非そこへ御出で下さい、希望致します、」と警告を發した。その後、子爵の關係して居る養育院を參觀した時には、殊に人を避けて別室に退き、信仰上卒直な勸告を試みたといふ。（ヨハネ傳一四・一）

一六〇　はがき百枚傳道

郵便はがきが未だ一枚一錢の時代といへば、大分ふるい話である。當時そのはがきを百枚一円

で買求め、百枚傳道を思ひ立つた熱心な人があつた。それも相手は百人ならで、唯一人であり、而も頑強なキリスト教の反對者だとあつては、愈々奇であらう。その篤信家とは今日の吉田清太郎翁その人である。其の頃まだ若かつた翁は、後に家庭學校長を勤めた留岡幸助の父を救主に導きたいと決心し、毎日往つて話し出したが、「もう來て呉れるな、話は聞きたくない、」と斷られた。そこではがきを百枚買うて來て、聖句などを書き毎日三枚か四枚投函した。僅か三丁程の所を、そんなに寄越されては困る、と之も斷られた。翁は更に一案を講じ、日本全國の基督者名士に、体驗上の信仰眞理を書いて貰ひ、これが着すると父上の方へ廻送してゐた。その内村鑑三先生から來たものは次の如き文句であつた。「私はムーデーの夏季學校に往き、パウロの言なる噫々われ惱める人なるかな、この死の体より我を救はん者は誰ぞ、との句につきて話をきゝ、そこで救はれた。その救は今日も確實である」と。この熱心な傳道振りには、父も多少その心を動かし、「吉田さんが余り熱心にして下さるから、せめて御禮のつもりで、私の家を開き說教會でもして貰ひませう、」かと申出でられた。後年新島先生の葬儀に列席して深く感じ、遂に信仰を告白されるに至つた。（ルカ傳一五・三一）

一六一　四十四人を救うた犬

スイスの都ベルンの博物館に、剝製の犬が陳列してある。これは有名な聖バーナードの犬で、一生を通じアルプス山中に行き暮れる旅人四十四人を、救うた手柄の犬である。此の聖バーナードの犬は、今日も變らず冬期になると活動し、多くの人命を救助する。然らば如何なる由來で、この犬が奉仕するやうになつたか、その歴史は甚だ古い。ずつと大昔、約二千年ほど前、アルプス山中にジュピターの宮が出來た。所が建立されて以後千年ほど經つと、この宮も朽ちてこはれた。誰も修繕しないまゝ、徒らに雨雪の食物となつてゐた。其處へ聖バーナードといふ立派な信仰家が來り、之を建て直し此のアルプスを越ゆる旅人を泊め、時には介抱もし、世話もする一種の避難所とした。その時以來、代々神に献身した僧が、この所に詰めて奉仕してをり、今日では十二人のオーガスチン派の人々が居る。彼らは十五年目に交替し、次の人々に委ねて去る。この邊は大雪のあるところ、時々三十呎の深さに及ぶので、一ケ月以上も道が判らぬこともあり、旅人は全く道にゆき暮れる。そんな時には、この犬達が四方八方へ、遭難者を探しに往く、若し見

附かると急に報告しに來る。僧は犬の案内で行倒れ人の傍へ馳せつけ、之を救うて歸り、介抱する。（マタイ傳二五・四〇）

一六二　集會廣告するリー將軍

米國の或る海水浴場でのこと、うだるやうな暑さの中を、街を往きつ戻りつし乍ら、「皆さん、今日の午後三時から、舞踏場で集會があります、入場を歡迎いたします、」と大聲あげて廣告する一紳士があつた。彼は誰あらう、南北戰爭に英名を轟かせたリー將軍その人であつた。彼は當時、その海水浴場に逗留中であつたが、或日曜日の午後、メソジスト派の一傳道師が、舞踏場を借りて說教するときゝ、自分は聖公會に屬する信者ではあれど、その上、前述の如き身分高い者ではあつたが、そんな事に拘泥せず、自ら進んで傳道集會の手傳をした。神の助と信者達の努力により、その集會に集ふ者多く、殊に將軍の廣告に感じて來た人も少からず、成功裡に終つたのみか、中には信仰に志した人もあつたといふ。（マタイ傳二八・一九）

一六三　赤坂病院の創立由來

東京に赤坂病院といふのがあつた。この病院が出來るに就いては、美しい傳道美談がある。久しい以前、日本から富田鉄之助といふ人が、英國へ留學した。そしてホイトニーといふ者の家に、寄宿する事となつたが、同家では此の一日本人に、イエスの福音を傳へたい、と甚だ熱心するうち、家族一同これまでに無いほど信仰に燃えて來た。果ては本國にぢつとして居られぬ程になり、乃ち日本に渡來し、東京の氷川町に赤坂病院を起したるホイトニーは、この家族の一人であつた。當時、彼は未だ一箇の青年であり、日本に來てから醫科大學に通ひ、ドクトルになつた。彼は弱者に對する同情篤く、寒中、人力車夫が夜おそく、客待してゐるのが氣の毒だとて、おでんを配つて歩いた事もある。（ロマ書一二・一一）

一六四　熔岩を防いだ決死隊

エトナ火山が噴火した時ほど、恐しいことは多くあるまい。地獄の繪卷物も斯や、と思はれる

程であつた。熔岩の奔流が迸り出で、後から後から平野に進出し、人家も森も畑も呑み出した。數個の村落を滅した流は、遂にカタヌ町の外壁に達した。外側では此の流が刻一刻と高まり、近くの谷は近々六時間で滿ち、遂に巾半里その厚さ十メートルの流となつて、驀然に町へ向うて突進して來た。外壁は四十メートルの長さに亘り崩潰し、火の流は容赦なく町内へ流れ込み、全町は將に全滅するかと思はれた。此の時、百人程の決死隊が出來、火山口から余り遠くない所へ突貫し、手に手に槌や其の他の道具を持ち、駈け寄つては熔岩の流れる堤を破壞せんと企てた。熱氣强くして二三擊喰らはしては退き、又喊聲をどつと擧げては突貫し、漸く火の流を他に轉ずる流口を造るに成功した。爲にカタヌ町の全滅は免れたが、それでも三百軒の家と宮殿と敎會は燒かれてしまうた。人類を滅さんとする罪の奔流を防ぎ、同胞を救ふため突貫する決死隊員は誰か。（創世記一九・二四―）

一六五　草履を直す衆議員議長

明治時代の話である。某敎會で集會が開かれる時刻より、余程早いめに出席する一紳士があつた。彼は入口にて出席者の穿く草履の鼻緒など直すのを、己が神より命ぜられた職分と感じてゐた。この紳士とは長く衆議院議長を勤めたる片岡健吉その人であつた。彼は敎會堂に於て、小使の如き仕事に甘んずるのみならず、暇さへあれば牧師や傳道師と一緒に、傳道して歩いた。公務の忙しい時と雖も、日曜の集會や祈會に欠かさず出席し、若い神學生の話にも耳を傾けた。また牧師を其の官邸に招き、祈會を開いた事もある。それでゐて後は傳道局の總裁、同志社の社長、或は校長として、盡力もした。彼の斯る奉仕は傳道心の旺盛なりしを如實に示して居る。（ヨハネ傳一三・一四―）

一六六　西郷ともあらう者が

西郷隆盛は純潔を愛する人であつた。然るに當時の政治界が甚く腐敗しをるを見、之を快しとせず郷里へ退いて居た。板垣退助は此の事を聞き及び、彼を郷里に訪ねて言うた。「西郷ともあらう者が、退いて此の所で、已のみ清からんと欲し、全からんと願ふとは何事です、濁流に投じて之を救濟する筈ではないか」と。すると西郷は、大きな聲で唯一言「やりませう、」と言うて、

鄉關を飛び出で乱れたる政界を救ひ、國家のために大に盡したといふ。（ルカ傳一四・二三）

一六七　全世界に福音を

ジョン・エリオットといふ説教者は、世界を遍く巡りて、凡ての人々に福音を傳へたい、といふ希望を有つて居た。それで人々が「長く此の地に居て下されば、立派な教會堂も建てますし、牧師館も造りますが、」と言ふとき、いつも決り文句のやうに答へた。「私の使命は、一人でも多くの人に説教をすることです故、一箇所に長くは居られませぬ」と。斯て世界傳道の壯途へ上るのであつた。漸く印度に達した時、彼は既に八十の老翁に達してゐた。それでも説教は止めなかつた。愈々歩けなくなつた時、己が床の周圍に黑人の子供達を集め來り、これに讀み書きを教へ出した故、その弟子が、「先生は既に幾十年か働かれた故、もうそんなにせずとも、宜しいではありませぬか、少しはお休み下さい、」と言うと、彼は答へて「いや、何十年働いたからとて、働ける間は働くのが人の務です、子供を教へる位の氣力は未だ殘つてゐます。それで今は其の事を實行して居るわけです、」というた。此の老いても尙壯なる精神に、弟子は甚く感動した。（默示錄二・一〇）

一六八　支那傳道を思はぬか

名高い孤兒院長ジョージ・ミューラーは、八十二の高齢を以て日本に來朝し、多くの信者を集めて、次の如き激勵の演説をした。「諸君どうか今日、その全心を神に任せ、此の機會を無駄にしないよう望みます。滿堂の兄弟姉妹、直接傳道に決心する者は幾何ありますか。見給へ、その歐米諸國より幾多の男女が、千里の波濤を蹴つて此の國に來り、福音を宣べてゐる事實を。諸君は此の如く、己が國に盡す心は起りませぬか。單に此の國ばかりではない、隣の支那に傳道する、といふ勇猛心は起りませぬか。私は本年八十二才の高齢です、尙この日出づる國の方々を愛する故、一万三千哩を遠しとせず、遙々參りました所以は、他にありませぬ、たゞ此の國を利せんが爲に外なりませぬ。諸君は己が血肉を分けた同胞のため、傳道する決心は出來ませぬか、そして此の事をなす第一歩は、全心を神に献げることです、諸君、いまだ神と偕に歩んで居ないなら、今日から其を實行せられよ、唯一回だけ献心しても役に立たぬ、日も夜も之を實行し續ける必要

があります」と。（ルカ傳五・一〇）

一六九　火種を守る苦心

昔から御神火を絶やさぬため、一方ならぬ苦心するは、日本にも外國にもある風習で、昔、ローマのヴエスタ神殿では、此の不斷の火を守るため清き處女が任に當つた。大昔、火種が此の上もなく尊重された時代には、新しい村が出來ると、古い村の火を大切に移し、その火種を保つため努めた。今日でもアンダマン人などは、火種を尊重し使用してゐる。琵琶湖の竹生島には宮があり、その神火を分けて貰うた人は、之を故國に持ち歸るため、容易ならぬ苦心と努力とを拂ふは、人のみな知る所であらう。傳道精神の火を保つ爲に、苦心の必要なきか。（ロマ書一二・一一）

一七〇　スタンレーと小人種

スタンレーがアフリカ探檢の時、一行は長い間食料肉の缺乏に苦しんだ。同行の人々は「最早、奇蹟の時はすぎ去つた」と言うた。するとスタンレーは、「然うではない、神もし善しとし給はゞ、明日にも肉を與へ給ふ、」と答へた。不思議や翌日になると、何處からともなく、ホロホロ鳥が數十羽とんで來た。之を捕へて數日間食べ飽いた。彼は佛國の半分ほどもある大森林を旅行し、そこに住む病身者の如き、矮人を見た。晝なほ暗き森の中に住む、肉食人である。試みに腐敗した肉や、骨を投つてやつたら、彼等は爭ひ奪うて食つた。彼は後にロンドンで、都人士に對ひ彼ら救濟のため、獻身せねばならぬ必要を說き、「諸君は文明に惠まれてゐる、何故か最暗黑に住むアフリカの矮人を救ふため、斷然獻身をしないのですか、」と言うた。

第十三　信仰

金言・名句

○汝もし唯信ぜば神の約束は確實なり。（ウイリアム・ブース）
○信仰なるかな、強き信仰は約束を望み、唯これをのみ望み、不可能のことを笑うて言ふ、これ爲し得べき事なり。（ウエスレー）
○信仰を有つてゐる人は、自分が信仰に居る事を最もよく承知す。（オーガスチン）
○小き信仰は片隅に於て呟くが、大なる信仰は火中でも歌はしめる。（スポルジョン）
○サタンを恐れてはならぬ、惡しき音信に驚いてはならぬ、信仰、信仰、力ある信仰が必要である。（カサリン・ブース）
○用ゆれば虎となり、用ひされば猫となる。（文選）
○その家に飼ふ犬猫に功德を及ぼさぬやうな宗教は價値なし。（ローランド・ヒル）
○全き神に對する全き信任は全き平安を與へる。（サーヴェージ）
○信仰と善行とを引離さうとするは、火より燃ゆることゝ、光ることゝを引離さうとする如く、到底不可能の事である。（ルーテル）

○理性は蠟燭であるが信仰は太陽である。
○信仰とは汝の手を神の手の中に置くことなり。
○世にゆづる勿れ、世をして譲らしめよ。
○力なく見ゆれど強し蔦かづら救の岩にからめつければ。
○宗教心ある人と無き人との區別は、前者は將來のために現世を犧牲にし、後者は現在のために將來を犧牲にする。（パイロン）
○勇敢なる人は信仰に充てる人なり。（シセロ）
○信仰なくば人間の生涯は連續したる一箇の謎、しかし信仰あらば万事みな明快なり。
○新しい心を得る者は新しい着物を得る。（泰西金言）
○不信仰は盲目なり。（ミルトン）
○不信仰に原因せざる罪惡なし。（メーソン）
○信仰がなくば祈が唱へられぬ、祈がなければ信仰は續けられぬ。
○祈によりて恩惠の門を叩き、信仰によりて其の答を待つ。
○祈の弓に約束の箭をたがへ、信仰の手を以て放てば之を天にまで達せしめる事が出來る。（ザルター）

例話

一七一　樫の樹に學べ

昔、ボルカリブの若き弟子が樫の樹に倚りかかつて頻りに泣いてゐた。先生が何故に悲しむか、と尋ねられると、「神の國の進歩が遲々として進みませぬ、折角、信仰に入つたかと思ふと、直ぐ又後戻りする者も多く、こんな事では一体何時になつたら、神の御意が地上に行はれませう、それを思へば遂ひ悲しくなりまして、」と答へた。先生は其の樫の樹を指しつゝ、次の如く答へて彼を勵ました。「心配するな、神の國は今お前が倚りかゝつてゐる樫の樹のやうに、最初は至つて小さい實であれど、成長するに及んでは育ちて雲を突く程の巨木となる。而も其の成長に手間どる如く見ゆるが、唯これに年月を貸しさへせば、次第に繁茂するのだ、神の國の成長發達も亦、斯の如し、お前も希望を大きく有ち、たゞ日毎おのが職分を全うし、神に事へるがよい」と。（マタイ傳一三・三一）

一七二　神様は死なれたか

米國で南北戰爭の最中、北軍大敗北の報が各地に屆いた。この時、有名な黑人雄辯家ドグラスが、大會衆の前で演說中だつたが、この敗報が彼の耳に達した時、彼はじめ聽衆が、わつと泣き出した。乃ち黑奴廢止のため戰つて居る北軍の敗北は、自分達の浮ぶ瀨が無くなつた事を意味するからである。此の失望落膽、意氣銷沈の中央で、突然大聲で叫び出した者があつた。「神様は死なれましたか」と。續いて二回も三回も繰返し、同じ言で叫んだ。一同は誰かと其の方向を見ると、それは一老婆の叫聲であつた。みんなは「成程、神様は今尙ほ生きて在す、そして弱者の味方となり給ふ、」と各自は悟り、生き返つた如く元氣を回復したといふ。昔、パウロは言うた、「神もし我らの味方ならば誰か我らに敵せんや」と。（ロマ書八・三一）

一七三　千五百呎を飛行する魚

飛魚が水面上に躍り上り、胸と腹の鰭を展げ空中を滑走し出すと、時に千五百呎を一氣に飛ぶ

ことがある。その速力は余り早いとは言へぬ、三百尺を飛行するに十數秒かゝるから、水泳の選手位の早さである。それで一度水に下りると、魚が先廻りして居て、之を呑むので直ぐまた飛び出して逃げる。この魚は物に驚き易い魚であり、シビ、マグロ、サケ、シイラ等といふ魚に追はれると、すぐ空中へ飛び上るのである。飛魚が飛行するのは、前記の魚に追ひつめられた時のみか、といふに然うでもない、時には樂しみのため群をなし、自由に空中を飛行してゐる事もある。人をして世俗以上の高尚な生活をなさしめるものは信仰である。（イザヤ書四〇・三一）世俗の泥海に下りる者は、惡魔の餌食となる。（ペテロ前書五・八）

一七四　キウイ鳥と翼の退化

ニュージーランドに産するキウイ鳥は、名は鳥でも翼のない鳥である。此の鳥は晝間、樹の根や洞の中に潜みをり、夜になると外へ出て餌を求める。このニュージーランドといふ島は、大昔、大陸と分離したため、虎や狼などいふ猛獸は勿論のこと、犬や猫さへも居らぬ島で、獸の代表としては蝙蝠が居るだけである。鳥類では鷹の一種が居るのみで、蛇も毒蛇が居ないといふ樂天地である。それに此の鳥は夜間に出て、蚯蚓や昆虫の如きものを餌としてゐるから、鷹に追はれる心配はなく、翼を使用して食物を漁る必要もなく、安樂に食つてゆけるので、翼が次第に退化するのみか、遂に今日では外部に現はれて居ない程になつた。このキウイ鳥より更に甚しいのは、前世界の海鳥でヘスペルオルニスといふ鳥がある。海に住み魚を捕つて食べてをり、少しも飛ばない爲に翼は全くなくなり、骨さへも痕跡を止めないといふ、徹底的の退化をした。信仰を使用せずば、遂に皆無となる。（マルコ傳四・四〇）

一七五　信仰篤き忠僕

ホワイト・ロックは、クロムエル時代の人である。英國より派遣され、公使として、スエーデンに駐るころのこと、或晩、國事のことが甚だ氣にかゝり寢返りばかりして悶えてゐた。この事を知つた信仰篤き忠僕が、その寢室を訪ね、「御主人がお生れにならぬ以前、この地上を神が治めて居給うた、と思はれますか、」と尋ねた。ロックの答は「勿論の事である」といふのであつた。忠僕は言を續け、今一つの問を發して見た。「それでは御主人が死なれて後、この地上を

神が治め給ふ、と思はれますか」と。ロックは再び同じ答をして、「勿論のことである、」という
た。僕は此處ぞと思うて、「それなれば御存命中の今も、同じく神が地上を支配し給ひます、一
切万事を御手に御任せになつては如何ですか、」と忠告がましくはあつたが、堅く信ずるので言
うて見た。ロックはさも嬉しさうに、「然うであつたね、」と一言答へ、そのまゝ夢路を辿り、安
眠したといふ。（ヨハネ傳一四・一一）

一七六　信なくば立たず

昔、先生の孔子にむかひ、弟子の子貢が質問して、政治の要訣を尋ねると、「食を足し、兵を
たし、民をして信ぜしめよ、」と答へた。すると子貢は質問を續け、「先生、その三者のうち、ど
うしても一つを減ぜねばならぬ場合は、何を減らしたらよいでせうか、」と言うた。孔子は言下に
答へて言うた。「兵を去れ」と。尚も子貢が質問せんとするを知り、先生は「更にも一つ減ぜね
ばならぬ場合は食を去るがよい。民もし信なくば立たず、」と斷言せられた。（ヘブル書一一・三三）

一七七　エホバ備へ給ふ

ジョージ・ミューラーの居室に入つて、特に不思議なものが、少くも一つあつた。それは窓ガ
ラスに指輪で書きつけた「エホバエレ」といふ一句であつた。これは昔、信仰の父アブラハム
が、モリヤの山で、一子イサクを献げんとした際、心から發した言で、神備へ給ふ、といふ意味
である。ミューラーは孤兒院に必要な食物その他が、缺乏して如何とも出來ず、失望せんとする
時には、急いで己が室に走りこみ、この日光に輝く文字を見つめ「なに、神が必要品を備へ給
ふ、」といふのが常であり、神に信仰に置いて夢疑はなかつた。それで或る時期は、前後七年間
に亘り、孤兒に食べさせ得る食糧は、三日以上を所有する事が稀で、常に缺乏の連續であつた
が、それでも神を信じ續けた。その最も大なる試煉は、一八三八九月十八日に起つたもので、
この度は神が祈をきゝ給はぬのかとさへ思はれた。が丁度もう一刻も延ばせぬ、といふ際どい時
に答へられ、多くの孤兒は飢えることなく過せた。こんな時に彼を勵ましたのは、このエホバエ
レの一句であつた。（創世記二二・一四）

一七八　金十錢で賣る十圓紙幣

人口幾百萬を有する大都會での話、有名な人が試みに、都人士の信仰を試驗して見た。即ち車馬織るが如き雜沓の巷に立ち、一枚の手が斬れるやうな十円札を掲げ乍ら、「この十円札、金十錢で賣ります、」と連呼して見た。多くの人々には彼に一瞥を呉れるのみで不審さうな顏付をしたまゝ行き過ぎた。中には彼を狂人と思うたのか、にやりと妙な笑を浮かべて、急ぎ往く者もあつた。それでも少數の人は近く寄つて、この札が贋造紙幣ではないか、と調べて見る者あり、よし本物だと判つても、まさか本當に金十錢で買へるとは信ぜず、また問うて見ることをせず、今一度彼の手に十円札を手渡して、さつさと往き過ぎるのであつた。彼は相變らず、「十円札が一枚、たつた十錢！、」と連呼してゐた。せめて一人でも之を信用して買求めて呉れる人が見附る迄と、辛抱强く買手を探して居た。そして可成長い間かゝつて漸く二枚だけ賣ることが出來たといふ。（マルコ傳五・三四）

一七九　四百年昔の蓮の實

奉天に行くと高さ平地より四十尺位の小山があり、そこに生じて居る古木は、幾百年も壽命を保つて來た樹であることが、その年輪を讀むことにより判る。更に調査の歩を進めて見ると、この小山たりし地は、四百年ほどの昔は、池であつた事がわかつた。次第に地層が上昇し、やがて地底が水面に現はれ、今日では小山となつた。然るに此の池には、昔、蓮の花が咲いて居たことが近年に至つて判つた。乃ち〇博士が此の小山から化石の如き蓮の實を發見した。試みに鑪で實の端に傷け、これを水中に浸すと、四百年間ねむつて居た實の生命は、こゝに發現する機會を得て、芽を出し始めた。博士は勿論、日毎に水中の實を覗き見る一同は、驚異の目を見張つたといふ。（マタイ傳一七・二〇）

一八〇　蓄音機に對する信仰

發明家エヂソンの家で起つた不思議な出來ごと、或晩、親友が多勢集り御馳走を頂いた。晩餐

會は終つた、一同は散じたが、その中の二三人は無理に引留められ、泊る事になつた。一緒に同じ室で床に就いたが、柱時計が十時を報じた時、何處からともなく、變な聲がして、「十時だぞ！、もう後二時間だ！」と言ふので、眠れぬまゝ寢返りを打つて居た一人の客は、ぎよつと驚いた。さあ氣味が悪くて眠れぬ。そのうちに十一時が鳴つた。すると「十一時だぞ！愈々後一時間だ！」と言ふではないか、彼はもう堪らないので跳ね起き、他の友達を起して事の始末を話すと、「何そんな馬鹿な事があるものか、君が夢でも見て居るんだらう、」と一向取り合はない。彼は本氣で目の色を變へ、ぢや暫く待ち給へ、十二時になるからと、言ひ終らぬうちに十二時がボンボンボンと打ち始めた。今や遲しと待つて居ると、案の錠、打ち終つた時、變な聲で「十二時だぞ！さあ死の用意はいゝか！」一同は色蒼ざめて室外へ飛び出て、大變だとばかり、エジソンの室を叩き起し、事の一切を告げた。何もかも承知してゐるエジソンは、心の中では成功々々と思ひつゝも、顏色にも出さないで、「いや、あの室は惡魔が居るのか、死神でも居るのか、變な事があつて……」と、其の室へ赴き「變な聲の正体は、これなんですよ」と、彼が多年信じつゝ努力した蓄音機を見せた。一同は呆然として、「なあんだ、これかと、」安堵の胸撫でおろした。これが彼の發明にかゝる蓄音機が、社會に發表された初であつた。（ヨハネ傳二〇・二九）

一八一　必勝を信じた元就

弘治元年の秋、毛利元就は陶晴賢（スエハルカタ）を宮島に攻めて、大内の讐（あだ）を報ひようとした。兩方共、海戰のため舟が欲しい、それで兩者は我（われ）先にと、對岸の伊豫に使を出し、河野氏に舟の借用方を申込んだ。この時、陶氏は何日までといふ期限を附するのではなく、たゞ慢然と申込んだのに比し、毛利方では「唯一日だけ貸して頂きたい、戰に勝つたならば、即刻お返し申します、」と願うた。河野の方ではこの二つの申込を暫し考へたが、綜合、熟慮して見るに、毛利方には必勝の確信が如何にも明白と判つた。乃ち三百艘の船は、毛利に貸し與へられた。案の錠、戰は毛利元就の勝となつた。（マタイ傳八・一三）

一八二　母親の涙一滴

ミカエル・フアラデーは、近世電氣學の泰斗であつた。彼は熱心な基督者であり、人格品性と

もに秀で、學生間に非常な感化力を有して居た。或時、學生に信仰の奥義とは何ぞ、といふことを説明せんと欲し、ガラス製の試驗管に、母親が其の子のため落した一滴の涙を入れ、敎壇に立つて言うた。「只今から此の涙を分析して見ます、」分析の結果、水分と少量の塩分とが現れた。彼は黑板に、「一滴の涙は、水分と少量の塩分なり、」と書き、學生の方を振向きつゝ言うた。「諸君、この分析表の示すところは、母の涙一滴を悉く言ひ表して居るでせうか」と。學生達は、その通り更に間違はない、と思うたが、さて先生から問はれて見ると、答へかねて誰も言ひ出す者がなかつた。彼は此處ぞと思ふところから、言を續けて云うた。「成程、この分析表は科學上から言うて、母の涙一滴を余す所なく表現して居ます、がしかし母が我が子の爲、よかれかしと願うた愛、これは全世界も替へ難き愛ですが、その愛は此の表に表れてゐませぬ。しかし涙の中には、此の愛を認めぬわけにはゆきませぬ。この數字に表はし得ぬ世界を見、これを認識する力を信仰の力といひ、その領土を信仰の世界と申します」と。（ヘブル書一二・一）

一八三　小判イタダキ

他の魚に附着して生活する魚に、小判イタダキといふのがある。暖海に住んでゐる。小判型の吸盤が頭部にあり、之を以て他のものに吸ひつく。魚や海亀や鯨などに付く、時には船の横腹に吸ひ付いてゐる。自分では泳がないで、他の魚に運んで貰ふのである。この魚は小魚を其の餌としてゐる。鮫などに付いてゐると、時々鮫の食べた魚のおこぼれを頂戴する。或時は離れて、自分で勝手に餌を求めて歩くが、すぐ又吸ひ付いて運ばれ往く。この吸ひ付く能力を利用し、南洋地方では海亀を捕獲する。信仰は私共を神に結び付ける吸盤である。（ヘブル書一〇・二二）

一八四　マリヤとマルタの如く

銀鈴と綽名された名説敎家スポルジョンは、信仰と愛との關係を、次の如き美しき言を以て説明した。「信仰と愛とは、マリヤとマルタの如く引き離す事の出來ぬ問題である。信仰はマリヤの如く、イエスの足下に坐つて御言を聞くときに、愛はマルタの如く骨惜みなき奉仕によつて御名をあがめる。信仰は光である、愛は熱である、二つ乍ら共に義の太陽なる基督より來るものなり」と。

第十四　聖　靈

金言・名句

○神と偕に居ることは、最もよき事なり。（ウエスレー）

○神を離れず罪に陷らずして、神と偕に歩くことは未だ浅いことである。私はそれでは滿足しない、何とかして本當に滿される事を望む。（フレッチャー）

○一本の樹が燒けて、全部の林を燒くごとく、使徒たちは天來の火に燃やされて、全世界を燃やし、而も眞理の光と愛の熱とを地上に充した。（オーガスチン）

○聖靈に滿されるとは、聖句に滿されるの謂である。（ウイリアム・ブース）

○余は聖靈を信ず、との舊式なる宣言を以て踏み出した者である。（トマス・ケンピス）

○この短くも全き語を守れ、即ち一切を棄てよ、さらば一切を得ん。

○人の惡を言ふものは聖靈を憂へしめ、また神の誡を破る。（ウイリアム・ブース）

○聖靈の光を以て讀むならば、聖書は本當に我が足の燈火である。

○余が斷食祈禱して全く自分を神の靈の導のまゝ任せたる時が、最も有用なる時であつた。（フインニー）

○世人が認めて之程いやなものはない、とする者は聖靈の火に燃され、消さうとしても消すことの出來ぬ人である。（レイルトン）

○聖靈が充ち滿ちたる量をもて臨み給ふとき、人は自分を正しとする心と高慢と自負心とを取り去らる。（ブレンゲル）

○最も弱き教役者も、その聖靈の膏（あぶら）を注がるれば、之を有せざる最强者に優る。（クック）

○聖靈に感ずれば驢馬でも豫言する。（ウエスレー）

○人もし聖靈に充されずば、大學者も教壇に於ては木像同然である。

○若し私共が聖靈に滿されてゐないなら、キリストを辱しめる事になる。（トーレー）

○聖靈の最善の働きは、私共の境遇を變化せしむる事ではなく、境遇以上に私共を强くすることである。（ジョエット）

○御靈の賜を受けるなら、これと共に全き聖潔をも受取らねばならぬ。聖靈のバプテスマのなす第一の働は、その心を凡ての罪より潔むる事である。

例話

一八五　黑人少年と聖靈

未だ余り遠い昔の事ではない、一黑人少年が奴隷の目的を以て盜まれた。そして苛酷な取扱を受けて居たが、不圖した事から信仰に入り、宣教師から聖靈の賜物、といふ事を耳にした。それで彼は熱心に此の賜物を求めた。然るに不思義な事が起つた、それは彼が或る導で、米國のニューヨークに來る事となつたが、その乘つて居る船の船長と數人の船員が、この少年の感化によつて改心した事である。勿論、無學であり世界の事も一向知らぬ黑人であるから、これは全く彼に宿り給ふ聖靈の御業といふ外はなかつた。更に驚くべき事が、この少年の身邊に起つた。彼を連れて來た人は、上陸の第一夜、或る教會の集會に伴ひ、彼を殘して置いて自分は用達に他の所へ往つた。一先づ用件が濟んで彼を連れ歸らんとして、その會堂を訪ねると、こはそも如何に、多くの人々が惠の座に出て祈つて居るではないか、それが一口二口その黑人少年の語つた結果だと聞いて驚いた。彼は其の少年を、日曜學校に伴うた。何か話をさせるためであり、自分は又、他の所へ用件を帶びて出掛けてしまつた。ほんの暫くで再び引返し、少年は如何にと覗いて見ると、また惠の座に先生や教授連が進み出で列になつて神に祈り、中には涙を流して居るではないか。彼は伴ひ來れる少年が、何を語つたかを知らなかつたけれど、この光景を見て頭を低く垂れ、神を讃美し今更の如く、聖靈の御力を認めた。（使徒行傳一・八）

一八六　再び進路を變更す

或る眞夜中のこと、大洋の中央を航海する一汽船があつた。船長は斯々の方向に進め、と命じて床に就かんとした。この時、突然彼の頭に閃き來たものあり、その感じが余り强いので、今一度起上り羅針盤を覗き込んだ。その感じといふのは、再び進路を變更せよ、といふ事であつたが、しかし船は豫定の進路を辿つてをり、別に間違うては居ないので、彼は其のまゝ床に入つた。併し目のみ冴えて寢つかれず、愈々進路再變更の感が嵩み、早鐘の如く心に迫る故、船長は跳ね起き、遂に示されたる方向に舵を取れ、と命じたまゝ安らかに眠つた。翌朝、ほのぼの夜が

明ける頃ほひ、進路の前方に當り一遭難船が發見され、幸に一同を救助することが出來た。（使徒行傳一六・六）

一八七　太刀山と聖靈の鑵詰

名高い力士太刀山が、米國へ巡業の目的で航海中のこと、同船に一傳道師あり、偶々彼と話をする事となつた。時に太刀山は腕力の强き事を主張すれば、傳道師は聖靈の力が偉大であると力說した。力士が耳を傾けて聞けば聞くほど、聖靈の力は超自然の力であり、神の御力であると判り、己が腕力に加ふる此の超自然を以てすれば、天下當り得る者一人もなし、と考へたのであらう、彼は傳道師に懇願して言うた。「若し聖靈といふものがあるなら、それを鑵詰にして私に下さい。」と（使徒行傳八・一九）

一八八　十年以上聖靈に反抗

チャツブマン博士の說敎會あり、一紳士が妻と娘とを伴ひ之に出席した。集會の終に當り、信仰すべき事を促すや、妻は夫を勸め、娘も亦「お父さん悔改めて信仰を始めて下さい、」と懇願したが、頑としてきゝ容れない。先程から此の樣子を見て居た博士は、見かねて降壇し、紳士の傍にゆき、「貴君はどうして其のやうに頑なのですか、」と尋ねると、彼は答へて言うた。「私は十年以來、神の御聲を拒み、聖靈の御囁に反抗して參りました爲でせうか、丁度、心が石の如く堅くなつてしまひ、もう如何にしても動きませぬ」と。（ヱペソ書四・三〇）

一八九　聖靈の名稱

聖書には聖靈に就いて、各種の名稱が附せられて居る。即ち聖靈、神の靈、主の靈或は單に靈と言はれて居るが、新約聖書になると、之に加へて「父の靈」「その子の靈」「イエスの靈」及び「キリストの靈」とある。更に新な屬性を附した名として、「智慧の靈」（使徒行傳六・三）次に「眞理の靈」（ヨハネ傳一四・一七）また「生命の靈」（ロマ書八・二）更に「惠の靈」（ヘブル書一〇・二九）とあり、ロマ書には今一つ「子たる者の靈」（八・一五）と言はれた所がある。殊に目立つのは、聖靈は新約に入つて明白に人格的名稱となり、イエスと共に神の歷史的顯現に

與つて居る事である。

一九〇　私かに嗚咽した正久

植村正久先生は傲岸不屈を以て聞えた人であつた。所が彼が澤山保羅先生に會ひ、暫し言語を交へるや、氏を通じて現はれし聖靈の威光に抗し得ず、甚く打たれて其の面前に、「わつ」と泣き出した。この事實は余り外部に洩れぬ話であれど、植村正久先生の文中に、次の一節あるを見れば、之を裏書して余りがあらう。「その後、余が益友、神戸より來り、談偶々リバイバルの事、及び澤山夫妻の信仰篤きこと、爲に京阪神の間にリバイバルの起れることを詳かに聞きたる時、余は心中殆んど燃ゆる如く感じ、おのが靈魂の有樣、及び傳道上の事共まで思ひつゞけて、神前ひそかに嗚咽し感泣、その恩慈を求めたる事あり、あゝ悲しい哉、天性の疏懶放恣なるに由り、信仰の進歩思ふほどにあらず、前日の誓を虛にせしこと少からず、氏が訃音は此ら懷舊の情を喚起して、この身を慚殺するに似たり。神よこの荏弱なる僕をあはれみ給へ」云々。（使徒行傳六・一〇）

一九一　聖靈の降臨とムーデー

ムーデーは近代に於ける異數の大傳道者であつた。彼が斯く用ひられし原因は、聖靈が充ち滿ちたる量を以て、彼に臨み給うた結果であつた。次に示す彼自身の告白は、この事を物語つて余りがあらう。「私は曾てシカゴ市のフアーウエル館で說敎したころ、非常な苦心を以て說敎の準備をしたものである。然るに何度やつて見ても、空を打つが如き具合であつた。當時、一人の親切な婦人あり、口癖のやうに、ムーデーさんの說敎には力がない、と注意してくれた。それを聞くたびに私は、どんなにか新な聖靈の降臨を、願うた事か知れませぬ。それで彼女と毎週金曜日午後四時に來て、一緒に祈つて頂きたいと求めた。實際どんなに祈つたか知れませぬ。シカゴ大火の後、私はニューヨーク市に赴きウオール街の某銀行に往く折しも、一種不可思議なる威力が、頭上に壓し來る如く覺えたので、早速、ホテルの余が一室に入り、神に祈つて言うた。おゝ神よ、御手をとゞめ給へと。何となれば、神は私が到底堪えられぬ迄に聖靈を注ぎ給うたからである。此の降臨の以後、私の說敎會で新な回心者が起らなかつた事あるを覺えぬ。私は世界中

の富を以て代ふるとも、再び四年前の私に立歸ることを承知しない。實際、私は何人にとりて不思議なるよりも、私自身にとりて一層不思議でなりませぬ。私が今日、說敎しつゝあるところは、シカゴ當時に述べし所と一語一句同じもので、新しい說敎ではない、たゞ神の力が之に伴うて居るのみで、これは新しき福音でなく、聖靈の力が伴うた古き福音にすぎないのである」と。（使徒行傳一・八）

一九二　花咲き出した死の谷

南カリフオルニヤのインペリアル・バレーは、俗に死の谷と稱せられたる所である。海拔以下二百尺の低地であり、非常に暑くて人畜は到底住み兼ねる谷であつた。その上、困つたことに、過去一千年の長きに亘り、雨が殆んど一滴も降らなかつたほど、荒れた地方であつた。この死の谷へ決死的に耕作を始めたのが我が日本人である、幾多の危險を冒し、困難に堪え、忍耐を以て粒々辛苦、遂に成功した。今日では其處に花咲く園があり、穀物みのる畑あり、所謂、乳と蜜とが流るゝ地と化した。荒れ果てたる心に聖靈が注がれる時、「荒野とうるほひなき地とは樂しみ、沙漠は喜びサフランの花の如く咲きかゞやかん、盛んに咲きかゞやきて喜び且つ喜び且つ歌ひ、」得る心と變化する。（イザヤ書三五・一—）

一九三　ゴビ沙漠の進出

滿蒙地方に跨るゴビ沙漠は、大昔から荒地であつたのではない。滿洲の公主領へ往き、そこの農事試驗場を參觀するなら、其の事を發見し得る。乃ちあの沙漠の下には、驚くなかれ直徑二間もある大樹木が埋まつて居る。何百年か以前には、大森林地帶であつた事が解る。更に恐しい事は、このコビ沙漠は一年三里の速力で、次第々々に東漸し、日本海に近づきつゝあり、寒心すべき事である。これは支那人が無茶苦茶に、樹木を伐採した結果である。聖靈の恩化から離れた人の心に似てゐる。（サムエル前書一六・一—）

一九四　一株より七十三貫

南部ヨーロッパは葡萄の產地である。昔にあつては、エシコルの谷に見事な葡萄が產出した。

（民數紀略一三・二三）近年のことコッペンハーゲン市の公園では、一株の葡萄樹から、合計七十三貫七百八十匁の果實が採れた。またフランスの南では、一房一貫二百目に達するものが出來るといふ。英國のハンプトンに一株の葡萄樹があつた。相當健全に成長して居たに拘らず、どうも實りが惡く、爲に持主は失望の幾年かを過した。然るに或年のこと、蔓も折れるかと思はれる程、大きな房ばかり出來た。驚いた持主は、何處に原因があるか知ら、と取調べて見たら、樹の根が伸び其の年に至つてテームズ河に達し、其處から養分を吸ひ上げ出した事を發見した。基督者は葡萄の枝であり、聖靈の果を其の品性や生活に結ぶべき命令を受けてゐる。（ヨハネ傳一五・一―）しかし聖靈の水が豊に流るゝ河に、信仰の根が達せざる限り、豊に果を結ぶことは出來ない。

（エゼキエル書四七・一―）

一九五　聖靈に由る一瞥

或時、フインニーが一紡織工場を參觀した。多くの女工と騾馬とが、仕事に從事して居たが、一方ならぬ騒々しさを呈して居た。彼が靜かに歩を進め、女工の糸を取つて居る所に來た時、今まで大聲に笑ひはためいて居た女工らが、彼を見とめた途端、憐憫の情に滿ちた一瞥を與へた。彼女達は容易ならぬショックを受けた者の如く、呆然と彼に見とれて居た。此の時、彼女らの一人が糸の斷れたのを繋がうと試みたが、どうしても繋ぎ得ぬのみか、手が震へて如何とも出來ず、そのまゝ其處に泣き伏した。この樣子を見てゐた近くの女工は勿論のこと、その室に居る他の女工まで全部が、電氣にうたれた如く聖靈の恩化を蒙り、己が罪深きを示されると同時に、泣き伏す者も多く、到底そのまゝ仕事を續けられなくなつた。工場の持主が彼に隨行して居たが、工場監督にむかひ、「機械の運轉中止命令を下して呉れ給へ、そしてフインニー先生の說教を女工達全部に聞かせるよう、取計ひ呉れ給へ、」というた。騾馬の居る建物が廣いから、との事で家畜が追出され、その後で說教會が開かれたが、その結果はフインニーの生涯でも珍しい好成蹟であつた。そして數日間に殆んど工場の全部が、有望なる回心者になつたといふ。（使徒行傳二・一―）

一九六　酸素中では光る炭火

空氣中の酸素は、その四倍もある窒素で薄められて居る。それで酸素としての働が余程にぶ

い。若し純粋な酸素なら、非常な働を表す。火鉢にある少し火のついた炭を、酸素の中に入れると、強い光を放ち出し、まるで花火の如く燃える。硫黄は空氣中に於ては、微かな焰であれど、酸素中では強い青色の焰を猛然とあげる。空氣中では幾ら火をつけても燃えぬ物も、酸素の中では中々よく燃える物が多い。例へば細い鐵線を螺旋狀にして、その端に硫黄をつけて之に火を點じ、酸素の中に入れると、パチ々々と火花を飛ばしながら、恰も線香花火の如く燃える。それ故、若し空氣中の酸素ばかりが充ちたら、大變なことになる。台所から改造する必要あり、石炭や薪や鐵のコンロなど使ふわけにゆかぬ。二三分で燃え盡すからと。兎角、煙れる亞麻の如き信仰も、（マタイ傳一二・二〇）聖靈なる酸素中に沒入するとき、人目にも不思議と見ゆる火花を發するに至る。

第十五　聖潔

金言・名句

○愛に居り愛に歩み、語るも思ふも愛であれ、聖潔の生活とは愛のそれである。聖潔とは全うせられたる愛のそれである。（アイゼヤリード）

○あゝ神よ地上の執着心が到底引き降し得ぬ高貴な心を與へ給へ。（トマス・アクイナス）

○聖潔に於ては、人がイエスと偕に十字架にかゝるのである。（フロレンス・ブース）

○人を妬む者は、他人の德を見て罪に陷る。（ポイリウ）

○回心は大なる惠である。がこれで終りと思はしめるは、惡魔の大なる陷穽である。（プルターク）

○人生の最大幸福は心の純潔なるにあり。

○義とせられたる人々は、其の心中に多少の差こそあれ概ね傲漫、憤怒、我意及び墮落への傾向を感ずるものなり。（ウエスレー）

○善き生涯の一掬は、學問の一ブシエル（二斗余）に相當す。（ジョージ・ハーバート）

○品性の人は其の屬する社會の良心なり。（エマーソン）

○何の木の花とは知らぬ匂かな。（芭蕉）

○見ず聞かず言はずの三つの猿よりも、思はざるこそまさりけれ。
○汝偉大ならんと欲するか、先づ小くなれ。（オーガスチン）
○最もよき目薬は悔改の涙なり。
○服従は一切の義務を加算したものである。（ホゼア・バロウ）
○眞正の自由は眞正の服従にある。（ビーチャー）
○最善の人は必ず大勇の人なり。（スタルン）
○宇宙には唯一の殿堂しかない、それは人間の身体である。（ノバリス）
○清き良心は最も快き枕である。
○死を避くるよりも罪を避くるは善し。（ケンピス）
○情慾を制せよ、然らざれば情慾に制せられん。
○直からぬ心を隠す我が影に、いとはず照す月ぞ恥かし。（太田道灌）
○誘惑は自負心の錆を取り去る鑢（やすり）である。（フェネロン）

例話

一九七　水鳥の足

靜かな池の水面を縫ひ往く一羽の水鳥があつた。美しい姿を鏡の上に落した如く、水面に寫してゐた。その五色の羽根は、旭光に映えてその美觀は例へやうもなかつた。見る目には甚だ美しく、空飛ぶ鳥の目にも、芝生に遊ぶ小犬の目にも羨望の的であつた。しかし水中の魚は、水鳥の足が休む暇なく、前後に動き水を搔いて居る事實を知つてゐたから、一向美しいとは思はなかつた。先程から水鳥の姿に見とれてゐた一基督者あり、嘆息して心の中に次の如く言うた。「あゝ私の信仰生活こそは、丁度あの水鳥の如きものである。外觀には立派な基督者らしく見えるが、わが心の中を覗けば之に反してゐる。隱れたる罪との闘ひ、古き惡習慣との爭ひ、二六時中もがきに蹠（あが）いて、休む暇がない、あゝわれ惱める人なるかな」と。彼は水鳥を見る事をやめ、わが家に歸りて神に祈り、聖潔の惠を求めて與へられた。それ以來、內容外觀共に清き基督者となつ

た。（ロマ書七・二四）

一九八　雪線の上を歩く

日本アルプスを踏破した人は、誰でも知つて居るであらう。夏に往くと雪が殆んど無いから、峯また峯へと往くには、谷また谷へと降らねばならぬ。高い頂上に登るには、深い溪谷に下降する必要がある。二回や三回は我慢も出來るが、數回に及ぶと全く疲れてしまふ。それ故、山に住む人々は「雪のある五月頃に來たまへ、」と言うて呉れる。その頃は未だ雪が張り詰めてをり、谷も埋れてゐて、峯から峯へ往くに谷へ降らないで、雪線の上を往くことが出來るからである。信仰の生活も亦然り、聖潔といふ雪線上を歩くのが、最も疲れないで而も信仰上の高い峯を縫うて進むことが出來る。然らされば悔改の溪谷へ度々降りて、その涙を谷水に洗はねばならぬ。（マタイ傳五・八）

一九九　虹が圓形に見える大空

私共が地上から見る虹は、七色の太鼓橋である。半円形しか見えぬ。然るに飛行機で上空に昇ると、この虹が眞の円形に見えるといふ。七色の円は又一層美しい。地上人の到底想像だも出來ぬ美觀だとの事である。聖潔とは天父なる神の御目から御覽になつて、品性、人格、信仰の円形なるをいふ。殊に愛の点に於て全き事をさしてゐる。基督者が具ふべき品性（ガラテヤ書五・二二―一）が、よし未熟の域にあるも、全心もて神を愛し、また己の如く汝の隣人を愛する、換言せば神愛と人愛とに於て、全き心を有つことが聖潔である。それ故、英語のホーリー（聖潔）といふ語の源は、ホール（完全）といふ字と同一だといふ。聖書にも此の事が高調してある。（マルコ傳一二・三〇―）

二〇〇　自我の死が必要

聖潔の惠を獲得して居るか否かを知る定規がある。この定規の一半は「自我の死」といふこと、他の一半は「キリストに生くる」といふ事である。パウロは此の定規を以て（ガラテヤ書二・二〇）ガラテヤの信者を量つた。有名な説教者ジョエット博士は、この大切な点に就き、次

の如く言うた。「ヨハネ傳十二章廿四節以下に、一粒の麥もし死なずば、と書いてある。さうだ死の道を通してのみ、生命に至るのである。死を体驗せぬ弟子たちに、眞の生命はあり得ない。綠滴り花咲き香る春の野を現はす爲には、あの寒い霜雪の冬も必要である。暗い墳墓もなければ、榮光の復活もない、凡ての人に墳墓なかるべからず、自我をその中に葬り去らねばならぬ。私共の祈の中に自我が死なねばならぬ。多くの祈に於て、自我がひどく活々と出て來る、自我己、私と。そして十字架に釘づけらるべきは此の自我である」と。

二〇一　肉体は神の宮なり

ノスチック派の思想は、人間の体を何處までも汚いもの、とするのである。佛敎にも此の思想があるらしい。肉体を以て精神を汚すもの、向上を妨ぐるもの、との考は相當に濃厚であらう。然るに聖書は之と全く反對である。イエスは人間の体を神の宮と宣うた。（ヨハネ傳二・一九）パウロは肉体が聖靈の御力により、潔められるとき、聖靈の宮となる、又は神の御住居と化する、と敎へた。人の心は生活の根源であり、その心が聖別されるから日常生活まで聖化される。食慾も、性慾も知識慾も悉くが聖別されるから、生活を通じて神の榮光が表れる。その結果、家財道具まで潔くなる。舊約には馬の鈴や、勝手元の鍋まで潔くなる、と書いてある。

（ゼカリヤ書一四・二〇及びコリント書三・一六）

二〇二　一瞬間を潔く保て

人の一生は長いやうでも、實は一日の集つたもの、その一日も之を詳細に調べれば、一瞬間の集合したものに外ならぬ。故に聖潔の生活も其の通り、一分時を聖徒として送り續ける者が、聖徒の一生を送るのである。フオスター監督は、敎へて言うた。「今といふ一瞬間を、罪なくして過し得るとせば、次の瞬間も其の通りする。遠い將來のことは、何も心配するに及ばぬから、今といふ瞬間を神に縋ることである。今、神の御意を爲し、今といふ今、神の御意に逆かぬよう、する事が最も大切である」と。「塵も積れば山となる。」「十里の道も一歩から。」

二〇三　聖潔と過失

支那在住の一宣敎師宅に、支那人の女中が一人ゐた。夫人からオムレツの造り方を、敎はるこ

とになつたが、三つ目の卵子が腐つてゐたので、夫人は之を棄て去つた。翌日、夫人が女中のオムレツを造つて居るのを、肩越しに見てゐると、三つ目の卵子を棄てゝ居るので、何故そんな惜しいことをするか、と尋ねて見ると、「でも奥さんは、昨日三つ目の卵子を棄てたではありませんか、その通り見做うて居る迄であります、」との答に、夫人は驚きながら言うた。「昨日の三つ目のは、腐つて居たから棄てたのです。」と。女中は智慧が足りなかつたから過失に陷つたが、惡氣でやつたわけではなかつた。聖潔は本人の知能上、完全にするわけではないから、過失は免れぬ。

二〇四　ゴム靴を溫める

西洋の話、五才位の一少年あり、父は郵便配達夫であつた。冬の寒い日、彼は何と思うたか、朝早く二階から降りて、父の毎日穿いて出るゴム靴をストーブで溫め出した。多分、父の足が冷たからう、と同情しての行爲であつた。ゴムの燒ける臭氣のため、こは何事ぞと急ぎ降りて來た父は、この有樣を見てびつくりし、早速その靴を手に取つたが、既に燒けて用をなさぬ狀態であつた。父は幼い我が兒を見下しながら言うた。「坊や、お父さんの爲を思うて吳れた事は有難かつたが、お前のやつた事は駄目でしたよ」と。聖潔の生活にも、神の爲を思うてやつた事で、此の幼兒の如き過失や、失敗あるは止むを得ぬ。（テスト書二・三）

二〇五　黑人と疳癪玉

米國では今日でも、或る所に往くと黑人が白人から、差別待遇を受ける。久しい前のこと、身長六尺大の黑人が、乘合馬車から失禮極まる仕打で下車を命ぜられた。「黑んぼ、さつさと出て往け！」と車掌は呶鳴つた。この大男はぢつと忍んで反抗しなかつた。以前から喧嘩好の友人が、「おいジョージどうした、一つ拳固を喰らはしてやれ、俺が加勢してやらう、」と息卷いた。すると大男は靜かに、「神樣が僕の疳癪玉を奪つてしまはれたから、もう喧嘩は出來ない。小刀を火に燒くと刄が鈍るやうに、僕も信仰に入つてからは、喧嘩をする荒つぽい氣が鈍つてしまつたよ、」と呵々と大笑した。聖潔の惠は本人から、疳癪の性質を除く。（テサロニケ前書四・七）

二〇六　度々起る疑問

アンドリュー・マーレーは、次の如く言うた。「度々起る疑問は、あれ程しげしげ教會に通ひながら、どうして基督者が、聖潔の生活を送ることに失敗し、主に對する愛と喜とを缺くか、といふことである。之に對する其の最も大切な答の一つは、彼が己に對して死に、世に對して死ぬ、とは如何なることかを知らぬ事である。若し己と世とに死なざれば、神の愛と聖靈とは、その人の心に宿らぬ。成程、彼は或罪を悔改めたかも知れぬ、しかし單に罪からばかりでなく、更に自己の舊い性質や、自我心から救はれて、神に歸る事が出來てゐない」と。

（ガラテヤ書二・二〇）

二〇七　木馬の信者

百貨店の屋上へ行くと、メリー・ゴー・ラウンドとて木製の馬や犬や、汽車や自動車に子供達が乘り、同じ所を何回も何回も廻つてゐる。如何にも面白さうではあれど、進歩がない、前進がない、何年たつても同じ円しか通らない。聖潔の惠に達して居ない基督者の靈的經驗が、全く之と似てゐる。有名なローランド・ヒルが、或時、子供の木馬に乘つてゐるを見、「これは丁度或る基督者が年中動搖ばかりしてゐて、少しも前進しないのと似てゐる」と言うた。（ヘブル書九・一四）

二〇八　乳牛に及びし聖潔の惠

或る牧場に癖の惡い牛が一匹ゐた。牧者が乳を搾る時、氣に食はぬと乳の桶を、足で蹴りとばすのが例であつた。牧者は其の都度、自分の腰掛台で、いやと言ふほどぶん毆り、牛を懲しめて居た。處が此の牧者が聖潔の惠を獲得した。その翌朝、例によつて乳を搾つてゐると、その牛が又蹴りとばしたから、桶は覆り乳は一面に流れた。牧者は轉がり往く桶を拾ひ上げ、倒れた腰掛を手に取り、靜かに牛の傍に近寄つた。牛は今にもぶん毆られると思ひ、戰々兢々と震ひ上つてゐた。然るに牧者の唇から洩れた言は、柔しい次の如きものであつた。「お前はな、好きなだけ主人を蹴るがよい、しかし僕はもうお前を毆らないよ」と。此の態度を讀み得たか、牛は頭を垂れて恐縮して居たが、その時以後、再び主人を蹴らなかつたといふ。

二〇九　ブラムエルの證言

ウイリアム・ブラムエルは、メソジスト派に生み出した屈指の聖徒である。その聖潔に就ける證をして、次の如く言うた。「主は突然その宮に來り給うた。私は直感的に、之は聖潔の惠を頂いた、のであると悟つた。同時に私の靈魂は、驚異、愛及び讃美に充ち滿ちた。その時以來、二十六年全き自由のうちに主と偕に歩んでゐる」と。（エペソ書五・八）

二一〇　ダイヤモンドを造つた人

フランスの化學者モアツサンは、木炭をダイヤモンドに造ることに、成功した人であつた。彼は砂糖を焦して木炭を造り、これを鐵と一緒に電氣爐に入れ、四千度といふ高溫度で熱した。かくせば鐵はどろどろに熔ける。その鐵の中へは炭素がよく熔け込むことが出來る。この熔け込んだ鐵を、急に水中で冷すと、炭素は又鐵の中から出て來る。この時、鐵が固まる力で、炭素は非常に大きな壓力を受け、ダイヤモンドに變る。（テモテ前書一・一五―）

二一一　ベーカー博士に聞け

「信仰の道は私の眼前に開かれ、到底言を以て述べ得ざる程の愛と、天に屬する美との洪水が心に臨んだ。それ故、私は全く潔められた事を、信ぜずには居られなかつた。目下、私の靈魂は神に對し、缺目なく且つ全き服從の狀態である。自己や財産その他も、既に私の有にあらず、私は唯これを預りをり、神の榮光の爲に使用するのみ、私は此の教理と經驗を宣傳へるため語り、說教し、筆を持つ。そのため全力を盡すことを何よりの喜とする、」とはエス・ベーカー博士が、聖潔に就いて述べたものである。

二一二　下山に非ず雲上へ

登山者の一團あり、高山を登りつゝあつたが、その途中急に黑雲襲ひ來り、あやめも分らぬ程となり、雷鳴さへ耳を裂くことゝなつた。强風は一團の人々を、天涯幾十里の彼方に飛ばすかと思はれる程であつたから、一同は案内者に問うた。「下山すべきですか」と。案内者は打ち笑み

つゝ言うた。「風雨と暗雲の上に、速かに登りませう」と。一同は元氣を出して、上へ上へ登るや、間もなく風もなく雲もなく、恰も夏の夕暮かと思はれるほど靜かな所に來た。遙か足下には風雨凄じく、雷鳴とどろき、電光閃めき渡つてゐた。パウロは信仰生活に於ける雲上の經驗をさして、天の處に坐す、と言うてゐる。（エペッ書二・六）

第十六　靈　交

金言・名句

○神偕に在さずば鐵壁も蜘蛛の網の如く、神偕に在せば蜘蛛の網も鐵壁の如し。（フェリックス）
○思へども人の力には限あり、力を添へよ天地の神。
○パウロの言の背後には、彼の人格があたつ。（ストーカー）
○祈は驚のとび得ぬ所に翔けのぼる。（ガスリー）
○大切なるは我らが神の側に居ることなり。（リンコルン）
○我が心に生くるはルーテルに非ず、たゞイエスのみ宿り居給ふ。（ルーテル）
○キリストの靈は我が生活の力である。心はわが生活の律法である。彼の臨在はわが生活の喜である。榮はわが生活の冠である。（ムーデー）
○神のために働かんとするものは、先づ神と偕に居らざるべからず。
○神と偕なる一人は、万人より強し。（西洋名言）
○汝が日常の職分は其の禮拜と同じく汝が宗教的生活の一部である。（ビーチャー）
○汝忍びて神を待望むべし、神は汝を正當の型に鑄造し給ふべし。（ルーテル）

○汝の崇拜するところを語れ、われ汝の人となりを言はん。（セイン・ハーザ）
○余が高潔なる人物を景慕する事は、凡ての財寶、名譽、いな健康にさへも優れりと思ふ。（アーノルド）
○善き行爲は宛ら鐘の如く御空に響き渡るものなり。（リヒテル）
○何よりも第一に品性の向上を圖るべきなり、之なくしては才能も價なく世の成功も無意味なり。
○誠に日に新なり、日々に新にして又日に新なり。（湯　王）
○耐久朋として西洋にゴブデンとブライドあり、支那に管仲と鮑叔の二人あり。
○朋友に二種あるを知るや、本統のは月を二つ並べあり、他は蜂友といふ。（石井十次）
○我は奇蹟を行はんよりも寧ろ服從せん事を欲す。（ルーテル）
○服從は基督者の冠なり。（シラア）
○よしあしの映る姿の影法師よくよく見ればわが姿なり。
○大なる品性とは神の品性に化せられたるものを言ふ。（プシュネル）

例　話

二二三　手を擧げて下さい

ジョン・ウエスレーが、「ヨハネ以來の聖徒である」というたジョン・フレッチャーは、イエスと偕なる生活をした人であつた。その五十六才にして他界するとき、病床に侍りたる夫人は、最早、夫の臨終なるを知り、「若し今でもイエスが、あなたと偕に在すなら、一寸右の手を擧げて下さいませんか、」と言うた。彼は其の如く手を擧げた。少し經つて後、夫人は今一度問うた。「若し榮光に充つる天國が、あなたの前に開けて居ますなら、一寸合圖を願ひます」と。フレッチャーは再びその痩せ細りたる右手を擧げた。斯の如く彼は死に至るまで、深い靈交を保つて居た。イエスは曾て宣うた。「我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」と。（マタイ傳二八・二〇）

二二四　神の臨在

有名な植物學者リンネウスは、神の臨在といふ事を、この上もなく重んじた。友人と談話の時

も、その著述の中にも、また一擧手一投足にも、神の臨在といふ事を、力强く證した。彼は常に神が、己が傍に居給ふ事實を深く感じ、その書齊の扉に、次の如く書いて置いた。「良心に咎めなき生涯を送れ、神は偕に在し給ふ」と。（使徒行傳二四・一六）

二一五　毎日お目にかゝりたい

昔、寛大な王があり、一日、命令を發して次の如く仰せられた。「人民のうち誰でも、その心に有つ願を申出でよ、何でもきいてやるから」と。澤山の人民は陸續と宮殿につめかけ、各種各樣の願をした。金を欲しいと言ふもの、名譽を下さいと申出る者、地位を與へて頂きたい、と希望するもの、その他、健康を、美貌を、子孫をと、思ひ々々の願を述べた。其處へ一人の貧乏人が來て、次の如く願うた。「王樣、毎日御殿に來て、お目にかゝり御話する事を許して頂きたい」と。若し之さへ叶へれば、自分の欲しいものは、何でもきかれる、と思うたからである。

（ヘブル書四・一六）

二一六　影に附添ふイエス

讃美歌作者として名高きフランシス・ハバーガルはイエスと偕なる生活を送つた人である。次の一挿話は、この事を如實に物語るであらう。或人が彼女を訪れると、應接室へ案内された。暫く待つて居ると、やがて扉が開いてハバーガルと、今一人見るからに神々しき御方とが室内に入つて來た。訪問客は咄嗟の聖き雰圍氣に面を伏せた。さて誰方樣であらうと、再び顏を擧げて見直すと、そこにはハバーガル女史の上品な顏のみあつて、他には何もなかつた。彼は心の中で「そんな筈はない、慥かに二人が入つて來られたに相違ないが、」と自問自答したが及ばない、矢張り女史のみ兩眼に映じて、何人も其の室内に居なかつた。挨拶も濟んだ。來訪の用件も終つた。辞してハバーガル家を出た彼の頭には、走馬燈の如く、今一人の御方に關して、思想が往來して居た。時に神が示し給うたのは、それは女史の影に形の如く附添ふ靈なるイエスで在す、といふ事であり、彼も幸ひ信仰の奥義を悟り得る一人であつたから、今更の如く女史の靈的生活に敬服したといふ。イエスの御言なる、「われ汝らに居ることを汝ら知らん」といふは、此處の事を

述べたものであらう。（ヨハネ傳一四・二〇）

二一七　慥かに今一人

アーネスト・シヤツクルトンは、南極探險の猛者である。極地の氷上に多くの部下を遺し、その中の二人だけを伴ひ、大膽にも小さなボートを操り、數百海里北方に當る南アメリカの南端に航し、更に雪と氷との野山を彷徨し、漸くの事に人里へ出で、救援を求めた。幸にして探險船破損後、氷上に置去りとなつて居た隊員は、今一度救はれて起死回生の喜に躍るを得た。シヤツクルトンは、當時の事を追想して次の如く述べて居る。「その當時の事を考へれば、たゞもう神の御導と御保護によつたもの、と言ふ外はありませぬ。のみならず私自身、屢々感じた事は、一行は三人に非ずして四人である、といふ事でありました。成程、それを痛感した時、友人に其の事を一言半句も語りませんでしたが、不思議なことに、ウオースレーが後日私に申しました、親分、目的地に達する途中、不思議な事が強く感じられてなりませんでした、それは僕達の仲間に、今一人の御方が慥かに居られる、といふ事でしたと。此の同僚の告白によつても明白なのは、慥かに今一人、見えざるイエスが私共と偕に居て下さつた、といふ事實であります」と。（マタイ傳二八・二〇）

二一八　マダム・ギヨン

マダム・ギヨンは、信仰によりて義とせられる、及び信者は地上に在りても、聖き生活が送れる即ち聖潔の教義を信じて疑はず、これを主張して止まなかつた結果、教敵のため四年間も獄舍に投ぜられた。彼女は反對者の迫害は蒙つたが、神の惠は豊かに受けた。そして獄舍は彼女にとつて、恰も宮殿に坐する如く感ぜられた。獄中にて作りたる次の歌は、この事を示してゐるのであらう。「われは籠の鳥に似て外に飛び翔けること能はず、わが翼は固く縛られて居れど、わが心には自由あり、獄舍の壁と雖も、わが靈魂の飛び翔ける自由を妨げること能はず」と。聖書には神を信じ、これに依頼む者は新な力を得、また鷲の如く翼を張り、天の高きに翔り昇るであらう、と敎へてある。（イザヤ書四〇・三一）

二一九　室内に來り給ふ主

ルーサーフォードは、スコットランドの名高い宗教家である。信仰の故に迫害され、暫し獄中に投ぜられた。その時の經驗を語つて言うた。「昨晩、イエス・キリストは我が室に來り給うた。あたりの石といふ石は、悉くルビーの如く輝き渡つた」と。ブラムエル・ブースは、大正十五年に日本へも來た事のある名高い宗教家であつた。彼も亦、靈なるイエスと交る、といふ經驗を深く味うた人であり、その言の一節に次の如きものがある。「私が二階の一室で、只管神の御名を呼び、その苦心を訴へ、その指導と御助とを仰ぐとき、イエスは祈を聞き屆けて、閉つた戸の間から入り來り、わが傍に立つて私を勵まして下さつた。そして階下に居る人々は、何事が二階で起りつゝあるかを知らず、隣室の人さへ、いま何事が壁一重へだてた所に行れつゝあるかを、悟る事が出來ないのであつた」と。ペテロの獄舍に來りたる神の使、（使徒行傳一二・一一）陣營の一室に居るパウロに臨み給へるイエス、（使徒行傳二三・一一）の經驗と似て居る。

二二〇　一對さん

或る所に妙な生活をする人あり、人々から「一對さん」と、綽名を附けられてゐた。彼は有闊な農業家であり、家族も多く雇人もあつた。余り社交界に顔出をせず、無口で獨り居ることを好んだが、それで居て彼の態度は決して獨りの如くではなかつた。彼は出づるにも入るにも、恰も他に一人の連がある如く振舞うた。道を往く時は、さも目上の同行者がある如く、恭しく其のお伴するかの如く歩いてをり、道のよい方を其の見えざる同行者に讓り。自分は惡い道の所を歩んだ。食卓には彼の右手の席に、必ず空の椅子が用意してあり、立派な銀の食器、瀬戸物で準備をなし、且つ食事の都度、その食物の上等の所を、空の卓上に運ばしめ、如何にも特別な珍客が居るかの如く、うやゝしい態度を以て、接待するのであつた。そして之に供へた食物は、悉く貧民に施してゐて、仕事をする時も同樣である。余りの不思議に或人がその理由を尋ねると、たゞ一言「あの御方が居らつしやるから。」と答へるのみであつた。この見えざる御方とは、靈なる

イエスで在す、彼は主の臨在を著しく實感し、その日常生活の些細な点に至るまで、主と偕に歩まん事を努めたのであつた。彼は老境に達せずして病床に倒れた。その時、彼の床の傍には一つの椅子が備へられてあり、彼は己が手を伸べ、見えざる主の手を執りつゝ、しみじみと打ち語らうた。彼の靈交ゆたかな生涯は終つた。しかし其の最後を飾る出來事が、埋葬式の時に起つた。將に其の棺が墓に下らんとするや、世の常ならざる光が、その周圍をとりまき、照り輝く如く見えたといふ。（ヨハネ傳一四・一八）

二二一　同行二人

四國は眞言密宗の開祖弘法大師の誕生地である。で此らの靈場を巡拜する四國遍路の旅人が、春より秋にかけて絶えない。昔の風俗畫を見るやうな、白の笈摺姿に菅の笠といふ旅裝で三々伍々、村より村へ、町より町へと遍歷してゆく。斯うした遍路は、幾人かの組もあるが、また可弱い娘の一人旅もある。その笠には「同行二人」と書いてある。即ち佛と同行の意で、この信念あればこそ、娘の身で海山幾百里の旅も、勇氣を出して六根清淨を口誦しつゝ遍路を果すことが出來る。吳で海軍々人のホステルの如きを經營する一婦人あり、用件ありて歐米を巡廻し、歸朝した時、山室軍平先生を訪ね、「今度の旅は同行二人でありました。」と挨拶した。その意味は、キリストと偕に旅行して來た、といふのであつた。神と偕なる生活をする人は力强い。イエスと一緒に人生の旅をする人は幸福である。（ロマ書八・三一）

二二二　面師の顏

或所に上手な面師があつた。毎日、鬼の面ばかり造つて居た時、友人の一人が來ていふた。「君の顏は大變物凄くなつたね、まるきり鬼か夜叉のやうだぜ」と。それから數ケ月後、同じ友人が再び來て、「今度は福々しそうに見えるよ」と、挨拶し乍う面師の造りつゝある面を見たら、それは七福神の面であつたさうな。（コリント後書四・六）

二二三　タウレルと一老人

ドイツの說敎家タウレルが、傳道者となつて間もないころ、尙、思ふやうに善行の出來ぬをか

こち乍ら、ストラスブルグ市の郊外、ライン河に沿ふて漫歩して居た。時に一老人が歩み來るに會ふた。老人は「私にとりては凡ての日が善き日です、惡しき日とては一日もありませぬ、」と嬉しさうに語つた。タウレルは不思議さうに聞いてゐたが、突然一つの質問を發した。「若し神が貴君を地獄に落し入れ給はゞ如何」と。老人の快答は次の如きものであつた。「地獄とは何であるか、私は知りませぬ。しかし私の知つて居る事があります。それは主が私から離れ給はない、といふことです。一方の腕なる謙遜が、主の人間性を抱き、他の腕なる愛が彼の神性を摑みます。それで私の往く所は何處へでも彼が往き給ひます。主なくして黄金の天國に在るより、彼と偕に火の地獄に居る方が優つて居ます」と。（ダニエル書三・一五―）

二二四　美しき生涯の秘訣

チャーレス・キングスレーは、稀に見る美しき生涯を送つた人であつた。或人が其の秘訣を尋ねた。彼は唯一言いうた。「僕には一人の友がありますから」と。一人の友とは誰か、イエス・キリストである。彼は尊き友、いつくしみ深き友、且つ理解深き友である。

二二五　否が應でも基督者に

ピータース・ボロー卿は、とても頓智のある人で、年が年中面白い事ばかり言ひ、聞く人々をあつと驚かしたり、笑はしてばかり居た。處が或時、有名な聖徒フェネロンと、暫し生活を偕にする事となつた。彼は此の聖徒の起居振舞を見、その德に感じ入つて深く嘆息して言ふた。「私が今少し長くフェネロン君と、一緒に居たならば、否が應でも基督者になつたに相違ない」と。（ヨハネ傳一五・四）

二二六　水も漏さぬ交際

英國ランカシヤイヤでの話、數人の村人が集り、その牧師につき種々噂してゐた。彼が一方ならぬ成功を收め、說敎も中々立派で力あり、その感化は實に大であつたから、各自は其の成功の原因に就き語つた。或者は牧師の天稟だといひ、他の者は「いや風采が立派だから、」と述べ更に別

の人は、その態度や動作が神々しいからだ、と思ひ思ひに語つた。すると一老婦人が現れて、「あの方は全能の神と、水も漏らさぬ交際をなし、常に神と偕に居られます、」と言ふた。そして一同は此の老婦人の判斷が、最も適當であるを知つた。（ヨハネ傳一五・七）

二二七　神と知合の間柄

神の人ジョージ・ミュラーは、神と靈交の大切なるを敎へ、次の如く言ふた。「諸君は心の奥から、神と知合になつて居るか、神は誠に愛すべき御方だ、と言ふことが出來るか。若し出來かねるとあれば、切に御勸めする、神に願つて其の狀態にまで達し、神の善なる御意を知り、その柔和と愛とを讃美し、主の愛し給ふ人々に善をなすは、如何に樂しき哉と、いひ得るよう祈るがよい」と。（默示錄三・二〇）

二二八　あいエッチヤマ！

昔から「人は四十才になつて後は、その顏に責任がある、」と言はれてゐる。その意味は、若年の頃は思想いまだ定らず、品性未だ磨かれず、自然その顏の粗暴なるは止むを得ぬ。しかし四十才ともなれは、既に相當の品格を具へるのが當然である。で其の年輩に達しても、尙その顏が下品なのは、本人の責任だ、といふことである。英人アーノルドは、曾て己が同胞中に下品な顏の余りに多いのを嘆き、「わが國には泥の如き顏の人が多すぎる、」と言うた。印度の聖徒サンダー・シングは、天性イエスに似た顏の人でもあつたらうが、青年のとき基督者となり、立派な信仰生活をしたので、聖徒の品を具へてゐた。これは彼に會ふた人の、誰もが證する所であつた。次の如き挿話あり、この事を裏書するに十分であらう。彼が米國で說敎して居た時、最前列に坐つてゐた三年六ケ月になる一少女が、一時間に亘つてぢつと彼の顏を眺めてゐたが、遂にたまりかねて一聲叫んだ。「あい、エッチヤマ！」と。（コリント後書四・六）

二二九　大納言以上の品格

伊東仁齊は立派な學者であつた。甚だ恭謙にして、無理に莊重な風など作る人ではなかつたが、それでも人々は彼の容貌を一見し、「仁齊先生は、たしかに大納言以上の品格がある、」と

互に語り合ふたものである。之と似た話は西洋にもある、マツクオールは信仰篤き基督者であつた。彼がバリーで死んだ時、曾て無政府主義者だつた一勞働者が、彼の棺の側で泣いてゐた。或人が「あなたは御親戚か、」と尋ねると、「否」と答へたから、更に、「ぢや何故そんなに泣いてゐるのですか、」と問ふてみた。勞働者の答は、「この方により救はれました。」といふのであつたから、もう一度質問をして、「此の人が何とか申しましたか、」といふた。彼は頭を左右に振り乍ら、「いゝえ何とも言ひませんでした。その顔が語つて呉れました、」と答へた。即ちマツクオールの顔が、イエスの救を物語つたとの意である。（マタイ傳二八・一九）

第十七　聖　書

金言・名句

○聖書とは印刷されたる神なり。（エス・ゴルドン）
○御言を鏡となして映しみよ、己の心の姿いかにと。
○聖書は聖靈によりて書かれた書物であるから、聖靈を受けない人には判らない。（ジョージ・フォックス）
○祈は火なり、御言は薪なり。
○讀め、信ぜよ、從へ、勝て。（ウイリアム・ブース）
○聖書は私共に最も善良なる生活の仕方と、最も高尚なる苦勞の仕方と、最も安全なる最後の遂げ方を敎へる。（フレーベル）
○青年よ此處に生前いくらか世に知られたる者の最後の言に耳を傾けて貰ひたい。それは時を定めて聖書を讀め、といふことである。（サムエル・ジョンソン）
○聖書は鏡なり以て心の姿を正すべし、聖書はパンなり以て靈の生命を養ふべし、聖書は劍なり以て救の軍をたゝかふべし。（山室軍平）

○吾人はパンと鋸屑の區別するを要す、即ち神の言は天來のパンにして靈魂を養ふべき唯一の食物なるに、しかるに世間の名利肉慾の徒が鋸屑のみを食し天與のパンを棄てゝ顧ざるは愚の至なり。（ムーデー）

○善き書物を愛するよりも、寧ろ自ら進みて活ける善き書物となるに如かず。（フェネロン）

○唯聖書と聖書字典のみ余が著述の圖書館なり。（バンヤン）

○神の內住といふ事は、聖書を開く鍵である。この眞理を實驗する迄は、聖書は封印せられたる書である。（ゴルドン）

○私共に天國を敎ふる聖書は、また地獄を說いてゐる。（ムーデー）

○聖書を知らずしては、到底歐米文學の眞髓を知り、之を咀嚼する事能はず。（內村鑑三）

○聖書を讀まずして一日たりとも過してはならぬ、それは決して陳腐となる事はない、之は世界唯一の書である。（ウイリヤム・ブース）

○聖書は聖書自ら解釋するやう出來てゐる。

○聖書は不信者の烈火で試られたが毫も害せられず、前よりも更に信任を得た、殊に幸とするところは、聖書が實驗といふ試金石で試みられしことである。（マースデン）

○わが携帶の品は唯一卷の書のみ、しかし之は世界最善の書である。（コリンス）

例　話

二三〇　漂着せる聖書原稿

今から二十余年前のこと、アフリカに傳道中の一宣敎師が、長い間かかつて土語に飜譯した聖書の原稿を、印刷に附するため船に乘つて英國に向ふた。折柄ヨーロッパ戰爭の最中であり、地中海ではドイツの潛航艇が猛威を振うて居た。彼の乘りたる船も其の攻擊を受け、沈沒の憂目を見、乘船の全員は悉く海底の藻屑となつた。さり乍ら將に船が海底に沈まんとする時、かの宣敎師は多年苦心を重ね、努力を拂うた聖書の原稿を救ひたいと思ひい、乃ち之を箱に入れ、添書と共に浸水せぬよう密封し、これを海中に投じた。この原稿の運命は、神のみ知り給ふ所で、人の目には未知數であつた。然るに此の箱は、暫く後、チュニスの海岸へ漂着した。そして土地の人々の手に發見され、次に英國人の手に渡り、宣敎師の遺言通り印刷せられ、昭和四年六月に製本された。そして此の土語聖書が、折柄オックスフォード大學へ在留中の、アフリカ土人なる一學生

の手に渡されたといふ。（マタイ傳二四・三五）

二三一　指と舌とで愛讀

ロンドンの或る橋上に一盲人が熱心に點字の聖書を讀んで居た。使徒行傳第四章の「他の名」といふ所を、何遍も々々も讀み返して居るので、先程から圍に立つて見てゐる群衆は、面白半分に笑ふてゐた。そのくせ彼等は立派な兩眼を持つて居ながら、聖書を讀まうとしない輩であつた。其の中に人品賤しからぬ一紳士あり、盲人の指先と其の凸字とを注視して居たが、甚だ深く感ずる所あり、歸宅後、この「他の名」といふ所を熟讀翫味し、遂にイエスの名に依らざれば、救はれないとの眞理を發見し、信仰の道に志した。米國カンサス市の場末にマクフアーソンといふ人あり、數年前作業中ダイナマイトで大負傷をした。兩手を失ふばかりか、顏面の肉は飛び、兩眼つぶれて盲目となつた。最早、讀書する事すら出來ぬ氣の毒な身の上となつた。点字の聖書ありと聞き、之を求めて讀まうとしたが、指はなく唇も亦ないので如何とも出來ず、思案に余つて舌で讀み出した。幸に讀め出したが、最初の程は舌の先から血が滲み出て困つた。それでも偉いもの、創世記の初めからヨハネ默示錄の終まで、はや四回以上讀んだといふ。兩眼あるもの赤面せざるを得ぬではないか。（詩篇一一九・一〇三）

二三二　決鬪に使用せし活人劍

文豪ウオター・スコットが、この世的な一婦人を信仰に導いた。彼女は今迄通りの虚榮を改め、急に地味な生活をし出したのを見た父は、甚だ世俗的な男であつたから、この上もなく憤慨し、スコットに決鬪を申込んだ。彼が騷がないで其の男に對面し、「決鬪の御申越に對しては、同意申上げます。しかし私の使用する武器は、私が勝手に決めるから、左樣御承知ねがひたい、」と言ひつつ、懷中から一卷の聖書を取り出し、それに基づいて如何に世俗の歡樂が、果敢ないものであるか、といふ事を說き、熱誠をこめて語つたから、其の男はすつかり恐縮し、決鬪を取消すのみか、其の時から浮いた生活を悔改め、娘と同じ信仰に入つたさうである。此のスコットが臨終前の事である、傍なる友人のロカート博士に、「私に少し讀んで頂きたい書があります、」といふた。ロカートは眼を轉じて、スコットの最も美しい書齊の、四方にある書棚の二万冊もの書

籍を見て、「卿は何の書を最も愛好せられますか、」と尋ねた。文豪は奇異の感に打たれ答へたのである。「なぜ其のやうな事を尋ねなさるか。書物といふのは唯一つ、それは聖書であります」と。ロカートは聖書を持ち來り、將に他界せんとするスコットの前で、喜びつゝ聖書の一句を讀んだ。文豪の口邊には、一しきり微笑が漂ふた。（ヘブル書四・一二）

二三三　新渡戸博士の聖書觀

新渡戸稲造博士は、人も知る如く聖書の愛讀者であつた。晩年のこと、一講演會の席上、手にせる一卷の聖書を、感慨深くぢつと眺めながら、次の如く言ふた。「私は青年時代にカーライルの書を愛讀した。別してサーターレザータは聖書に次いで愛讀した。そして幾回となく讀んだものである。しかしそれも近年は殆んど手にしなくなつた。だが聖書は違ふ、之は年のすすむにつれて益々その味が深くなつて來る。讀めば讀むほど尊く感ずる」と。（マタイ傳四・四）

二三四　女優にルッ記を讀ます

米國のフランクリンが大使として佛國の朝廷にあつた時、同國は恰も革命前のことゝて、無神論が最も盛に唱導せられてゐた。フランクリン彼自身も、時のキリスト教に對しては、余り熱心な人ではなかつた。本國では寧ろ無宗教家と見なされてゐた。處がフランスで當時の學者と稱する人々が、口を極めてキリスト教を嘲弄するを聞き、彼等の淺薄と不敬虔とを深く嘆じた。一日、その學者等と相會したとき、相變らず彼等が、聖書を惡口し、その文學的價値の乏しきを笑ふので、乃ちフランクリンはホテルに宿り合せて居た一女優に乞ひ、此ら學者の面前で舊約ルッ記を讀んで貰うた。その書名を明さず、紹介して言ふた。「私は近來、東洋の舊い記錄から一つの佳話を見附けたから、今から女優某さんの親切により、これを諸君の前で朗讀して貰ひます」と。學者らは其の文意の高尚、その趣旨の單純を賞讃し、フランクリンの厚意を謝した。その何處から斯る文章を得られたか、と尋ねられた時、彼は答へて言ふた。「これ實に貴君らが嘲罵する舊約聖書のルッ記であります」と。哲學者らは大に恥ぢて赤面し、返す言なく一人去り、二人歸り、最後にはフランクリンと其の女優のみになつた。（詩篇一一九・九八―）

二三五　大詩人に及ぼした影響

ダンテの名作「神曲」を讀んで發見することは、彼が新舊約聖書を熟讀して居た事實である。彼の著作中には、二百回以上に亘つて聖書の教が引用されて居るといふ。ミルトンの「失樂園」を讀んで、誰でも氣が附くことは、これが舊約の創世記に基いて書かれて居る、といふ事であらう。セクスピーヤは人も知る如く、表面キリスト者ではなかつた。しかし其の人生觀は、キリスト教的醇化を經たものである。テニソンの「イン・メモリアム」は、友人アーサー・ハラムといふ青年が、伊太利の旅空で客死したのに關し、果して來世はあるか、果して神は存在するか、果して人間は死後に救があるか等、自分の煩悶を書き綴り、最後にイエスに於て、眞に平和と慰安とを見出すことが書かれてある。（詩篇一一九・一三〇）

二三六　新島先生と石臼

京都の同志社神學校前に挽臼がある。これは新島先生が同志社創立當時、机の代用として使用せられたものである。先生は學校で聖書を繙くことを其の筋から嚴禁せられ、止むを得ず近所の豆腐屋へ行き、この石臼を机代用として、その上に聖書を開き、その貴き教を垂れたのである。先生が聖書に親しまれること既に久しかつた。渡米の途中、船が香港に碇泊した時、一日上陸して市中を見物中、圖らずも一店頭に漢譯聖書あるを發見し、是非これを一冊手に入れたいと、懷中を見たが所持金なく、思案に暮れた揚句、船に歸つて自分が大切に所持する小刀を持ち出し、事の由を船長に打明け、八弗を貸し與へられて、この聖書を買ふた。彼は恰も深山に寶を見出した如く、これを手にするや、一目散に船へ歸り讀み出した。かくて航海中マタイ、マルコと順序を追ふて讀み耽つたが、そのヨハネ三章十六節に至つた時、己が苦しき体驗から割り出し、この上もなく感銘した。その一句といふのは、「それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」

二三七　四十年間の精讀者

ヘレン・ケラーは盲目で啞で、その上聾者である。然るに此の不自由な彼女が、四十年以上も聖

書を精讀し續けて居るとは、全く驚くの外はない。米國聖書會社では、二十冊だけ別製の點字聖書を作つたとき、その一冊をケラーに贈つたら、次の如き禮狀が會社に屆いた。「火曜の晩方、私が食事して居るところへ、あの新しい聖書が屆きました。余りの嬉しさに、食事の中途ではありましたが、包紙を開きました。大層美しい製本ださうで、目方も輕く、讀むに便利であります。私は四十年間、神の御言なる聖書を愛讀して居ります。聖書は牧者の杖のやうに私を戒め、神の道から踏み迷はぬよう守つて呉れます。救の道を示す聖書のみ、人を暗黑から助け出します。この世の人々が若し、イエスの御敎なる、汝ら互に相愛せよ、といふ事を行ふたなら、お互にもつと幸福な世渡が出來る筈であらう、と思ひます」と。

二三八　ドストエフスキー

文豪ドストエフスキーは、秘密結社に屬してゐた、といふ理由で、千八百四十九年四月二十三日に捕縛された。この結社といふのは、自由思想を有する藝術家達により組織せられて居た。然るに其の夏には、取調の結果、死刑の宣告を受けるに至つた。更に十二月には絞首台上に登るべき運命と定められたが、その愈々といふ時、露帝ニコラス一世の勅使が來て、一命を助けシベリヤへ流刑、といふ事になつた。オムスクから愈々シベリヤへ護送せらるゝ時、二婦人が來て彼の手に一冊の書を渡して行つた。これは聖書であつた。この一卷の聖書が流刑中の彼を慰め勵まし、よき伴侶となつた。そして遂に彼をして「驚くべき聖書の愛讀者」と化した。その娘が語る所によれば、此の聖書の余白には、字が讀めない迄に多くの書入がしてあるとのこと。

二三九　聖書を攻撃した人々

元來、人間は罪を棄てる事を好まぬ。自己を否定する事が嫌ひである。また其の高慢を踏みにじられる事を、好かぬものである。それで罪を棄てよ、自己を離れよ、高慢を放棄してしまへ、と要求する聖書を憎む。その結果、これを滅さんと企てゝ起上つた人々が少くない。セルサスは其の卓越したる天才を以て、聖書を甚く非難したが、結局は失敗に終つた。その深淵なる哲學を以て、攻撃したのはボルフキリイであつたが、彼も亦敗北者の一人となつてゐる。鋭い諷刺を以て聖書を攻め立てたのはルシエンであつたが、彼も亦前者達と同じく、失敗者の仲間に加へら

れた。次に起つたのはダイオクレシヤンで、彼は武器を以て聖書を排除してかかつた。最大帝國の軍隊及び其の政治的威力を以て反抗した。聖書と名づく書は、悉く焚き盡すべき命令を發布し、更に之を所有する民は死刑に處する、とまで狂奔したが、矢張り失敗した。二十世紀の今日まで、引續き聖書に對する攻撃は止まぬ。而も聖書そのものは、嚴然と存在するのみか、その翻譯文の如き年々歳々增加し、今日では九百五十以上、將に千を以て數ふる國語又は地方語に譯出されるに至つた。この一事を以てしても、聖書は神の書である事がわかる。（マタイ傳二四・三五）

二四〇　妻に死別れた夕

ジョン・アンゲル・ジエームスは、毎土曜の夕、家庭祈禱會で詩篇百〇三篇を讀むのが習慣であつた。然るに不幸にして、彼の妻が土曜日に死んだ。多年連添うた妻を喪ひし彼は、遣瀬なき思を以て夕を迎へた。常の如く祈禱會を開いたが、彼は聖書を手にしたまゝ、暫く讀み出すのを躊躇してゐた。やがて神を仰ぎ「今週どんな事が起つたにせよ、聖書を朗讀する事を、中止すべき理由は何もありませぬ。」とて、次の文字を聲高々と讀み出した。「わが靈魂よエホバを讃めまつれ、わが衷なる凡てのものよ、其の聖き名を讃めまつれ……その凡ての恩惠を忘るるなかれ」と。

二四一　ガンヂーと聖書

印度の聖者ガンヂーが、各地を歴訪した時のこと、或る田舍の停車場に着くと、忽ち數千の民衆が集り、異口同音に「メッセージ・メッセージ」と、言ひつゝ彼を取りまいた。時に彼は懷中から一冊の書物を出し、或る頁を引き裂いて、これを民衆に與へた。それはイエスの「山上の垂訓」が記された所であつたが、彼は明らさまに、之を聖書の文句だとは言はないで、次の如く語つた。「諸君、これだ。これを讀むのでなしに、この通り生きるんだ」と。つまりイエスの敎を手と足とに飜譯して讀む、換言せば實行に移し、生活に織り込むことだ、と言ふたに外ならぬ。（マタイ傳七・二四―）

二四二　血線の引きある聖書

石井十次先生が未だ一貧書生たりしころ、引照附の新約聖書が慾しいと思ふたけれど金七十五錢といふ大金は、彼にとつて容易ならぬ金高であつた。それで彼は一兩日間斷食し、その食費を見積り、これに幾分の金を加へて漸く一冊手に入れた。彼は此の聖書を愛讀した。殊に次の二聖句には、血の線が引いてあつた。「われ汝らに例を示せり、こは我が汝らになしゝ如く、汝等にも爲さしめんとてなり、」（ヨハネ傳一三・一五）及び「若し我が兄弟骨肉のためならんには、われ自ら詛はれてキリストに棄てらるゝも亦ねがふ所なり。」（ロマ書九・三）

二四三　ペスタロッチーと聖書

大教育家ペスタロッチーは、聖書を愛讀した人である。一八一五年に彼の妻が死んだ時、彼は其の柩の上に聖書を載せ、次の如く言ふた。「私共兩人は此の聖書の力によつて、清き愛を味ひ、長年の間いろいろの困難とも戰ふて來た。貧困の極、相共に乾いたパンを食した時も、神の御意に逆かざらん事を努めた。その神の御敎によつて、私共兩人は今や幽明その境を隔つるとも、精神的には相共に在るなり」と。（マタイ傳二八・二〇）

二四四　五百回以上も忠告す

近世のリバイバリストなるフィンニーは、聖書を以て他の如何なる書にも優るもの、として愛讀した。勿論、他の有益な書を全然讀まなかつたのではないが、ほんの少しであつた。それ故、彼は信仰に志した人や、又は、福音傳道に献身し、準備中の青年たちから、何を讀んだら宜しいか、と問はれたをり、「聖書を御讀みなさい、」と答へるのが常であつた。成程、時と場合によつては、他の名著を紹介せぬではなかつたが、大抵の場合は聖書をすゝめた。そして同樣の返事をした事が、前後五百回以上に及ぶだらう、との事である。如何に彼が聖書を重んじたかゞ、判然とするではないか。（テモテ後書三・一六）

二四五　聖書會社創立の動機

今から百年程の昔、英國の山間にメリー・ジョンスといふ少女があつた。聖書を買求めたいと思ひ、古い靴下を貯金袋代用とし、銅貨を一枚また一枚と蓄へた。漸く買へるだけの金額に達し

たころ、バラといふ町でトマス・チャールスといふ善人が、ウェールス語の聖書を幾冊か販賣してゐると聞き、彼女は躍り上つて喜び、早速、旅の準備を調へ、たゞの一人ではあつたが出掛けた。未だ汽車など發達してゐない昔の事とて、高い山や、廣い野や、寂しい所を通つて、漸く足を曳り乍ら、目的地に達した。喜び勇み其の販賣人の家に來意を告げたが、殘念なことに全部賣切れて、一冊も殘品はなかつた。がつかりしたのはメリーである。それより尙、氣の毒でたまらなかつたのは、善人のトマスであつた。メリーが再三再四の賴みに、漸く無理算段して、一冊を彼女の手に渡し、歸らしめる事になつた。メリーは鬼の首でも取つたかの如く、ほゝ笑みつゝ輕い足を運ばせ、今一度野越え山越えて、わが家に歸り之を愛讀した。此の美しいメリーの聖書物語が、英國の津々浦々に知れ渡ると、有志達は集り、もつと容易に聖書が、手に入るようするのは自分達の使命である、と痛感する所から一製造會社が組織された。今日大英及び外國聖書會社とは其の會社の事である。（ヨハネ傳一〇・三五）

二四六　喰人酋長と聖書

近世のこと、喰人種族の一酋長が、熱心に聖書を讀んで居た。彼は以前、人間の肉を食ふといふ恐しい仲間の者であつた。折柄、海外より來れる一商人通りかゝり、酋長が殊勝氣に聖書を繙いてゐるのを見、つかつかと近寄つて言ふた。「君の讀んでゐるのは何の本かね」と。酋長は即答して、「聖書です」と言ふた。商人は言を續け、「それはどうも時代後れの書で、讀んでも一向益がありませぬよ、」と言ふた。この時、酋長はきつと向き直り、「然ふですか、ぢや申上げませう。若し聖書が私の手に入つて居なかつたら、そして神と罪と救とを、示して呉れなかつたなら、貴君は今頃、私の餌になつて居たでせう、」と答へた。商人は二の句が出ず、さつさと往きすぎた。（使徒行傳一七・一一）

第十八　艱難

金言・名句

○可愛い兒には旅をさせ。

○艱難なんぢを玉にす。

○反對は熱心家を燃え立たすれども、之を變心せしめ得ず。（西洋金言）

○我と力を競ふ者は、わが筋肉を逞しくし、我が技倆を長ぜしめる。畢竟われらの敵は我うの援助者である。（パーク）

○艱難の尙この上に積れかし、限りある我が身の力ためさん。（熊澤藩山）

○不可能といふがあるか、新聞でも見ろ。（ウエリントン）

○聖書を讀む事と、祈をすることゝ共に、信仰の增進に必要なるは、難義をすることである。（ジョージ・ミューラー）

○忍耐と時間とは万物を征服する。（コルネイル）

○倒されし竹はおのづと起き上り、倒せし雪は消えて跡なし。

○一時雨しぐれて元の月夜かな。

○困難の年季奉公は、偉人たる者の必ず經たるところなり。（泰西金言）

○吾人は他人の成功を見て羨めども、その原因たる勞力、苦痛及び危險に思ひ到らざるなり。

○水夫が腕前を示す所は風波ある海なり、將官の勇氣を試みる所は戰場なり、大事に臨みて人の偉さは知らるゝ。（ダニエル）

○偉人出でゝ其の思想を唱道せし所には常にゴルゴタあり。（ハイネ）

○わが成功の秘訣は困難の來る毎に一歩また一歩を進めたること。（ウイリアム・ブース）

○來れよ、生涯の余り遲く來らぬように、余は貧乏に告げざるを得ざるなり。（リヒテル）

○偉人の傳記は多く艱難及び、失敗に對する不斷的戰爭記なり。

○成功を經て成功す、と思ふは誤なり、人は失敗を經て成功するものなり、人の最もよき經驗は失敗よりなる。

○幸福を人生目的の極致とせば、苦痛はその目的を達するに必要なる條件なり。（西洋名句）

○余にして若し病身にあらざりせば斯の如き大事業に成功せざりしならん。（ダーウィン）

○最もよく堪え忍ぶ人は、最もよく爲し能ふ人なり。（ミルトン）

○神は桃源鄕に至る道に勞作と勤勞とを置き給ふ。

例話

二四七　七十遍目に成功

豪傑タメルランは、或時の戰に利あらず、敗北して逃げ出し、生命からがら或る荒屋に隱れた。時に一匹の蟻が彼の眼前を、身に不相應な重い穀物の一粒を曳きつゝ、壁に這ひ上がらんとして居た。彼は此の一昆虫が、不可能なことを企てゝ居るを、甚だ興味深く見て居たが、案の錠、蟻は第一回を失敗した。第二回も不成功に終るのみか、十回二十回、五十遍六十遍、遂に六十九遍まで失敗を續けた。目を丸く且つ驚異を以て、彼は第七十遍目を凝視してゐると、こは如何に、到頭一粒の穀物を無事に運んだ。「でかした、でかした」と彼は思はず叫んだ。同時に失望して居た其の心に、大なる希望が泉の如く湧き來り、一大決心と共に起上つた結果、遂に成功するに至つたといふ。（使徒行傳一四・二二）

二四八　艱難の珍客來る

ジョージ・メリアムは、艱難の來客といふ、美しい而も教訓的な詩を作つた。「なんぢの家に來客あり、その名を艱難といふ。なんぢは此の客を、その客室に案內せんとするか、はた又、面會を謝絕せんと慾するか。なんぢ若し彼を招き應待せば、彼は土產として忍耐、剛毅、克己、智慧、同情及び信仰の如き珍しい寶を、汝に進呈するであらう。なんぢ若し面會を謝絕せば、彼は汝の手に憶病、懦弱、孤立、失望及び落膽などの如き進物を遺して去るであらう。」それ故、汝は艱難といふ珍客を歡迎せねばならぬ。

二四九　正宗の鍛へ上るまで

世界に誇る日本刀が、鍛へ上るまでには容易ならぬ苦心がある。まづ刀師たちは齊戒沐浴し、身も心も潔めて後、原料の玉鋼から鍛へ上げるのである。伸べては返し、返しては伸べ、何回も繰返す。そして遂に驚くなかれ、八百四十万七千枚折り重ねてゐる。斯の如くして精鋼が水をく

ざり、火の中を通り、更に鎚で打ちのめされ、鍛へ上げられる。若し正宗の銘刀をして、その自敍傳を書かしめたなら、人知れぬ苦心慘澹たる物語により、表紙から裏表紙まで滿つるであらう。艱難なんぢを玉にす、とは此の事であらう。（ヘブル書一二・五―）

二五〇　三脚巴の紋章

イギリス本島とアイルランド島との中間にマン島といふのがあり、尾のない猫を産するのと、三脚巴の紋章の故に有名である。私共はドイツの卍巴には親しいであらう。これは脚が四本あるが、このマン島のは三本である。これが同島を示す紋章となつてをり、その下に「僕を何處なりとも投げ出して見るがよい、さらば僕は其處で立上るであらう」と書いてある。この紋を使用すると否とは自由なるも、この紋の示す精神は、何人と雖も所有したい。然らざれば艱難に吹きとばされ、そのまゝ倒れてしまふであらう。

二五一　リリー・バールの詩

神の植ゑたまへる樹は、風これを吹き倒す能はず。風は東に吹き西に吹くも、幹そのものゝ倒るべきおそれなく。唯その葉が風のまにまに動くのみ、その動搖は樹の發達を妨ぐるに非ず。寧ろ風雨に逢ふて幹いよいよ高く、枝いよいよ廣く、根益々深し。（ヘブル書一二・一〇―）

二五二　閉め出されて正氣づく

長距離を往復する乘合馬車があつた。寒中でもあつたが、途中で氣候が急變した。折柄乘客中に乳兒を抱ける一婦人あり、子供は兎も角、母は薄着のため到底凍死を免れぬかと思はれた。この事を十分承知してゐた御者は、親切に己が襟卷などで包んだ上、一刻も早く人家のある所へと急いだ。一方御者は、大聲をかけて返事を求めたが、寒氣強くして遂に昏睡狀態に陷つた。斯くなつては全く危險である。御者は最後の一案を考へついた。乃ち車を止め、子供を抱きとり、これを毛皮に包んで腰掛の下に隱し、次に婦人の手をとり、荒々しく車外に曳き下し、扉を「ピシヤリッ」と閉めたまゝ、一目散に驅け出した。婦人は此のとき始めて正氣づき、子供の事が心配で狂氣の如く後から追ひかけた。そのため体溫は回復して來た。御者は最早危險なし、と思ふた

ので漸く車を止め、彼女を乘せて目的地に達した。神は人を救はんとなし給ふとき、屢々この御者の如き方法をとりたまふ。（ヘブル書一二・一一）

二五三　麥芽を踏む百姓

麥の穗がよく出來ると、一つに四百五十粒も出來るものである。しかし生えたまゝの莖では、そんなに多くの粒を支へられず、自然八十か九十粒しか出來ぬ。それで百姓は、麥が芽を出すと泥足をもて踏みつけて歩く。ひ弱い芽は折れる、しかし再び起ち上がらせて力をつける。すると今度は幾百粒なつても、びくともしない。踏むのを可愛いさうだ、と思ふは物事の理を知らぬ、淺墓な考方である。舊約のヨセフの生涯を見ると、此の事を裏書してゐるであらう。（創世記三七・一一）

二五四　油井に射込む

新潟縣は日本に於ける石油の產地である。所が此の油井（イウセイ）は年が年中同じ勢を以て噴出するものではない。時には壓力が弱つてしまふ。初めての人は、最早その湧出が中止したのかと思ふ。此の時、執（と）るべき方法が一つある。即ちダイナマイトを油井の底に落し込む、そして爆發させるのである。すると大地に裂目や、トンネルを作つて、石油が多量に噴出する、時に空中高く噴きあげる。これを彼らの仲間で「油井に射込（いこ）む」といふ。（詩篇四二・一）

二五五　赤ん坊を發止々々と叩く

赤ん坊が母の胎內を出づや、まづ「わツ」と泣きたてる。これは彼にとりて極めて必要である。この事によりて、呼吸が始まり、肺も十分使用出來るやうになる。ところが數多い赤ん坊のうちには、「わツ」と泣けぬ子があり、そんな時には醫師が兩脚を持つて、逆さになし發止々々と叩き、これに刺戟を加へる。大低は息を吹き始めるが、それでも尙、呼吸の出來ぬ子は、冷い水を用意してをき、その中に入れて刺戟を與へる。その他いろいろの方法もて、何とか呼吸の出來るようにする。祈は信仰生活の呼吸である。祈の止まつた者は危險である。神は今一度これに息を吹き返へさせんと、各種の方法もて發止々々と叩き給ふ。（ヨブ記一・一三―）

二五六　飛び得ざる蛾を見よ

一昆虫學者あり一個の繭を持ち來り、己が書齊に吊して春の來るのを待つた。やがて蛾が發生する時期となり、今にも繭を喰ひ破り、出でんとする狀を見、興味を注いで研究してゐた。處が其の穴が小さくして出切ること能はず、大に苦しんでゐる如く見えたので、彼は鋏を以て其の穴を大きくしてやつた。蛾は何の苦もなく這ひ出た學者は蛾の難產を助けた心算であつた。しかし乍ら其の蛾は飛ばなかつた。何故か、即ち蛾は小さな穴から出でんと苦心する時、その液汁が翅に集り、これを强くなし、以て飛び得る力を與へるのであつた。蛾にとつて苦しむ事は、是非必要であり、之なくば生存に堪えられねのである。苦しむ事には深い意義が在る。

二五七　敵に見ゆるも味方

古來、艱難の味を知つた人は、千金の重みある言を吾人に遺した。次に示すは信仰篤き某氏のものである。「艱難は實に重荷である。しかし考へて見れば、これは鳥に於ける翼の如く、また魚に於ける鰭の如く、更に又、舟に於ける帆の如し。人は之によりて天を翔る、淵に躍る、そして彼岸に到達する。かくして吾人は、艱難によりて神に立歸り、人心に觸れ、また自己を制御し得る。艱難は敵の如くに見えて、實は味方であり、憎むが如く思はれて、實は吾人を愛するものである」と。（マタイ傳一四・二二―）

二五八　ヴアイオリンの胴材

ヴアイオリンの胴には、伊太利ヴエネチヤの杉が一番よい、といふことである。然らば何故に其のやうな良材が出來るか、それには次のやうなわけがある。山奥で伐採された材は、岩石峨々たる谷間に轉ばし落される。それから水に流されては岩に當り、再び流に押されては又、岩とぶつかつて川まで下る。こんな具合に水や岩に揉まれて居る間に、材の分子や木目が丁度よい調子になり、樂器の材としては、もつて來いの品になるからだ、との事である。

二五九　苦勞なき地あらば告げよ

「月よ汝は隈なく照すなり、われに語れよ津々に浦々に、山の端も谷間の庵も、いとはぬぞか

し。若しも苦勞なき土地あらば、願くば我に敎へよ、我は財産もなげうちて去り、また官爵をもかなぐり捨てゝ、直ちに去つて其處にぞ往かん。風よ汝は地球を廻るなり、我に敎へよ、北氷洋の氷の道、酷暑道の沙漠の旅、我はさらさら厭はぬぞよ。若しも苦勞なき土地あらば、我は直ちに其處にぞゆかん」（某詩人の作）

二六〇　難有るは有難いこと

先年尾崎行雄氏が米國に行かるゝ前、當時、長州の秋吉に在住の本間俊平先生を訪問せられた一臺の自動車から尾崎氏が出て來られたので、本間先生は人違ひではあるまいか、と思うたが矢張り間違ひではなかつた。一通りの挨拶が濟んだ時、本間先生は開口一番、「貴君ですか、國難あり國難あり、とやかましく仰せられるのは、」と尋ねた。尾崎氏は頷きながら、「如何にも左樣、私であります、」と答へられた。先生は傍にある白紙一枚を机上に展べ、墨黑々と「難」の字をかき、「この字を貴君は、何とお讀みですか、」と聞いた。氏は「それは難しである、」と即答された。先生は次に「有」の字を書き加へ、「これは如何にお讀みですか、」と尋ねた。「難有りである。」と氏が返事されるや、「しかし讀みようにより、また考へようによつては、有難しだと存じます。即ち國に難有るは、國家のため有難いこと、もし大難有りとすれば、大有難であると考へますが」と、先生一流の艱難禮讃論をされるや、尾崎氏は「聞きしに優る物知りだ」と一言いうて辞去されたといふ。（詩篇九四・一二）

二六一　沙漠に蜃氣樓

米國のアリゾナ州や、南加州のデス・バレー即ち死の谷は甚だ荒れた地である。その上非常に暑くて、到底堪えられぬ程である。日蔭でも百二十度から百三十度もある。然るに此の荒野なるアリゾナ州でなくば、見得ぬ美しいものがあり、それは蜃氣樓である。それが他所で見えぬ美しさであり、一度これを見た人は、必ず快哉を叫んでやまぬ。斯る美しい蜃氣樓が、花咲き匂ふ花園や、綠滴る森林に見えず、萬目悉く是岩石といふ沙漠に見ゆるとは不思議である。しかし全能者が此の事實を通じて何を語り給ふか、それは人情の美しき蜃氣樓は、艱難や苦勞の沙漠に於て、更に一層美しく見える、といふ事ではないか。ミルトンの「失樂園」や、ダンテの「神曲」、さては

バンヤンの「天路歴程」など、世界屈指の名作は、不自由なき樂園の夢にあらで、艱難、不幸、失明、放逐、困難の荒野で見た幻に外ならぬ。（詩篇一二六・五）

二六二　艱難を以て人を審くな

ブレンチウスは言うた。「他人が艱難に遭うた時、その艱難を以て其の人を審くべからず、その人格を以て其の艱難を審判すべし」と。内村鑑三先生は、彼の言を裏書したのではないが、その事實なるを次の如く言うた。「艱難の意味は、人の人格に依つて異なる。十字架に釘づけられし二盜賊の死は、罪の結果で當然受くべきものであつた。同じ十字架に釘づけられしイエスは、その正反對であつた。故に我らが人の受けし災禍苦難を以て、直ちに其の人を判定するは大なる誤である。彼の人格を以て其の苦難を判定すべきものである」と。（ヘブル書一二・六）

二六三　ムツソリーニの落第息子

今から六年ほど前のこと、伊太利のムツソリーニ首相は、母と一緒に暮してゐる子供たちを田舍に訪ねた。所が當時七才になる息子が、大層悲しさうにしてゐるので、そのわけを聞いて見ると落第したとの事であつた。彼は受持の先生を呼んで、そのわけを尋ねてみると、「あの息子さんは、算術が惡くて進級させることが出來ませぬ。第一、息子さんの將來を考へると、その方がよいと思ひまして、」との答であつた。彼は喜びつゝ「よく落第させて下さつた、貴君のやり方に尊敬をします。貴君の如き本當の先生がある事を嬉しく思ひ、伊太利少年のためバンザイを稱へます、」と答へながら、心から感謝の意を表したと。

二六四　近江商人と碓水峠

普通の人は山を越えることが容易でない。しかし鐵石の如き意氣を有し、遠大なる希望を有つ人は、そんな事を何の苦とも思はない。昔、近江商人が山のやうな荷を肩に運びながら、あの嶮岨な碓氷峠を越える時、「此の山がな、もつと高かつたら、多くの人は越え兼ねるであらう。その時、俺は一人此の山を越えて、大儲をしように」と言うたの事。山の嶮岨如何にあらず、人の意氣如何にあり、艱難の寄せ來るは問題に非らず、之に向ふ人の精神態度如何にあり。

二六五　エキセルショー

ロングフェローの詩「エキセルショー」の一篇は、精力主義を高調したる最も美しき教訓である。主人公は一切の艱難を排して、高き標的に向つて進まんとする純な青年である。アルプスを登れるものにして、彼は其の歩行をやめず、手には旗を持ち、之を高く掲ぐ、その旗に記したるは、「エキセルショー」の文字、即ち向上猛進を表はしたるもの、この文字輝く。そして時々彼の口を突いて出るは、このエキセルショーの一句であり、之が山岳や渓谷にこだまし、邊りを震動させた。「安樂」は路傍の小屋を指し、「少しは休みませうよ」と誘ひ、「危險」は恐しき雪崩を示して、「到底駄目ですぞ」と嚇す。「警戒」は又、「氣を附けませんと、大變な事になりますぞ、」と言ひ、「戀愛」は一野嬢となりて、彼の袖を引きつゝ「樂しきホームを作りませうよ」と誘ふ。しかし彼は一切の誘惑に耳を貸さず、尚も高きに猛進した。（ビリビ書三・一三）

第十九　母

金言・名句

○フランスに必要なるは母なり。（ナポレオン）
○揺籃を動かす手は、即ち世界を動かす手なり。（西洋の諺）
○母の愛は神の愛に似てゐる。
○母の接吻には力あり。（ビリー・サンデー）
○母は神の代表者として、子供に與へらる。
○愚なる人は其の母を輕んず。（箴言）
○父母の御恩は山よりも高く、海よりも深し。（日本古語）
○基督者の母が基督者の子を産むとは限らない。たゞ第二の誕生のみ人をして基督者たらしむ（テルトリアン）
○親なし子十三にして放火犯。
○母の一斤は宗教家の十斤に當る（スペイン諺）
○キリストは女から生れ給うた、これは男女兩性のどちらも失望なからしめん爲である。（オーガスチン）

○我は今にして一個の婦人たることは、天使の長ガブリエルたるに優るを知る。（カサリン・ブース）

○マリヤは婦人の地位を高め、母性を崇めしむる爲に神から選ばれたものである、それ故、彼女は凡ての婦人と又凡ての母、妻、姉妹及び娘を愛する男子より尊敬を受くべきものである。（ウランバル）

○如何ほど婦人を重んずるかは、文明の試金石である。（カウテス）

○宗教なき美人は香なき花の如し。（イン）

○我が教育の土台は母によりて据えられ、その主なる教科書は聖書であつた。（ブラムエル・ブース）

○いづれの國にも、いづれの時代にも、最も必要なものは母である。善良な母である。信仰と祈と愛と智慧とを以て其の子を育つる母こそ、人類社會の最大なる需要である。（山室軍平）

○母の教育に比すれば、他の教師の凡ての訓練は月の光に過ぎぬ。（スコット）

例話

二六六　母子の化石

或る旅人が燒野原を通ると、岩蔭に一羽の雉が黑焦になつて死んで居た。彼は心の中で「何とまあ氣の利かぬ雉だなあ、」と言ひつゝ試みにステツキの先で、此の黑焦の雉を除けて見ると、燒けた翼の下から四五羽の雛が出て來た。而も何ら火の害を受けて居ない。旅人は始めて其の雉が母親だと悟つた。――大正十二年九月一日、關東地方に大地震あり、東京の大半は焦土と化し、數万の人々は燒け死んだ。或人が吳服橋の傍を通ると、橋の下に母子の燒け死んで居るのが目に附いた、母は我が兒を兩腕に固く抱きしめたまゝ死んで居た。――紀元七十九年にイタリーのベスビアス山が噴火し、ポンペイ市は埋沒され、幾多の人畜は火の下に斃られた。近年この灰を組織立つて取除き、昔の市街を發掘してゐる。珍しい物が多い中に、特に人の心に觸れるものがあり、それは母子の化石であつた。母が其の子を自分の体で掩ひながら、死んでゆきたる其のまゝ

の姿が灰の中から出て來たといふ。（列王紀畧上三・一六―）

二六七　白いお母さん

アフリカのオコオング大森林を、今から余程前のこと、通行してゆく異樣な一隊があつた。先頭を承るは十才位の男子、茶や砂糖やパンの入つた箱を頭上に戴き、雨で辷りがちな所を踏みしめつゝ進みゆく。此の子に續くは八才になる男兒、鍋や其の他の勝手道具を擔ぎゆく。その後からは五つになる女の子と、三つになる男の兒とが、おいおい大聲で泣き乍らついて往く。一番うしろから往くのが、「白いお母さん」と土人仲間から綽名された婦人宣教師である。片手に袋を下げ、肩に赤ん坊を擔いで進み往く。彼女は土人の氣の毒な子供達の母となり、今日は東に、明日は西にと世話して歩いた。メリー・スレッサーは其の人である。貴なほ暗きアフリカの大森林、豪膽な男子でも怖れる所を、何の護衛もなしに通りゆく彼らには、全能の神のみ其の保護者で在した。（詩篇九一・五―）

二六八　マコーレーの忠告

文豪マコーレーは、次の如く子供達に忠告した。「子供らよ、母の慈愛の眼、柔和な手、また親切な聲の、尙存在する間に、これを尊重せよ、愛する母は最大の賜物であるから。それ故、特に大切にせねばならぬ。如何に多くの親愛なる友人を、一生の間に得たからというて、今一度母を得られるものではないから」と。（出埃及記二〇・一二）

二六九　自然に頭が下る

賴山陽は其の老いたる母と共に、吉野山の櫻を見、その心から滿足するのを知つて、「宰相になるに勝る、」と述懷した。詩人ハイネは、母に就き次の如く言うた。「我輩には少々骨がある、かつて人に頭を下げた事はない。たとへ王と視線が會うても、我輩は伏目にならぬ積りである。しかし本當の事を白狀すれば斯うだ、樂しい心置きない母の傍に來ると、今まで誇つてゐた勇氣も、全く萎びはて、自然に頭が下るのだ」と。ハイネの母は賢母であつた。ことに彼の教育に就

いて苦心した。その前では幽靈の話など決してしなかつた。また人にもさせなかつたといふ。彼が大學に入つて、學資が缺乏した時、母は身邊一切の裝飾品を賣拂ひ、學資にあてた。彼が友人に嘲られた時、「何と言はれても、お前は學問を勵みなさい。學問を以て嘲笑に答へなさい、」と激勵した。後年、彼は母を讃美した立派な詩を作つた。故なきに非ずであらう。（エ、ペソ書六・二）

二七〇　モツアルトの母

モツアルトはオーストリヤの大音樂家である。彼が立派な音樂家になるには、母の感化が少くなかつた。即ち彼を姙娠中、彼女は非常に音樂を好み、熱心に研究して居たといふ。所謂、胎教といふのであらう。そして同じ母が、音樂を中止してから出來た次男は、全く樂才を欠いでゐたとの事である。ローマは一日にして成らず、偉人は一朝にして生れ出ず。

二七一　毎日手紙を出す子

米國の南カロイナ州に、ルイスといふ牧師あり、彼は毎月躍日の朝九時に、必ず手紙を書く、それは母の所へ出すもので、「これは僕にとつて、最も樂しい時間である、」と言うてゐる。同じ米國のスプリング・ホープにフイツブスといふ牧師あり、その夫人は毎日必ず故郷の母に手紙を書く、所が母からも毎日手紙が來る。兩方から毎日手紙が屆くのであるから、文字通り頻繁である。ハルデーン卿は、次の如く言うて居る。「私は一八八七年から、一九二五年（大正十四年）まで即ち母が死ぬまで、毎日母に手紙を書き送つて居ました」と。四十八年間の長きに亘り、毎日これを實行するは、凡人に出來ぬ事であらう。しかも其の出來ぬ事を、母の愛が爲さしめた。或人は笑ふであらう。多忙な世の中に、毎日手紙を書くなんて、不經濟な事だと。しかし母と子とを結んでゐる、太い愛の紐を考へれば、何故、毎日書いたかが解るであらう。（テモテ後書三・二）

二七二　我が母の聖書

テルマンは作曲家であり、また聲樂家である。彼の作に「我が母の聖書」といふのがあり、聞く者の心を動かしてやまぬ。その一節に——

「親しき貴き書物、
今は其の色あせ、古くなりたれど、
思は有りし日の樂しさに歸る、
われが母の膝上に立てば、
母はわが頭にそつと手を置きて、
優しき聲に聖書の物語、
聞かせ給ひし樂しき日」（テモテ後書一・五―）

二七三　子供の教室

名高い説教家ヘンリー・ワード・ビッチヤーは、「母の心こそは、子供の教室である、」と言うた。畫家ベンヂヤミン・ウエストは又、「わが母の接吻が我をして畫家たらしめたり、」と述べた。ラクテールは次の如く語つた。「母の涙に抵抗し得る者はない」と。バックストンが其の人格品性に於て、衆人の模範と仰がれた時、秘かに書を母の許に送り、次の如く言うた。「わが他人の爲に盡力して止まないのは、母君が平生の持論また定見でございます、私が幼少の時代、その心の畑に播かれた種が、今日に至つて現れ出るは、當然の事であります」と。

二七四　母の神様は拒めぬ

インガソールは有名な無神論者であつた。或時のこと彼の演説會があり、それを聽いて歸り行く二人の青年があつた。その一人が「僕は今夜といふ今夜は、自分が今まで信じて居た信仰の、全く空虛なものであつた事を知つた。先生の言ふやうに、神などといふものはない、」と言ひ出すと、他の一人は答へて、「いや、然うではない、僕はどうしても神様は在る、といふ事を信ずる、」というた。前者が言を續け、反問に及んで言うた。「それや何故だ」と。後者さも自慢さうに、次の如く答へた。「僕の母の信仰に現はれてゐる神様を打消すことが出來ぬ、母の日夜信ずる神は、活きていらつしやる、よし理窟はどうであつても、僕はあの神様を拒むことは出來ないよ」と。

二七五　母の御恩は地球より重し

トーマス・エヂソンは、己が母につき言うた。「私を造つたものは母である。母は私に對し何處までも眞實を盡された、それ故、私も母を失望させないやうに心掛け、万事を行うたのである」と。自動車王ヘンリー・フォードが、母につきて語れる所は、次の如し。「私は母が私に希望せられるやうな生活を、營まん事を心掛けた。母は幼き私にむかひ、人間の世界に對する最大の務は、その奉仕にある事を敎へられた。私は母を信賴し、いつも其の敎に從はん事を努めたが、母の方でも私を信用し、行屆いた敎導を與へられた。或年の春先、學校から歸る途中、水泳に往きたいと願うてゐると、早くもそれを察した母は、水泳はまだ早い、決して往つてはなりませぬ、學校がすんだら早くお歸りなさい、と言はれた。私は素直に之に從うた」と。ラングデール卿は、その母の遺されたよき模範を思ひ起し、大膽にも次の如く言うた。「全地球を天秤の此の端にかけ、わが母を天秤の彼の端にかけたら、全地球は母の重さに堪えかね、忽ち轉覆するであらう」と。

二七六　文王と東涯の母

學者朱子の書を繙くと、周の宗祖となつた聖人文王と、その母につき書いて居る。その母は至つて端正な人であり、「その文王を娠めるに及んで、目は惡色を見ず、耳には淫聲を聞かず、口には慢言を語らなかつた、」といふことである。日本の昔にも之と似た話は少くない、その一つは伊東東涯と其の母の話であらう。仁齋は有名な儒者であつた。その妻が姙娠するに及び、毎夜の如く孝經、聖經、又は賢者傳などの良書を讀んで聞かせた。母に讀みきかすことは、胎兒に聞かせる所以である。胎敎は即ち母を敎へるにある。遂に生れ出たのが東涯であり、父仁齋にも劣らぬ博學の士となつた。古來語り傳へた有名な話である。

二七七　盲勇士と母の乳房

日露戰役の時、敵彈が腦の一部をかすめて行つた爲、ばたりと倒れた兵があつた。軍醫の手當よろしきを得たので、一命は漸く取り止めたが、惜しいことには視力と聽力とは全く失はれ、生

れもつかぬ盲目となり、聾者となつた。所詮、戰地に用なき身である、故郷に送還される事となつた。本人は自分の身柄が、如何に處置されることか、余り判然としなかつたが、どうやら親元に送りかへされるらしい。故郷には老母が唯一人、佗しい暮しをして、息子の凱旋する日を待つてゐた。やがて出迎へに行つた村役場の人々と一緒に盲目の兵隊さんが歸つて來た。遙か彼方に見ゆるは、懐しい鎭守の森である。が彼には見えない、のみならず村の入口で、兩側に並んだ學校生徒の打ち振る旗は勿論見えず、その上「〇〇君、萬歳ーイ」と叫ぶ歡聲も、天地には轟いたが、彼の耳には何も聞えなかつた。出迎えた村人も互に顔見合せて、ひそひそ話すのは、「こんな盲目で凱旋なさるより、一そ戰死なさつた方が、お母さんの爲にもよかつたらうに、」といふ事であつた。彼は我が家に着いた。老いたる母は狂氣の如く喜んで、耳元に口を當てゝ其の名を呼ぶのであつたが、元より何も聞えなかつた。一日はすぎ、二日は經つた。彼には親切な婦人がよく世話して呉れる、とのみ解つて、お母さんであるとは、まだ判らなかつた。しかし母は何とかして、身の廻りの世話をしてゐるのは、母であることを本人に納得させたいと、いろいろ苦心したが、いづれも失敗で容易に目的を達し得なかつた。一哲人が「愛は發見もし發明もする」というた。母は思案の揚句、彼を伴うて奥の納戸に往き、そこに坐つた。此處は二十數年前、息子を產み落した室である。もしや今は萎みたりとは言へ、赤ん坊のとき哺うた乳房に觸らせたら、或は母たる事を知つて呉れるかも知れぬ、と一縷の望をかけ、母は息子の千軍万馬の間を往來して來た手を握り、己が乳房の上に置いた。この時、彼は直感的に悟るや、「お母さんー」と一聲大きく叫んだと見るや、母の兩腕に抱かれ、見えぬ目から止度もなく涙が流れ落ちた。母は自分を認識して貰へた喜と、滿足と、感謝の涙を息子の頰に注いだ。盲目の勇士はその後も此の母の愛に抱かれて、樂しく暮したといふ。

二七八　日本の三賢母

松下禪尼は北條時賴の母に當る。この母は我が子の奢侈に流るゝを戒めるため、障子の切貼をして見せた。時賴が當時の日本に、質素を旨として貢獻し得たは、この母の感化による。湊川に於ける父の戰死を悲しむの余り、自害せんとした小楠公を、「なんぢ幼くとも父の子ならば、こ

れ程の理に迷うべしや。」と叱つて宥めたのは、その母であつた。中江藤樹の母は、學問の中途で歸り來れる我が子を戒め、織りかけの布を切斷し、聲荒らゝげて、「いま勉强を中止するは、恰も斯の如し」と激勵した。子は母の心を汲むことが出來、再び近江の小川村を後にした。後年の近江聖人は斯して生れた。（ヱペッ書六・二）

二七九　支那の賢母二人

孟子の母は其の子の教育に、人一倍の注意を拂うた人である。水は方円の器に從ひ、人は善惡の友による、と古語ある通り、子は四方の環境に支配せられる故、二度ならず三度までも住居を變へ遂に學者の住む町に來た。乃ち孟子は朝から夕まで、學者の眞似のみをして遊ぶを見、母は安堵の胸撫でおろした。未來の孟子は、この母の感化なしといふを得ず。田稷子が齊の國で高官に就任した時、下役から大金を受けたので、彼は母を喜ばせる心算であらう、その許に送つたら、母は嚴然と斥け、「不義の賊はわが有に非るなり、不義の子はわが子に非るなり、」と言ひ送り、金を添へてやつた。彼は恥ぢて其の金を元の下役に返した。

二八〇　西洋にも善き母あり

トマス・ベントンは、己が眞面目な生活に入りしを感謝し、母を禮讃して次の如く言うた。「わが母、我にタバコを喫ふなと言ひたれば、今も喫はず、賭事をするな、と言ひたれば今も賭事せず、酒のむな、と言ひたれば今も飲まず、これ皆わが母に負ふ所である」と。ジンジャミン・ウエストは名高い畫家であつた。どうして畫家たる決心をしたか、それには美しい物語がある。少年の折、彼は妹の顏を描いたら、うまく出來たとて母がそれを賞め、彼に接吻した。後年ウエストは自ら言うた。「その激勵が私をして畫家たらしめた」と。母の激勵は往々その子の一生を左右する。サムエル・バヂットは九才の時、母が心を込めて、神が彼を救ひ給はん事を、祈つてゐるのを洩れきいて、神に奉事する者たらん、と決心するに至つたといふ。（テモテ後書一・五一）

二八一　聖徒達の母

クレルボウのベルナルドは、稀に見る聖徒であつた。彼の作歌は日本でも歌はれてゐる。その

母アリスは見上げた婦人であり、幾人もの子を育てたが人手に養育を一任する、といふその當時の貴婦人の習慣によらず、自分で骨折り育てた。ベルナルドの如き人が世に出たのは、全く此のアリスの御蔭だと言はれてゐる。聖オーガスチンの母モニカは、世界屈指の賢母である。わが子の身が修まらざるを憂へ、アフリカ北部から遙々伊太利まで後を追ひ、その悔改を迫つた。涙の子は亡びず、といふが遂にオーガスチンは、三十三才に至つてイエスの救を体驗し、あゝした聖徒が出來上つた。信仰篤く祈深い母モニカに負ふところ實に多大である。スザンナはメソジストの母と稱せられた。ジョン・ウエスレー及び弟のチャーレスなど、十九人の子女が彼女の手で育てられた。その一生の希望は、わが子達が悉く、神に事へる者とならん事であつた、といふから如何に熱心な母であつたかがわかる。今日のメソジスト派は、彼女の手から產れ出た、といふも過言ではない。（サムエル前書二・一九）

二八二　母と精神保存の力

世界大戰後、今一度國をなしたポーランドは、約百年間といふものは、その存在を失うてゐた。その間、ポーランドの精神を失はしめず、その歷史を同胞に敎へたものは母達であつた。その一世紀の間、ポーランドの歷史、文學は勿論、言語までが壓制的政府のため、消え失せんとした事もあつたが、そこへ行くと母の力は偉大である。學校では新な國語を敎はつて來ても、家へ歸るとポーランドの言語で、その歷史を語り精神を吹き込むから、何時とはなしに學問以外の力で、歷史を保存する。子守歌も昔噺も同樣であるから、ポーランド魂が何時しか、無意識中に植ゑられ、之が潛在意識となり、記憶の根底となり、遂にポーランド再建となつた。同國には中々立派な母が多いのであらう、曾てナポレオンが此の國に來たとき、「ポーランドの女性には、敵對が出來ぬ、」と慨いたことがある。勿論、その意味は別のものであらうが、又以て同國母性の一端を知り得る。

第二十　青少年

金言・名句

○三ツ兒の魂百まで。（日本古語）
○子供は親の鏡なり。（西洋金言）
○子供の心はレコードの如し、一度印刻せば何時までも消えず。（ブラムエル・ブース）
○子供を大に笑はせよ。（カーヴァス）
○吾十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えず。（孔子）
○君子に三戒あり、小き時は血氣未だ定まらず、之を戒むるは色にあり。其の壯なるに及んでは血氣方に剛なり、之を戒むる鬪に在り。其の老に及んでは血氣すでに衰ふ、之を戒むる得にあり。（孔子）
○教育の主なるものは育兒室にあり。（プラトー）
○老人が救はれた時には唯一個の靈魂が救はれたのであれど、兒童が救はれたるとき、一箇の靈魂と共に又、一人の生涯が救はれたのである。
○意見きく息子の胸に女あり。
○わが今日まで受けたる最良の教育は、日曜學校にて受けたものである。（ロイド・ジョージ）
○子の爲に美田を買はず。（西郷隆盛）
○時を失ふことは青少年にとりて大なる誘惑である。（ウイリアム・ブース）
○若いときの苦勞は求めてもせよ。
○わが子は將來の我なり。
○世界は大學校、困苦は良き師なり。
○一桃腐りて百桃を損ず。
○われ年老いて周公の夢を見ず。（孔子）
○鹿を逐ふ獵師は山を見ず。
○鞭を儉約すれば小兒を損ず。
○梅檀は双葉より香ばし。
○無益の學問は勤勞せる怠慢と知れ。
○五十にして四十九年の非を知る。
○盛年重ねて來らず、一日再び晨なりがたし、時に及んで當に勉勵すべし、歳月は人を待たず。（陶淵明）

例話

二八三　少年に御辭儀

ダニエル・ウエブスターは、米國でも名高い人であつた。或日、田舍道を通りかゝると、向ふから一少年がやつて來た。彼は帽子を脱ぎ其の少年に御辭儀をした。後で傍に居た人が、「先生、先生のやうな立派なお方が、あんな暴垂小僧に御辭儀をなさるとは、どういふ意味ですか」と尋ねた。ウエブスターは答へて言うた。「私はあの少年の衷に隱れてある力のことを考へ、將來どんなに成長して、有要な人になるかも知れぬ、と思ふから自然頭が下つて御辭儀をしたのだ」と。宗教改革者ルーテルが、少年時代に通ひし學校の校長ヨハン・トレボニウスは、相當に教養あるばかりか、生徒に對して珍しい尊敬の情を有して居た。それで當時の風習として、教師は教室で帽子をとらなかつたが、彼のみは必ず脱帽して教室に入り、生徒の前に立つた。そして他の教師にも、我に倣へと勸めた。彼は少年達の間から、やがて大人物の出ることを考へ、祈もし尊敬も拂うでゐたのである。（アタイ傳一九・一四）

二八四　青年期は蠟の如し

聖アンセルムは青年期を稱し、これは適當に煉られたる蠟の如し、と言うた。その言、「少年のころは、蠟が未だ柔かすぎて、溶けてゐるため印刻することが出來ぬ。老人になれば既に固くて、印刻が不自由である。しかし青年は丁度この兩者の間にあつて、固きと柔かさとが、適當に煉り合はされた狀態である。故に青年の訓練は、先生の考通りになる」と。（傳道の書一二・一）

二八五　少年回心一覽表

イエス・キリストの贖罪により、罪より救はれる、といふ貴き經驗は、ひとり大人のものゝみでなく、少年、時には幼少の時代でも經驗し得る惠である。幾人かの實例次の如し。——後年モラビヤン派の監督となりしジンゼンドルフ伯は、ドイツの貴族であつたが、僅か四才の時に救の經驗をした。同じ四才で救はれた人に、アダム・クラータがあり、後に有名な聖書註解書の著者と

なつた。今一人四才で回心した人あり、アシュベリー監督は其の人であつた。然らば其の以前の幼少では、救の事が解らぬか、といふに然うではない。ゴッドベイ博士は實に三才で救の惠を受けた、と記されてゐる。しかし以上の如き幼少で救はるゝ人は、世界でも稀である。七才で回心した人に、聖潔の教師ジョン・フレッチャー、救世軍二代目大將ブラムエル・ブース及び北米の神學者ジョナサン・エドワードの三人がある。「世界最大のもの」といふ說教で有名なドラモンド教授、詩人ワット博士、フレンド派の大立者ウイリアム・ペンの三人は九才の時、ボリカリプとロバート・ホールとアルフレッド・コールマンは十才の折、聖書學者マシュー・ヘンリーは十一才の際、救の惠を得たといふ。此の他、リチャード・バックスターや、南阿で奉仕したモファット博士などは、幼年或は少年の時に救はれた人なるも、年齢は明白でない。十二才以上の少年時代となれば、ずつと數が增して來る。（マルコ傳一〇・一四）

二八六　十才で極地に興味

三ツ兒の魂百まで、といふことがある。少年時代に深く腦裡に刻まれた事は、容易に忘れぬのみか、それが成長し發達を遂げ、人目を驚かすほどの大事業さへ爲さしめる。アーネスト・シャックルトンは、南極探險の猛者である。成人してから探險を思ひ立つたかといふに、決して然うではなかつた。小學生時代から、探險記といふ名のつく書は、悉く集めて讀んで居た。その頃の事を彼は述べ、次の如くいうた。「私は既に十才のころから、この問題に沒頭して來ました。非常に興味を有つて居ましたから、北極並に南極に關する探險記は悉く讀みました」と。（使徒行傳二・一七）

二八七　トランブル博士の娘

トランブル博士に一人の娘あり、或日、日曜學校から歸つて來て、不思議さうな顏付で、父なる博士に次の如く告げた。「父さん、今日、先生があなた方も大人になつたら、イエス樣を信じられます、と申されましたが、私にはどうも合點がゆきませぬ。私は未だ子供ですけれども、とうの前からイエス樣を信じて居りますし、先日も友達と一緒に、部屋の戸を閉ぢて、イエス樣に祈りました」と。（マルコ傳一〇・一四）

二八八　大久保彦左衛門の豪語

島原に亂が起つた時のこと、多くの若侍が出陣することになつた。すると例の大久保彦左衛門が、激勵まぢりの豪語を放ち、次の如く嘯いた。「今の若い者は駄目だ、役に立たぬ。どうして軍のことが解るものか、やつぱり戰のことは、老功者に限るわい」と。これを聞き咎めたのが、酒井備後守忠朝である。早速返答して言うたのである「これは大久保殿にも似合はぬ御言かな、そもそも貴殿が鳶の巣城征伐に初陣され、一番乘の功名を博されたのは、僅か十七才だつたではありませぬか。だのに若い者は駄目ぢや、と仰せられるは如何なる理由で」と。彦左衛門は二の句がつげず、閉口して引下つたといふ。（マタイ傳一八・六）

二八九　若し我が子であつたら

ホレース・マンは名高い教育家であつた。或時、大感化院の開院式に臨み、祝辭を述べたが其の一節に、「此處で唯一人の不良少年が、本當に感化せられたとしても、これ程の設備をした甲斐があります、」といふのがあつた。後で某が彼の許に來り、「あれは少々言ひすぎではありませぬか」と咎めた。するとホレース・マンは即答し「決して然ふではありませぬ、その不良少年が我が子であつたと考へて御覽」と言うたさうである。（マタイ傳一八・一四）

二九〇　天正の青年四使節

天正十年の昔、既に日本から青年使節が遠くローマに使して居る。即ち九州の大名たる大友、大村及び有馬の二家より、法皇グレゴリー十三世及びスペイン皇帝ピリポ二世へ遣されたる四青年である。大友の正使は伊東マンジョ、大村と有馬の正使は千々岩ミツセル、別に副使として原マルチノ及び中浦ジュリアノが隨うた。彼らは何れも十三才以上十六才以下の若者であつた。他に數名の近習、宣教師及び修道士も一行に加はつた。一月三十日ポルトガル船イニヤース・リコ號で長崎を出帆、印度のゴア及び南阿の喜望峯を經てリスボンに上陸、長崎を船出してより四年目のこと、伊東マンジョの鼻下には、八字髭が吹く風になびいて居た。彼らは其の使命を無事に果し、ゼスイツト寺院に至り、總長アクヴイヴアの歡迎をも受け、再び船に乘りて故國に歸つ

た。この行程實に一万四千里、八年の日子を費した。四使節の信仰及び生涯には、波瀾曲折一方ならぬものがあり、一々詳記する時を有たぬが、中でも最も美しかつたのは、原マルチノであり彼はイエスの名のため、立派に殉教の死を遂げたといふことである。（マタイ傳一八・一〇）

二九一　イタリーの獨立と三青年

イタリーの獨立史を繙く時、そこに見逃し得ない三人の青年があり、即ちマジニイ・ガルバルジイ及びカブルーである。この三人はそれぞれ性格が別々であり、マジニイは預言者の性質を有し、民衆を激勵し其の心に火を點じて歩いた。斯て獨立の氣運は一般青年の間に滿ちた。ガルバルジーは熱血男兒で、實行の人である。彼は途中の十七年間、南米ブラジルに逃れて居た。その頃は生活の資にも困るところから、シャボン玉を子供たちに賣り歩き渡世した。また少年のとき、一匹の蟋蟀が足を折つたので、甚く同情し泣いた、といふ話がある。彼が再びイタリーに上陸するや、「獨立を願はんと欲する者は我に從へ、然らば其の報賞は何か、困苦である、貧乏である、そして死である、」と叫びつゝ指導した。人々は彼の旗の下に馳せ參じ、遂に獨立の國に至らせた。カブールは前二者と性質を異にした。彼は政治家であり、物事の中庸を歩む人であつた。それ故、彼が實行に移るは、石橋を叩いて渡る、といふ流儀で寧ろおそかつた。しかしイタリーを政治的に纏め、組織立ちたる國民とする上に、力ありたるは彼であつた。以上の三人は獨立を目標に相一致し、相理解し、相勵まし合うて、遂に目的を達成した。（ダニエル書一・一）

二九二　九才のワナメーカー

梅檀は双葉より香ばし、といふ事がある。世界の百貨店王たりし、ジョン・ワナメーカーは、幼少の頃から既に秀でた所があつた。彼が金に不自由であつたところから、月賦で聖書を買求め、熱心に讀み出したのは、僅か九才の時であつた。彼は少青年を重んずること、人一倍であり、その日曜學校先生たりしこと實に五十余年に及んだ。或時、大統領が來て内閣の一閣員になつて貰ひたい、と交渉した。彼は「若し日曜日に、日曜學校の働をする自由を與へられるなら、仰せに從ひませう、」と答へ、その快諾を得たので、遞信大臣の椅子に坐つた。その大臣の席に居る間、毎土曜日にワシントンから、十幾時間もかかる所にある日曜學校に出席し、月曜日になると

再びワシントンに歸り、政府の事務を執つた。或時、彼は多くの人々を前にして言うた。「私は此の老人になるまで、實に莫大な品々を買入れました。お金に見積るなら、容易ならぬ金高です。しかし其の中で、何の品よりも大切なものを買うた事がある、それは……」と傍にある品を手にとらんとするや、皆は一体どんな高價な品かと、目を見張つて注意した。ワナメーカーは、一冊の書物を示し、「この一卷の聖書であります、これは私が九才のとき、一円五十錢で買つたものです、これが私の生涯で一番貴い買物でした。この聖書によつて神とキリストとを知り、お蔭で今日まで大した過失もなく、送らせて頂きました、」と語つた。（詩篇一一九・九）

二九三　花の日と三起原

今日、私共の間で世界的に守られてゐる「花の日」には、大体次の如き三つの起原がある。其の一つは、久しい以前ニューヨークのブルックリンにある某教會で、リチャード・ストールス牧師が、七才に達した子供の一人々々を呼び出し、壇上に積み重ねてあつた花束を一つ宛渡し、その上、聖書を一冊つゝ與へた。その聖書には、子供の誕生日附、牧師の署名及び當日の日附が書かれてあつた。この事が大層よい影響を及ぼし、引續き「花の日」として催される事になつたと。次は一八五六年のこと、之も同じ米國マサセッツ州セルシヤ市に住むチャーレス・レオナルド牧師が信仰を有つ親達に、その子弟を連れて會堂に出席せしめ、その子弟を神に獻げしめた、つまり獻兒式である。これが「花の日」の起原になつたと。最後のも亦、米國で起つた出來事である。ローエル市に住む一牧師が、一八七〇年のこと、「シャロンのバラの日」と名づけて、特別に一日を聖別し、子供たちの日曜日とした。いろいろ興味ぶかいプログラムを作り、樂しく有意義に過させた。その時以來、この種の日曜日が「花の日」として守られ出したと。

二九四　たつた一人でした

ムーデーの説教を聞きに來た人々の中に、日曜學校の一教師があつた。ところが此の教師は、その日、何も教へないで來てゐることが判のたので、ムーデーは其の理由を尋ねた。その答は「往つて見ましたが、たつた男の兒が一人しか居ませんでしたから、そのまゝ歸つて來ました、」といふのであつた。ムーデーは其の精神を苦だ遺憾に思ひ次の如く言ひきかせた。「たつ

た一人の男兒と云はれるが、その兒が將來、ルーテル、ノックス、ウエスレー或はホイット・フイールドの如き、大救靈者となるかも知れない、どうか其の一人を大切にして欲しい」と。（マタイ傳一八・一〇）

二九五　青年立志の鑑

中江藤樹は十一才にして大學の「天子より以て庶民に至る一にこれ身を修むるを以てす」といふ一句に感じ、學に志して遂に近江聖人となつた。新井白石は又、十七才のをり藤樹の著書なる、「翁問答」を讀み、經學に志した。北條時宗は十二才にして執權職となり、十八才のときには、元よりの使者に應待した。スポルジョンは十六才から說敎しはじめたが、年長者から、「この乳臭き若者、何を吠え居るか」と、嘲笑されたが、修養と努力とを怠らず、遂に銀鈴と綽名される程の名說敎家となつた。ワシントンは十三才のとき、六十九ケ條の修身原則を作り、自ら戒めた結果、遂に米國大統領となつた。デビス博士は七才のときから聖書を讀み出し、信仰に志したが、後年、日本に來り京都同志社大學設立のため、大なる貢獻をした。鎌倉權五郎景正十六才のをり、後三年の役にて大勇を顯し、その名を歷史に止む。楠正行十一才のとき、櫻井驛にて父と別れ、强く決する所あり、後年、父の遺志を繼ぎ四條畷に奮戰し、孝子の名を擧ぐ。吉田松陰十一才にして、萩の藩主敬親に學を講義す。ガルバルジー十二才のをり、友と一緒に山へ往き、寡婦の深淵に溺るゝを救ふ。後年、イタリーを救うて、獨立の國となす。ジャンダーク十七才にして起つ、危急存亡のフランスを、一時安泰の地に置く。フオックス十一才のとき、既に內なる光とて、良心の奧に輝く光を認め、遂にフレンド派の開祖となる。孔子は「吾十有五にして學に志す」といふた。遂に世界三聖人の一人となる。釋迦は十七才にして、老病死の苦痛を見、出家して道に志し、佛敎の開祖となる。日蓮は十六才で發心し、三十二才にして大に悟る所があつた。遲如は十七才で髮を落し、宗敎に志したが、後、眞宗中興の祖と稱へられるに至つた。ソラック十七才にして、人生の問題と生存の意味を考へ始め、遂に大神學者となる。ウイリアム・ブース十五才で信仰に志し、後年、救世軍を創立す。エリサベツ・フライは、十七才のとき十ケ條の修身規則を設け、進步發達を圖る。後年、薄倖な女性のため貴き奉仕をなす。聖書に「人わかき時に軛を負ふはよし、」と敎へてある。（エレミヤ哀歌三・二七）

二九六　惡魔に先手を打つ

カサリン・ブースは、救世軍の母と稱せられた大賢母であゑ。その子女は幼少の頃から、いづれもイエスの救を受け、立派に成長した。某が或時、彼女に「貴女はどうして斯くも早く子供達を、イエスに導き得られましたか、」と尋ねた。その答は「なに、惡魔に先手を打ち、その手をつけぬうちに導いた迄であります」と。

二九七　賢人と一青年

或所に一青年あり、賢人に伴はれて森林へ往つた。或る場所に來ると、そこに四本の樹があつた。賢人は青年に、「この樹を抜いて見ろ、」と命じた。第一の樹は植ゑたばかりであるから、さつさと引き抜くことが出來た。第二のは植ゑてから暫く經つたものか、少しばかり骨が折れた。然るに第三のは、汗水を垂らし全力を注いで漸く抜くことが出來たが、最後のは如何に苦心しても、遂に抜くこと能はず、徒らに疲れるのみであつた。この時、賢人は再び指し、「習慣といふものは、善にせよ惡にせよ、一旦ついたが最後、再び抜けぬものであるから、十分氣を附けたがよいぞ、」と教へたといふ。「習慣は第二の天性である。」

二九八　聖徒と化した不良少年

ドイツの片田舍に生れたジョージといふ一少年があり、父は國産局租稅集金人であつた。この少年は幼にして不良性を帶び、十才にして父の集め來りし金を靴の中へ隱し、人目を忍んで使用してゐた。發見された折には、のそ大部分を消費して居た。其の後も父の留守中、集まつてゐる金を使ひ込み、ブランスウイックといふ所へ往き、其の他の若い娘と善くない交際をなし、次第に惡化した。宿に泊つても金が缺乏すると、衣類を質に入れて來ると稱し、そのまゝ逃げた事もあり、ウオルヘンビッテルでは、この手をやつて捕はれ、留置場に投ぜらるゝこと二十四日に及んだ。幸ひ驅けつけた父の手で解放されたが、時に未だ十六才の青年であつた。此の不良少年の行末は、どんなになるかと彼を知る人は、みんな暗い顏を見合せて心配したが、幸なるかな、イエスの救に接して立派な基督者となり、英國に渡つてブリストルに大孤兒院を起し、その院長とな

つた。明治の時代に日本へも來朝し、岡山孤兒院の石井十次先生などに多大の感化を與へたジョージ・ミューラーは、この少年であつた。（マルコ傳一〇・一四）

二九九　子供を笑はしめよ

笑は身の藥である。健康を助ける、精神を爽快にする。殊に子供には無くてはならぬ藥である。カーヴァスの忠告に耳を傾けたい。「貴君の子供達をして愉快に、かつ大聲をあげて笑はせよ。心から打ち溶けて笑ふときは、胸隔を廣くし、血のめぐりをよくする故に、大笑する習慣をつけよ。これは啻に善き効果を齎らせるのみならず、凡て聞けるところの人々に祝福を頒つ、その家庭から心配苦勞を放逐する必要な手段であり、また方法である」と。「笑ふ門には福來る」とは、古くて又新しい眞理でなくてはならぬ。（ヨブ記八・二一）

三〇〇　天下の大事は青年に因りて

禁酒界の驍將たりし安藤太郎は、曾て次の如く言うた。「天下の大事は青年に因つて爲さるゝものである。岩倉公が初めて歐米を漫遊せらるゝ時、御自分は五十三、四才であつたが、之に隨行する木戸、大久保、伊藤などは皆三十二か三の壯年或は青年に過ぎなかつた。それで唯か一人位は白髪の生へた男があれば、重みがあつて可からうに、等と言はれた。しかし此の青年達に因つて、明治維新は成されたのである」と。（ヨエル書二・二八）

三〇一　十七から人生を考ふ

大神學者ソラックは、まだ十代の青年時代に人生の大問題を考へ、遂に立派な神學者となり、社會に大なる貢獻をした。その言に「私は十七才から人間の生存目的を考へ出した。そして單に知識を磨く事だけでは、滿足出來ないと思うてゐる矢先、イエスを見出して救はれ、唯イエスに奉事することのみ、生き甲斐あることを悟つて以來、たゞ其の爲に生きて居る。お蔭で今日まで神の御助で、多くの青少年をイエスに導くことが出來た。思へば唯もう感謝の外はない」と。（マタイ傳一九・一四）

三〇二　私は燒け殘りの薪

ジョン・ウエスレーは、一生の間、自分こそは「燒け殘りの薪」だ、と自覺するのみか、度々その事を人の前に發表してゐた。その理由は斯うである。彼がまだ頑是なき六才の幼少時代、その住家なる牧師館に放火した者があつた。僕は慌てゝ彼を連れ出すことを失念した。ジョンは二階に寢てゐたが、はや火は一面に擴がつた。父のサムエルも、母のスザンナも、彼が助かるよう必死に祈つた。幸にも近所の人が駈けつけ、一人の男が他の人の肩に乘り、危いところを助け出すことが出來た。ジョンは此の危險から救はれた事を、全く神の御惠と信じ、「私は神の憐みで、火の中から救ひ出された燒け殘りの薪です、」と言うてゐた。

第廿一　健康

金言・名句

○人は皆せつせつと働くに如くはなし、流るゝ水の澱まぬを見て。（古諺）
○決して失望するな、絶望は致命的な病氣である。（西洋の諺）
○汝の節制を凡ての人に知らしめよ。（西洋金言）
○夜も晝も新鮮な空氣を求めよ。食ひ過ぎるな、また饑ゑるな。
○健康はたゞ節制より成り立つものである。（ホープ）
○健康上の種々なる現象は、如何に立入りて我らを教ふることよ。（アラビヤの諺）
○勞働は健康を生し、健康は滿足を生ず。（マッチー）
○今日、半分以上の病氣は、腦を極度に用ひ、肉体を粗末にするより來る。（リットン）
○心の喜は身の藥なり。
○或る人々は己が齒で、自分の墓穴を掘つてゐる。（シドニー・スミス）
○笑の缺乏は即ち健康の缺乏なり。（西洋名言）
○先づなんぢ自身を健康ならしめよ、しからば初めて他人に健康法を示し得ん。

○運動は健康長壽の基なり。（ミルトン）
○伸すとも手足を出すな蚊帳の外。（オーガスチン）
○善く生きよ壽命の長短は神に任せて。（バットラー）
○勞働せざる程苦しきはなし。（フロレンス）
○夜は肉体と精神とに與へられたる安息日である。
○神は各自靈魂上の病を癒さんがため肉体の病を送り給ふ。
○顔は靈魂の索引なり。（ゲイゾー）
○病を知るは治療の始めなり。（ガリソン）
○聖き快樂と節制とは最も善き醫者である。
○節酒は奈落の道なり。（ジョエット）
○病氣を神よりの打擊と解釋するなら、私共は其を奴隷の鎖の如く身に帶びねばならぬ。しかし之を惠による鍛練の火と考へるなら、新しい惠を與へられる。

例話

三〇三　片肺で長命した江原翁

貴族院議員たりし江原素六翁は、熱心な基督者であつた。その四十才のとき左肺を患ひ、病勢日増に加はり、早や命旦夕に迫るほどゝなつた。乃ち教會の會員達は二箇所に分れ、必死に祈り、「神よ江原氏を醫し給へ、」と訴へた。然るに不思議な事が病床で起つた。もう今晩は最後であらう、と傍の者も覺悟を決めて居た其の時、かッと大咯血し、大きな金盥に血や濃のそうなものを一ぱい吐いた。愈々臨終であらう、と近親の者が待つて居ると、虫の息ながら夜明まで保つたさては神の御使命が、この地上に未だ殘つて居るのか、と思ふ心が皆の頭に浮ぶと同時に、少し元氣が持ち直したのみか、時間の經つにつれて、益々回復した。後で判つた事であるが、大咯血と同時に、左肺の一切は病菌もろとも吐出してしまひ、それなりけり肺病は無くなつたのである。以後、右肺のみを以て四十年程も長命せられ、白髪の老翁となつても盛んに活動し、或時の如きは米國にま

で渡り、數千人の人々に演說をした事もあつた。歸朝後、某氏に「今度の旅行で四千人に話して來ましたが、若し兩肺健全であつたら、八千人は大丈夫であつたと存じます、」と呵々大笑しつゝ語つたといふ。（マタイ傳四・二三）

三〇四　貝原益軒と節制

益軒は幼少時代から弱く、元來蒲柳の質であつた。しかし少年の頃から醫學に志し、衛生を學び、節制の生活をし出したので、健康を保つばかりか、之を樂しみ得る迄に達した。老人になつた時も尙矍鑠として、壯年者を凌ぐ程であり、學問を講ずる傍ら著述に從事した。殊に晩年に大著述が多い。天性旅行を好み、暇さへあれば其の夫人東軒と共に、諸國を巡遊し足跡海內に遍くといふ有樣であり、旅行記は山のやうにあつた。その著書中、五常訓、大和俗訓、初學訓、童子訓、家道訓、など所謂益軒十訓は、平易の文章であり、以て平民の敎育を說けるもの、百姓町民も讀んで判らぬ所はない。正德四年に他界したが、時に八十五才であつた。（テトス書一・八）

三〇五　ニール・ドウの長壽法

ニール・ドウは「禁酒の父」と、綽名された人であつた。某が彼を訪問したのは、既に九十余才の老人の時であつたが、長壽と健康の秘訣を問はれた時、次の如き答をした。第一、若者のとき放蕩をしなかつた。タバコ、ウイスキーその他の興奮性飮物を用ひなかつた。第二、いつも早く寢て熟睡し朝は早起。第三、社會公共の道德及び同胞福祉のため積極的な興味を有してゐた事。第四、過去の經驗に於て、害があると知つたものは、一切食べなかつたこと。一例をあげれば、私は元來焙豆が好物である。しかし身体に合はぬ事を知つたので、食べぬ事とした。（コリント前書六・一九）

三〇六　エジソンの强健法

エジソンは甚だ强健な人であり、死ぬるまで精力絕倫であつた。その强健なりし秘密は何處にあつたか。若い時からスポーツをやつた事なく、所謂運動をした事がなかつた。自動車が發達してか

らは、一ケ月位フロリダの別莊へ行つたが、遊びに行くのではなく、研究所を設けて置き、相變らず勉强した。彼の一番の樂しみは、自動車王ヘンリー・フオードと一緒に、オレンジ河へ魚釣に出かける位なもの、それも度々ではなかつた。彼は健康を圖るため、特に運動をしたとは見えぬ。たゞせつせと勞働、研究及び勉强した事であつたらしい。彼は或時いうた。「私は仕事に精力を集中する如く、眠るにも眞劍に眠るのだ」と。此處に一つの秘訣があらう。仕事をしても彼ほど熱中する人は少ない。殆んど夢中である。しかし疲勞を覺えると、惜氣もなく其の仕事を放棄して、他の研究に移る。また疲れて來ると第三の仕事へと移る。そして己が精根を傾注してゐるのである。彼は「私が割合に短日月の間に、比較的多くの發明を完成することの出來た一つの原因は、この仕事の轉換にあつた。私には之が自由自在に出來たから、」と言うてゐる。彼の隱居に對する覺悟は、次の如きものであつた。「七十才になつて隱居する人は、まあ三年以内に死ぬ覺悟をしなくてはいかんね」と。續いて「私は決して隱居しない、醫者が酸素吸入器を携へてやつて來たら、愈々これが最後だなと思ふのだ、」と語つた。彼が七十七才の誕生日に、某から「貴君の人生觀如何」と問はれて、「働け、自然の秘密を探ぐつて、それを人間の幸福のために利用せよ、事物をその光明の方面に置いて眺めよ」と答へた。私共は此らの言を綜合して、彼の强健法が奈邊にあつたかを知りたい。

三〇七　三人の醫師

昔、或所に名高い醫師が住んでゐた。寄る年波には抗し得ず、老衰して死ぬる事となつた。臨終の枕邊に集つた親友たちは、「若し万一の事があれば、私達は今後どうしませうか、」と尋ねた。名醫は答へて言うた。「決して御心配には及びませぬ、私は三名の大家を紹介する積りです」と。親友たちは大喜び、安堵の胸を撫でおろし、「早速その姓名を承りたい、」というと名醫は、「第一は食物ドクトル君で、」「第二は睡眠ドクトル氏で、」「第三は運動ドクトル先生です、」と答へた。つまり食物、睡眠、運動の三博士を顧問として、その命ずる所に服從すれば醫師の助がなくも、十分健康を保ち得、長壽を全うする事が出來る、との意味である。

三〇八　百七十才のゼンキンス

日本の昔に長壽を樂しんだ人を尋ぬれば少くない。浦島太郎はその一人、武内宿禰は三百才ま

で生きたとの傳說、三浦大助は百八才まで長生をした。英國にヘンリー・ゼンキンスといふ男があり、百七十才まで生存へた。平生から質朴な生活をなし、朝食の前に一杯の冷水を飲み、冷い肉と野菜とを常用してゐたといふ。トマス・パーといふ人あり、これは百五十二才まで生きた。八十八才のとき結婚し、その妻と死に別れてから、今一度百二十才のをり、再婚した。驚く勿れ百四十五才のとき、運動競技に參加したといふ。平生の食物は簡單であつた。最後に田舍からロンドンに出た際、御馳走を多く食べさせられたのが原因で死期を早めた、とのことである。ワルデック伯といふ綽名をとつたマキシミリアンは、百十才まで生き延びた。彼は博學の人にて、「一世紀の字引」といはれ、何でも知つて居たと言はれてゐる。（傳道ノ書六・六）

三〇九　醫者を見放す話

廣い世界には、醫者を見放した人も少くない。米國のシカゴで社會救濟事業に成功せるゼーン・アダムス女史は、女學校卒業當時、甚だ不健康であつたから、醫者は向ふ六ケ月しか生きられませぬ、と宣告を下した。しかし本人は信仰により、一向平氣なもので、斯る診斷を受けた時、「よろしい其の六ケ月を人道のため働くことに致します、」と答へ、驀然に社會奉仕に乘り出した。三十才を越え、四十才を過ぎ五十の坂も上り、六十に達し、遂に七十才を越えても尙活動をして居た。ウイリアム・ブースは近世の偉人であらう。特に宗教界及び社會事業界に於て、消すことの出來ぬ感化を遺した。彼が未だ青年のとき、メソジスト派の牧師を志願し、醫師の診斷を乞ふと、「こんな健康で志願すれば、一ケ年後には死ぬるであらう。そして神の御前に出でた後には、自殺幇助罪に問はれるに相違ない、」と答へた。大概の者なら中止する所であるが、そこが偉人である。彼は捨身になつて、斷然傳道界に身を投じた。僅か一年といふ壽命は八十四才の高齢まで保ち、七十九才の老齢に達した時、日本へも來朝し、明治大帝の謁見を賜うた。彼は老人になつてから言うた。「醫者が私を見放したから、私も其の醫者を見放し、以後は只管、全能の神を依賴むことに致し、今日まで生存へました」と。米國の大傳道者ムーデーは、甚だ肥滿した人であつた。これは心臟病を患うて居たからであり、醫者は彼を診察する度に、「貴君の身体は引受けられませぬ何時斃れるかも知れませぬぞ、」と言うてゐた。彼も何時死んでも差支へなき覺悟を以て、最善の奉仕をした結果、あゝした前代未聞の榮光を顯したのであつた。そして神

の恵により、六十一才まで生きた。（マタイ傳一〇・三九）

三一〇　睡眠は名藥

人の身体に睡眠ほどよい名藥は又とあるまい。聖潔の教師サムエル・ブレングルは、曾て言うた。「健康、長壽、樂しい晩年を希ふ者は、規則正しい生活をせねばならぬ、十分な睡眠をとると同時に、余分の眠りをしてはならぬ。つまり眠り過ぎることは害がある」と。では何時間眠ればよいか、人によつて健康の狀態が異ふから、一定するわけにゆかぬ。メソジストの開祖ジョン・ウエスレーは毎夜六時間の睡眠をとつた。その代り彼は一日中、何度でも短い眠りをとり、時には旅行中馬上で眠る、といふ習慣があつた。ナポレオンは僅か三時間の睡眠で、事足りたと言うてゐるが、グランド將軍は之に反し、最も激しい戰に於ては、九時間の眠りを必要としたとの事である。それ故、人は自分の身と相談し、適當に睡眠時間を定める外はない。或所に立派な一宗教家があり、その妻は至つて賢い婦人で、夫が説教のため非常に疲れて歸ると、有無を言はず彼を寢室に閉ぢこめ、一日中ぐつすり眠らせ、菜食ばかり攝らせると、翌日は元氣が回復し、元通りになつたといふ。（詩篇一二七・二）

三一一　百才の老翁曰く

ダニエル・ウオルドーは、次の如く言うてゐる。「私は今や老人になりました。齡は百才に垂んとしてゐます、どうしたら長壽をたのしみ、幸福に暮せるか、と問ふ者があれば次のやうに申上げたい。いつもゆつくり食べてよく咀嚼し、笑顔で仕事に向ひ、何處に行つても愉快な氣分を、保つて居ることが必要です」と。（箴言一六・三一）

三一二　最上の養生法

内村鑑三先生は、武士道的基督者であつた。彼が最上の養生法につき、述べたる所は次の如し。「養生法は許多ありと雖も、神を畏るゝに勝るものはない。ユダヤ人が今日と雖も長命にて有名なるは人の知る所である。歐米諸國に於て醫師、法律家、牧師の三階級の内で、最も長命なるものは牧師階級であることは、よく知れ渡りたる事實である。私の如き學校時代に於ては、同級生中第一番に墓に下るべき者、と認められし者が、今日尚ほ健康を保ち、かつ意氣の若きこと

に於ては同級生中第一であるは、全く自分の擇びし事業の、エホバの法と其の誠命との、研究によるのであると信ずる」と。そして先生は、よく古稀の長命を保ち、尙ほ加ふる數年を以て他界せられた。神を畏るゝは最上の養生法である。（詩篇三四・一〇―）

三一三　長生の種あかし

ジョセフ・ゼイツリンは、ポーランド生れの人であつたが、後に米國へ移住し、百六才の高齢に達して後、目出たく往生を遂げた。自分の長生した種あかしを、述べて次の如くいうた。第一、何でも控目にすること、食ふにも飯むにも、眠るにも金儲けするにも、その上遊ぶにも控目にする。第二、余り考へすぎないこと、腦も折々休める必要あり。第三、思ひ煩はぬこと。第四、秩序正しい生活を營むこと。第五、毎日少くとも一時間、子供を相手に遊ぶこと。（ベテロ前書五・七）

三一四　勞働が病弱を救ふ

ブラムエル・ブースは、大正十五年の秋、日本に來朝し各地で說敎した名高い宗敎家であつた。當時、既に雪よりも白い髪を戴ける老翁であつたが、彼の少青年時代は甚だ弱く、病身者であつた。彼は自分でいうた。「私は十四才になつた時、多分十七才までは保つまい、と人々は噂をしてゐた。どうやら十七才まで生き延び、少しは健康もよかつたが、それでも醫者達は望を置かず、まあ二十一才位までの壽命であらう、と斷定した。全く病床に親しむといふのではないが、さりとて二三年は誰かの手助がなくては、二階への梯子段を昇ることが出來ない狀態であつた」と。斯る病弱の彼が、よく七十三才の長命を保つのみか、世界六大洲を股にかけて、福音を宣傳し歩き得たか、如何にして其の健康の回復を圖つたか、彼みづからの答を聞くがよい。「勞働に精勤することが、私として病弱に打勝たしました」と。勞働、勞働、勞働なるかな。病身者を救ふは勞働である。廢人たるを脫れしむるは勞働である。丈夫な者の健康を保たしめるも亦勞働である。（ルカ傳一〇・七）

三一五　唯一の若返り法

百貨店王ジョン・ワナメーカーは、長壽を樂しんだ人であつた。しかし少年時代は至つて虛弱

な子であり、肝油を飲まされてゐた。青年期に達するや、身長はひよろ々々と伸びたが、細い身体であつた。晝は長い勞働、夜は教會での奉仕で健康を害ひ、轉地療養の止むなきに至つた事さへあつた。斯る虚弱な青年が、如何にして人一倍の活動を續け、世界一の百貨店を經營し、その上各種の事業に責任を負ふことが出來たか。彼には一つの若返り法があつた。その六十才の坂を越えんとするころ、或人が「どうして其のやうに元氣なんですか、」と聞いて見た。ワナメーカーの答は、「ベタニヤに於ける日曜日の午後と、ニューヨークの店の仕事、」といふのであつた。つまり日曜學校に出て、子供達の顔を見ること、店に出て忙しい仕事に携ること、この二つが彼の若返り法であつた。

三一六　基督者名士の他界年齢表

ダビデ・ブレイナルド（傳道者）	二九	ヘンリー・マルチン（傳道者）	三二
トップ・レデー（讃美歌作者）	三八	パスカル（思想家）	三九
フランシスコ（修道僧）	四四	サボナローラ（改革者）	四六
ヘンリー・ドラモンド（教育家）	四六	ジョン・フツス（改革者）	四六
ロバート・レイクス（日曜學校創設者）	四七	ヴイングリー（改革者）	四七
新島　襄（教育家）	四七	ジョセフ・ダミエン（癩救濟家）	四八
ドツドリツヂ（宗教家）	四九	トマス・アクイナス（神學者）	四九
石井十次（孤兒救濟家）	四九	ドミニコ（修道僧）	五一
マシュー・ヘンリー（聖書講解者）	五二	チヤルマース（宗教家）	五三
ジョン・カルビン（改革者）	五五	ジョナサン・エドワード（神學者）	五五
ジョン・フレツチヤー（宗教家）	五六	ホイツト・フイールド（說教家）	五六
チヤーレス・スポルジョン（說教家）	五八	聖クララ（修道尼）	五九
ジンゼンドルフ（宗教家）	六〇	ジョン・バンヤン（宗教家）	六〇
リビングストン（探險家）	六〇	クリソストム（說教家）	六〇
ウイツクリツフ（改革者）	六〇	チヤンニング（宗教家）	六二
アドライナム・ジヤドソン（傳道者）	六二	ドワイエル・ムーデー（傳道者）	六二

マルチン・ルーテル（改革者）六三
ジョン・ハワード（監獄改良家）六四
イグナシヤス・ロヨラ（耶蘇社創立者）六五
ミルトン（詩人）六六
クランマー（改革者）六七
サンキー（音樂家）六八
クルーデンス（聖書辭典作者）六九
タルメージ（說教家）七〇
ブラムエル・ブース（宗教家）七三
ウイリアム・ペン（開拓者）七四
ウイルバー・フオース（奴隸廢止家）七四
リチヤード・バツクスター（宗教家）七六
チヤーレス・フインニー（宗教家）八三
ジョージ・ウイリアムス（青年會創立者）八三
グラツドストン（政治家）八九
ショージ・ミューラー（孤兒救濟家）九三

（注意、右の年齢は凡て滿を以て數ふ）（箴言一六・三一）

三一七　疾病は緩和劑なり

スエーデンが產み出した有名な文豪フレデリカ・ブリーマーは、次の如く言つた。「疾病は人生の害惡として嫌はれるけれども、その實、一種の緩和劑である。人は之によりて、その疲勞せる精神を休養せしめる。若し世に之なくば、自殺と發狂は如何に多いことであらう。實に生存競爭の激しい戰場にて、負へる精神的重傷も、熱病の夢幻の間に去り、身邊に迫る恐怖も、遠方に隔たり往く。周圍の事物は凡て感情を和ぐる媒介となり、靜なる病室の裡、窓の帷（とばり）をもる〻薄暮の光、看護人の談話、兄弟や父母の親切な言、一つとして良好なる印象を心に與へざるなく、その終

メランヒトン（改革者）六三
フエネロン（宗教家）六四
エリサベツ・フライ（改良家）六五
ジョージ・フオツクス（友會派創立者）六六
ジョン・ノツクス（改革者）六七
マダム・ギヨン（宗教家）六九
クーパー（詩人）六九
ジョセフ・パーカー（說教家）七二
ウイリアム・ケレー（傳道者）七三
ヘンリー・ビーチヤー（說教家）七四
ブシユネル（思想家）七四
チヤーレス・ウエスレー（讃美家作者）八〇
ウイリアム・ブース（救世軍創立者）八三
ジョン・ウエスレー（メソジスト派開祖）八八
トマス・ア・ケンピス（思想家）九一

に病床を出づるや、恰も長夜の眠さめて、清新なる朝を迎へる如く感ず、疾病の功また偉大なり」と。（ヨナ記四二・一〇）

第廿二　死

金言・名句

○主にありて死ぬる死人は幸福なり。（聖書）
○死は長き眠にして、眠は一時の死なり。
○吾人が生と呼ぶものは死に至る旅行、また死と呼ぶものは、生に至る通行券である、眞に智慧ある者は、死が取去るものゝ故をもて死に謝し、死が携へ來るものゝ故をもて、いやまさりて死に謝す。（コルトン）
○善人の爲には死はその父の家に狹き塵ある一室より、他の美はしき光に充ちた幸福の一室に至る間の薄暗き通路たるに過ぎず。（アダム・クラーク）
○一たび死ぬることゝ、死にてのち審判を受くることは、人に定まりたることとなり。（聖書）
○死ぬるよりも生くる方が勇敢である。（メレデス）
○死を欲するの虚妄なるは、死を恐るゝの怯懦なるにゆづらない。（フィリップ・シドニー）
○人間最後の快樂は、職分を行ひたりとの觀念である。（ハズリット）
○何時までも生きねばならぬと思うて働けよ、今日死すると思うて信仰せよ。（タスカニー古諺）

○何年生くるも最初の二十年は人生の最も長き前半なり。（サウジー）

○人もし戮の終は何なりや、と問はゞ我は答へん、勝利なりと。されど之よりも一層適切な答を用するものあらば、我は死なりと、答へん。（サポナローラ）

○死は善人の友にして惡人の敵なり。

○己を賴んで何が出來るか、死なぬ前に死ね。

○さらば朝には紅顏ありて夕べには白骨となれる身なり、既に無常の風來りぬれば即ち二つの眼は閉ぢ、一つの息長く絶え果てぬれば紅顏變じて桃李の裝を失ひぬる時は六親眷屬集りて嘆き悲しめども更に其の甲斐あるべからず、さてしもあらねばとて野邊に送りて夜半の煙となし果てぬれば、たゞ白骨ぞのみ殘れり、あはれと言ふも中々に愚かなり。（蓮如）

○春秋の花よ月よと見る程に我が頭にぞ雪はつもれる。

○禿頭なでゝしみじみ戀しきは坊と呼ばれし昔なり。（マンニング）

○この世はあの世の幼兒なり。

○基督にありて生きよ、さらば肉体の死は恐るゝに及ばず。（ジョン・ノックス）

例話

三一八　骸骨に問ふ

昔、マアカリアスといふ人が、一つの骸骨に問をかけた。「汝のうちに宿つて居た靈魂は、いま何處にゐるか」と。乃ち答へて「邪神を信じた爲に、地獄に落ちて居る。」というた。マアカリアスは、更に其の問を進め、「彼よりも地獄の深い所に、落ちて居る者があるか、」と尋ねるや否や、その返事は「救主イエスに逆うたユダヤ人が、その深い所に呻吟してゐる、」といふのであつた。彼は好奇心にかられ、尙も質問を發して見た。「そのユダヤ人より尙深い、言はば地獄のどん底に墮ちて居る者があるか、」と。骸骨は頭を振り、振り、「あるとも、それはイエスの救を知り乍ら、これを粗末にした基督者の連中がそれである、」と答へた。これは傳說である。

三一九　死に臨みて

詩人ホイットマンの作に、「死に臨んで余の靈魂に告ぐ、」といふのがある。曰く、——歡べ

よ同船の伴侶よ、喜べよ。—（私は喜びつゝ私の靈魂に斯く告げた。）我等の生命は終りぬ—。我らの生命は始りぬ—。長い〻〻間の碇泊地を我らは去らんとす—。船は終に纜を斷れり—。わが心は飛びたつなり—。彼女は岸を離れて速かに進むなり—。歡べよ同船の伴侶よ、喜べよ—。

三二〇　名士の覺悟

スコットの言に「おもむろに來るも、速かに來るも、終に來るものは死である、」といふ一句があり、マニリアスの言にも「我らは生れた時から死につゝある。我らの終は初に繋つてゐる、」といふのがある。共に益多き言であらう。ダムビーは言うた。「死は老人と同じく青年にも近づく、たゞ共の相違は、青年に於ては背後に、老人にあつては面前にあるのみなり」と。詩人ロングフェローは又言うた。「青年と雖も死ぬる事あり、まして老人は死なねばならぬ」と。更にコルネイルの言を紹介すれば次の如し。「人生の一刻々々は、死に赴くの一歩一歩である」と。味うて益ある金言であらう聖徒たりしバックスターは、臨終に際して言うた。「我に苦痛あり、この感覺を打消すものはないされど我は平和を有す、我は平安を有す」と。また信仰篤かりしジョン・ドッドは、他界せんとするや、「死に直面して我は恐怖せず、我は言はんと欲す、死よ汝の刺は何處にあるか、死は我を傷つくること能はず、」というた。共に立派な覺悟ではないか。蘇國の豪傑ジョン・ノックスは、忠告して言うた。「キリストに在りて生きよ、キリストに在りて生きよ、肉体の死は恐るゝに足らず」と。マーシャルは又いうた。「私は死の怖るゝに足らざるを、イエスに於て學びたり」と。プレストンの言に次の一節がある。「神はほむべきかな、例へ私が所を變へるとも、わが友は變らず、何となれば生命のある間、私は神と偕に歩めり、今や神と偕に休まん」と。いづれも熟讀して味ある寸鐵言であらう。更に他の名士に就き聞いて見るなら、幾らでもあらう。中でも見脫し得ぬのは「若し或人が死んで、或人が死ななかつたら、死は最も忌しき禍害であつたらう、」といふブルネルの言。「人は勝利者、王、また大法官として生くるとも、終に一箇の人間として死なねばならぬ」といふダニエル・ウエブスターの言。「死は等しく何人にも來り、その來るや何人をも等しくする、」といふドオンの言葉などであらう。（ヘブル書九・二七）

三二一　死の使來る

或所に一富豪あり、己が居室に金庫の數々を並べ、毎晩のやうに之を眺めては微笑を漏し、い

と満足氣に高枕をして眠りに就いてゐた。或る眞夜中のことふと目を醒すと、窓に下したるカーテンの蔭に、誰かゞ居るやうであるから、彼は甚だ驚きつゝ言うた。「誰かい、其處に居るのは」と。すると其の答は意外にも「死の使です」といふのであつた。富豪はたまげて「僕は君なんか呼ばしないよ、どうして來たんだい、」と尋ねた。再びカーテンの蔭から聲がして「誰も私を呼んだのではありませぬ。私は自分で來たのです。若し人々が招くのを待つて居た日には、何千年たつても呼んで呉れませんからねえ、」と言ふのであつた。狼狽した彼は慌てゝ言うた。「でも今、君に這入つて來られては困るよ」と。この時、カーテンの蔭から姿を表したのは死の使であつた。それは誰の骨か知らぬが、頭の頂から足の爪先まで完全に揃うた骸骨であつた。死の使は彼を熟視するや「さうは言はせぬ、俺は君を待つこと茲に、五十年の長い間である。今日は俺の方から罷り出たから、覺悟を願ひたい、」と宣告を言渡した。富豪は全く氣を失はんばかりに答へた。「でも僕には未だ死の用意が出來てゐないのです」と。死の使は頭を横に大きく振り乍ら、「默れ、俺は貴樣をつかまへて往くから觀念しろ」というた。茲に於て彼は絶對絶命、次の如く歎願した。「どうかお願だから、今日のところは歸つて貰へぬでせうか。その代り此の金時計も金庫も、田畑も山林も、寶石も證券も、家屋敷は勿論のこと、私の所有する全財産を提供しますから、どうぞ今日のところは、御引取を願ひたいのですが」と。死の使は相變らず頭を振つて、「俺は貴樣を迎へに來たので、そんな財産や田畑を受取に來たのではない。どうでも斯うでも、生命を貰ひに來たのだ、」と答へ乍ら次第に彼の枕邊へ近づいて來た。彼は生ける心地なく、「おい君、そんな冷い息を吹きかけて呉れるな、生ける心地はしないのだから。どうして其のやうに詰め寄つて來るのかね、」と尋ねた。死の使は淋しい笑を漏したかと思ふと、其の骨だけの手を差し伸べ、彼の手首を確と握り、「知れた事だ、貴樣は嫌が應でも、俺と一緒に來るんだ。さあ死の世界へ連れて往つてやる。もう一週間は愚か五日と待てない。いや〳〵一時間も半時も猶豫はならぬ。一分間だつて待てない、さあ殘る所は十秒だけだ。覺悟しろ」と最後の宣告を下した。彼は既に唇の色なく、異樣な戰慄が全身に始まつた。死の使が一、二、三、四、五と、秒を數へ出した時、彼は絞る如き聲を立て、「あゝ」と唯一言溜息を漏した。死の使は尙も數へてやまぬ。遂に九、十を數へ終つた時、この富豪は永遠に息絶えたといふ。（田埃及記一二・三〇）

三二二　吉田松蔭の悟

松蔭が特に愛せし門弟の一人は、品川彌二郎であつたが、曾て友と闘論をなし、論談が端なくも、死生の悟といふ事に及んだ。彌二郎は此の問題に對し、徹底しがたき所あり、御教導を乞ふ、とて松蔭に書面を以て問うた。彼が答へた所は、次の如きものであつた。「死生の悟が開けぬ、といふは余りにも至愚の故、詳かに云はん、十七八の死が惜ければ三十の死も惜しい、八九十、百になりても是で足れり、といふ事なし。草虫水虫の如く半年の生命のものもあり、是を以て短かしとせず、松柏の如く數百年の命もあり、是を以て長しとせず、天地の悠久に比せば松柏も一時蠅なり……何年限り生きたらば、氣が濟むことか。前の目途でもあることか、浦島、武内も今は死人なり、人間僅か五十年、人生七十年古來稀なり、何か腹の癒えるやうな事を、遺つて死なねば成佛できぬぞ。足下輩もし心あらば、古人へは恥かし」云々

三二三　寸鐵言の一束

たゞ一度しか來らぬ死が、年中、一生氣にかゝる。（ラ・ブルエア）

私は死ぬる事の外は、何でも用意をして置いたが、今や死は私に來り、私はその用意のないまゝ之に直面せねばならぬ。（ボルキア）

死は永遠の宮殿を開くところの鍵である。（ミルトン）

畢竟死とは何か、たゞ肉に附ける物を脱ぎ去ることではないか。（レンクロス）

死は不滅に入るため、着換をするところの待合室である。（スポルジョン）

死は最後の眠であるか、いな最後の目醒である。（スコット）

人若し神に往くべくば、死は其のために辿る道筋である。（パーネル）

死ぬると云ふことはない、死ぬと見ゆるは移さるゝ事である。如何に防衛しても、空しき椅子を見ない、墟邊はない。（ロングフェロー）

死と愛とは、人を地より天に運ぶ所の兩翼である。（ミケランゼロ）

善人にとりては、死は父の家の小き薄暗き室から、美しき明るき大きな室へ、榮ある饗應（きょうおう）のため行く暗き入口のみ。（アダム・クラーク）

死は人間進歩の階段、幼年から青年、青年から壯年、我らは死によりて更に進んで、永遠の性質を帶ぶに至る。（シィアス）

死は生の前兆である。我らは二度と死なぬ爲に、一度死ぬるのである。（フーカー）

死なるものなし、我らが死と呼ぶものは、生に附したる悲しき名のみ。（ストッダート）

死は生の永代燈に注がれる油にすぎない。（コルリッジ）

死は生命の門なり。（ベーレー）

死は生命の冠なり。（ヤング）

死は第二の生なり。（ベーレー）

生くるとは死ぬる事にて、死ぬるとは生くる事である。人生は見かけによらない、墓の彼方での市民が此方では浪人、愛兒が孤兒、自由民が捕虜、また彼方では神の子供として公認せられる者が、此方では蔑ひかくされて、不明の裡に過される。（ビーチャー）

三三四　殉教者の最後

老いたるカベナンターは、殺されんとする時、反對者の仲間から、「誓約を破棄するか、それとも生命を棄てるか」と、五分間の猶豫を與へられた際、彼は頑として動かなかつた。その銃劍が彼の皺ッ腹に突き通されしとき、血に咽びつゝ叫んだ。「わが頭髪ほど我が生命があつても、誓約を破らんよりは、我は寧しろ生命を悉く與へるであらう」と。ジョン・ノエスは火刑に處せられる時、柱に接吻しつゝ「この日に逢ふため、この世に生れた事は感謝である」と、云ひつゝ同じ友を見て、「我らは此の火中に生命を失ふのではない、更に勝れる生命を得る爲である、云はゞ石炭が眞珠と化するのである、」といつた。アリスドライバーは鋼鐵の鎖で首を締められ乍ら次の如く言うた。「これは結構なネクタイである。神が此のネクタイを惠み給はんことを」と。ジョン・フッスも亦、火刑に處せられる折、薪を己が前に積む國人を顧みて、「君達は今、鵞（フッス）を燒かんとしてゐるが、我より後に鵠（ルーテル）が來るであらう。彼は君達の火を免かるゝであらう、」と語つた。

三三五　斷頭台から時計を渡す

ウイリアム・ラッセルは導かれて、斷頭台に登るや其の懷中から一個の時計を取りだし、之を

伴へるバーネット博士に與へて言うた。「私の時計は貴君にとつては御用に立ちませう、しかし私にとつては、最早その用事がありませぬ。唯今、私の心を往來する思想は、悉く永遠のことに關係して居ます」と。（默示錄一四・一三）

三二六　三老人の歌

頭に白髮を頂き、腰を弓形に曲げたる老翁が三人集まり、死に關する思想を歌に詠むことゝなつた一番早く出來たのが、最も若い老翁の句で、「往生は顧ひはせねど是非なくば八十八をすごしてのこと、」と言ふのであつた。成程と耳を傾けて居た中年寄が、二番の句を詠んだ。「冥土から使の鬼が來たならば、九十九までは留守と答へよ」と。最年長者は二人の顏を横目でぢろり眺めつゝ、さも慾深かさうに次の句を詠んだ。「留守といへば使たびゝ來るべし、いつそ嫌だと云ひ切つてくれ」と。（傳道ノ書六・三）

三二七　不朽人の悲慘

或島に不朽人といふのがあり、絶体に死なぬといふ一種族に屬してゐた。まづ三十才位までは、普通人と變らぬ行動をなし、生活を營んで居るが、それからは年齢の加はるに連れて、曇氣になり次第に沈んでゆく。やがて八十才位に達すると、他の老人たちの如く一切の弱点を有つばかりか、決して死ねないといふ心配から起り來る別の弱点に取附かれてしまふ。それで不朽人が偶々、誰かの葬式でも見やうものなら、この上もなく羨み、己が身の上の不憫をかこち泣く。彼らはあゝいふ靜かな休息の港に着いて仕合せだ、自分達は到底あゝいふ所へ往けない、と思ふと實に悲しい。あゝどういふ廻り合せで、不朽人の仲間に生れ落ちたのか、それにしても我が運命がなさけない、と悲歎に暮れるのである。彼らは少年及び中年時代に見聞きした事の外は、一切何事も憶えて居ない。慥かな事を知るには口碑によつた方がよい。以上の如き狀態なので、不朽人は人間中最も悲慘で、實に目も當てられぬような有樣である。その年齢が百二百と加はるにつれ、愈々存在の影が薄く、果ては煙を固めた人形のやうになる。そんなになつても、死ぬことが出來ぬのであるから、哀れといふも中々に愚なことではない。聖書には「人の壽命千年に倍するとも福祉を蒙れるにあらず」と敎へてある。（傳道ノ書六・六）

三二八　雲濱と辭世の詩

梅田雲濱は、賴三樹以下二十余名と共に捕はれ、江戸に送られた。彼の病は益々重くなり、遂に安政六年九月十四日、江戸小倉藩邸に病死した。時に四十四才、その辭世の詩は殊に名高い。

身は病床にありて兒は飢に泣く
この心偏に戎夷を拂はんと欲す
如今死別生別をかぬ
只皇天后土の知るあり。（ダニエル書一〇・一二）

三二九　カヴェル孃

ベルギーの首府ブラッセルと、英京ロンドンとに、同じ型の大理石像が建つてゐる。これ看護婦カヴェル孃のものである。彼女は英國の赤十字看護婦であつた。ヨーロッパ大戰の時、一方ならぬ活動をした婦人であるが、ドイツ國民の事を思ひ、彼等も等しく神の子である。何とかイエスの愛を示したい、と深く考へる所から、敵地に入つて傷病兵の世話がしたいとの事を英國政府に願出た。幸にも直ちに許可を得た。彼女は、勇躍して單身ドイツ軍の陣地に乘込んだ。來意を告げ、己が信仰と願とを述べたけれども、獨軍中には之を理解する者は、唯の一人もなかつた。反つて「英探だらう、英探に相違ない、」と深く疑うてかゝるので、彼女は極力「決して然うではありません、是非傷病兵の看護をさせて頂きたい、」と說明したが、遂に解つて貰ふことが出來なかつた。それのみか英探の嫌疑が、どうしても晴れず、死刑に處せられる事となつた。ブラッセルの眞中に檜が築かれ、薪などの燃料が山と積まれた。彼女は十字架にかけられ、時が來るや火が薪に移された。紫煙と黑煙とは渦を卷いて立ちのぼり、赤い焰の舌は彼女を舐め出した。しかし彼女の愛は變らなかつたのである。最後に至るや次の如くいうた。「愛するドイツの兄弟達、私の身体は燒かれても、私の貴兄たちを愛する愛を燒くことは出來ませぬ」と。そして神に祈つていうた。「天の父よ彼らを赦し給へ、彼らは其の爲す所を知らないのですから」と。（ルカ傳二三・三四）

三三〇　ムーデーと死の覺悟

大傳道者ムーデーは、己が肉体の死を次の如く信じて疑はなかつた。「諸君は何時の日かは、ムーデーの死を新聞紙上に見るであらう。しかし其の事に就いては、寸分信じてはならぬ。私は私の訃音が傳はると同時に、現在に於けるよりは一層生氣潑剌たる者になるのである。現在の古き肉体上の假屋を棄てゝ、死も觸るべからず、また罪も汚すこと能はざる形、即ち榮ある神のそれに似たる形をとつて、一層卓越した者となる、唯それだけである。私は西歴一八三七年に肉から生れ一八五六年に聖靈により生れた。肉から生れた者は死ぬる時がある、しかし聖靈から生れた者の生命は、永遠である」と。（マタイ傳二五・四六）

三三一　世界の終が來たか

一七八〇年といへば、今から百五十余年の昔である。この年、米國のコンネクチカット州で、世の終が來た、これで人類は滅亡だ、と大騒ぎした出來事が起つた。それは或日のこと、急に一天かき曇り、雷電の閃光は東より西に閃き渡り、大空は落下して一切の生物を壓殺する如く思はれた。同時に暫く前から世界は終極に達した、と噂する者あり、住民は其の時期將に到來せり、と惑ひ出し周章狼狽なす所を知らず、右往し左往する者、恰も大風に吹かるゝ籾殻の如き狀であつた。時に州議會開催中で、議事の進中も止まり議員達各自も生ける心地なく、色青ざめて爲す所を知らず、はや議場を退出せんとする者さへ現れて來た。之を見た議員の一人でダボンポート大佐といふのが毅然と起ち上り怒號して、「審判の日が若し來たならば、私共は其の職分を行ひつゝ、之を迎へたらよいではないか、暗くて議事が進行できぬとあらば、蠟燭を呼ぶまでの事ではないか、」と言うた。皆は此の言に漸く元氣を回復し、今一度着席、その職分を行うたと。平生の覺悟が大切である、まさかの場合に取乱してはならぬ。（マタイ傳二四・四三）

三三二　俳人芭蕉の辭世

芭蕉は俳句中興の祖と稱せらるゝ名人である。不幸にして旅先にて死なんとするや、門人が「先生、辭世の句を」と求めると、彼は平然と答へて「私は如何なる句を作る時でも、これが最

後になつてもよい、といふ心で作つて來た。それ故昨日の句は今日の辭世、今日の句は又明日の辭世である」と言うた。門人は先生の覺悟よきを、今夏の如く感じたといふ。

三三三　次の室に待ちをる死

ウイリアム・ブースは、八十四才の高齢まで生き存へた人であれど、常平生から死に對する準備を怠らなかつた。次の言は之を裏書してゐる。「私は一分時と雖も、人の生命の儚ないものだ、といふ事を忘れない。死は年中私と一緒に各地を廻つて居る。骸骨を土に埋むべき日も、決して遠くはないであらう。私は死といふものが、私の居室の次の室に待合はせ、折さへあれば入つて來よう、として居る如く覺えるのである」と。（ヨハネ傳九・四）

三三四　驛で列車を待つ心地

ジエームス・スミスは、臨終の床に於て、己が心境を次の如き美しき言もて表現した。「私は旅客が旅裝を調へて驛に向ひ切符を手にしてプラットフォームに立ち、列車の到着するを、今や遲しと待つ如き心地で、私は一切の用意を悉く終へ、只管御使の來り迎へるを待つて居るのであります」と。（ヨハネ傳一四・三）

三三五　墓穴掘のダミエン

三十三才を以てモロカイの孤島に渡り、癩者のため、醫師、教師、看護者、大工、指物師、棺桶屋、葬儀屋、孤兒の父、その他、何でも一手に引受けて奉仕した彼は又、墓地の穴掘人足ともなつた。上陸以來、四十九才を最後として地上を去るまでの十七年間に、彼が自ら手を下して造つた棺桶の數でも千二百程に上つた、といふから墓穴も其の位であつたかも知れぬ。一八八〇年の春、ベルギー在住の兄へ送つた書簡の一節を見れば、その邊の消息を知り得る。「小生當地に參り候以來、毎年百九十人から二百人前後を埋葬致居候も、尚、七百人の患者これあり、昨年は特に多數の信者を葬り、教會には多くの空席が出來候も、墓地には、掘る空地を辛うじて見出す程に御座候（中略）兄上樣、瀕死の病人が横はる病院と死人の眠れる墓場とは、私にとり最善の默想場にて御座候」と。

三三六　近々主人も引越す

米國の大説教家ヘンリー・ビーチャーが、大會衆を前にして永遠の問題に就き語つて居る最中、最前列に着席してゐた一老翁が、何を思うたか席を離れ、のこのこ高壇に登り、ビーチャーに近づくと見るや、何事か囁くのであつた。頷いてゐた説教者は、につこと笑うて「皆さん、私の父が天國のことに就き、少々話したいと申しますから、」と其の席を代つた。父ライマンは元より有名な説教者であつたが、この時は全く精力消耗した老人であつた。話をしだしたが、聲が細くて聞えない唇の動くのすら見とめ得ぬ程であつたから、息子のヘンリーは起つて、「お父さんの聲が大きくありません。私が擴聲器代用となつて通譯いたします、」といひ、大休次の如き話をした。「私は此の數年來、さかんに地上から天上へと引越をしてゐます。視力も聽力も大部分は運びました。体力は殆んど運搬濟ですし、聲だつてお聞き及びの通りです。今は早、何もかも天上の美しい邸宅へ引越して、もう此の地上には無一物の狀態ですから、近々主人なる私も移らうと考へて居ます。唯一つ申上げたいと思ふのは既に天上へ運んだ家財道具を、もう一遍この地上に引戻す考は、寸分も無いといふ事であり、私の心は天上の家を憧れて居ります」と。

（ヨハネ傳一四・一・二）

三三七　お父さんが待つて居る

轟々と百雷の落つる如き音を立てゝ、急行列車が驀進してゐた。此處はアメリカ大陸の眞中である。時は眞夜中のこと、六才位の少年が、いと朗らかに歌ひ乍ら車中の廊下を、彼所へと歩いて行つた。うつうつして居た一紳士が之を見とめ「はて、あの兒はどうして斯も朗らかなんであらうか、」と疑問を起した。そのうちに少年は再び歌ひつゝ戻つて來たので、紳士は呼びとめた「坊や、お父さんと一緒かね、」と尋ねて見ると、父と同乘でないとのこと、ではお母さんとか、と再び問ふと、やつぱり一緒でないといふ。ぢや兄さんか、姉さんか、それとも叔父さんか、と順々に質問を發したが、詰局、その少年が一人旅だと判つた。紳士は驚異の眼を見張り、「坊や、たつた一人で怖くは無いか、どうして其のやうに朗らかなのかね、」と今一度尋ねて見ると、少年は意氣揚々と答へて言うた。「ねえ、をぢさん此の列車は明日の朝、次の〇〇驛に着

くでせう、するとお父さんが、プラットフォームに出迎へて居て下さるのです。それを思うたら嬉しく、歌はずに居られないのですよ」と。紳士の思想は、この世から旅立ち、あの世に往く時の事に移つて居た。そうしてイエスが天國のプラットフォームにて迎へて下さるに足る人は幸福なるかな、と心の中に喜んだといふ。（ヨハネ傳一四・二一）

第廿三　雜

金言・名句

○余は全力を盡して、神に事へたりき。（リビングストン）

○敵に勝つを以て勇となすべからず、唯、己の情慾に克ち得たる時、はじめて勇者と稱すべきのみ。（プラオン）

○凡て高貴なる事業も、その初は不可能と思はれたるものなり。（カーライル）

○私は無事に免れた。攝理の指が私の上にあつたからである。（ウエルトン）

○僥倖（ぎょうこう）とは攝理の綽名である。（チャムフォート）

○勝利は最も堅忍なる者に歸する。（ナポレオン）

○男子一戰して止むる勿れ、再戰して止むるなかれ、三戰して止むる勿れ、刀折れ矢盡きて止むる勿れ、血流れて骨碎け、力つきて然る後止めよ。（新島襄）

○大人は其の赤子の心を失はず。（孟子）

○讀書は完全なる人を造り、會話は機敏なる人を作り、作文は精密なる人を造る。（ベーコン）

○多く讀めば讀むほど知ること益々少し、早讀家と眞正の學者との間には大なる差あり。

○人は其の讀む所の書以上に善人とはなれぬ。（ボッター）
○國民の富とは、その生ずる善良なる人物の數多き事に外ならず。（ラスキン）
○不決斷は品性弱き人の特徴である。（ヴォルテール）
○語るなと人に語れば其の人が語るなどゝ語る世の中。
○二人の知れる秘密は、もはや秘密にあらず。（支那古語）
○道は近きにあり、而して之を遠に求む。（テニソン）
○世に書物ほど驚くべき物なし、僅か數百頁のうちに世界の狀況を現す。（カーライル）
○沈默は如何に美しく、如何に力あるものかな。（西洋名言）
○偉人の名と其の記憶とは國民の有する遺産なり。（ハーバート）
○職分の遂行は夜半吾人に音樂を與ふるものなり。（インチ）
○善き習慣の形式に注意する習慣は最良の習慣なり。（ジョンソン）
○物事の最良面を見る人の習慣は、その人にとりて一年一千萬圓の收入よりも價値あり。

例話

三三八　横川省三

盛岡市に遊ぶ者は、必ず高松池畔に屹立する志士の銅像を仰ぎ見るであらう、これ日露役の節、ハルビンの華と散りし横川省三を記念したものである。當時彼は特別任務に從事し、奥地深く活動中、不幸コサック兵の發見する所となり、沖禎介と共に捕はれて軍法會議に附せられた。時にロシヤの法規として本人の宗教如何を訊ねたが、沖が佛教徒なる旨を返事したに反し、彼は、「自分は大日本帝國陸軍參謀、大佐、横川省三四十才です、」と前提し「キリスト教徒である、」と答へた。その何時のころから信仰に入りたるかを問はれた時、次の如く答へた。「幼い頃からである。キリスト教の教に感じ、その教徒となりました」と。兩名とも絞首に處せられる旨の宣告がありたる時、裁判長アフアナシエフ少將に御願ありとて、彼は「我々は軍人である、どうか軍人に對する禮を以て、銃殺の刑に處して頂きたい」と申出で、許可された。次に遺書を

認めたい、とペン及び紙を借り受け、二遺子に宛て次の如く書いた。

「拜啓、父ハ　天皇陛下ノ命ニ依リ露國ニ來リ四月十一日露兵ノ爲ニ捕ヘラレ今彼等ノ手ニ依リ銃殺セラル是天ナリ命ナリ、汝等幸ニ身ヲ壯健ニシ尙國ノ爲ニ盡ス所アレ我死ニ臨ンデ別ニ云フ處ナシ母上ハ勿論宜シク汝等ヨリ傳フ可シ富彌ニモ宜シク傳フル處アレ

明治三十七年四月廿日　滿洲哈爾賓　横川省三

横川律子殿

横川勇子殿」

此ノ手紙ト共ニ五百兩ヲ送ラント欲シタレトモ總ヲ露國赤十字社ニ寄附シタリ」と。

執行の直前、ドウンタン大佐は二人を見廻りに來た、時に横川は懷中から皺くちやになつた封筒をとり出し、「これは自分たちの所持金一千兩の手形であります。之を貴國の赤十字社に寄附いたしたいのです、何卒よろしく御取計を願ひます。」といつた。すると大佐は、「眞に御奇特なことであるが、貴君方には定めて鄕里に遺族がありませう、その遺族に送られるがよい、私が責任を以て送り屆けて上げませう、」と答へた。横川は微笑を浮べつゝ言つた。「あゝ貴官が斯く思はれるのも尤もです、が我らの　天皇陛下は決して我らの遺族を御見捨になりませぬ、何卒御納め願ひます」と。司令官も横川の願を承諾した。横川省三逝いて三十余年、彼の從弟に當る人は、某氏に次の如く書き送つた。「キリストの大乘的信仰は、決して日本精神を損ふものに非ず、寧ろ其の宗教的修練が、日本精神の完璧を助長するものと信じ候、一部の誤れる國粹主義者が、省三の基督教徒たるを否定せんとする如きは、今や世界に認められんとする日本精神を妨ぐるものと存じ候」云々と。

三三九　馬なき馬車

明治五年、東京と横濱の間に始めて汽車が通じた。之を見た事なき山間避地の人々は、「汽車ッて一体どんなものかね、」と尋ねたとき、これを說明するのに相當苦心した人が多い。そのうちに誰いふとなく、一つの熟語を使用し出した。それは「汽車ッて岡蒸汽のことだよ、」といふ事であつた。つまり汽車を知らぬ人々も、蒸汽船即ち普通汽船と言うてゐる船は、余程の前から日本にもあり、之を知らぬ人は少なかつた。それで汽車とは蒸氣の力で陸上を走る船だ、と說明

したわけである。其の後、電車が輸入された時のこと、やつぱり「電車とは如何なる形のものか」との問が到る所で發せられた。その答は申合せたやうに、「馬のない馬車のことだ、」といふのであつた。馬車を知らぬ人は無いであらう。馬こそ曳かないが當時の電車の箱は、馬車の箱に似てゐる。それがレールの上を走る、と聞いて「ははん！成程ね」と合點したものであつた。私共は地上の事物ですら人に判らせるに例を用ひる。まして天の事を悟らせるのに、地上の譬を用ひるは必要である。マルコはイエスが「譬ならでは語り給はず、」と書いてゐる。（マルコ傳四・三四）

三四〇　肩を凝らせる按摩

廣い日本には、肩を凝らせる按摩といふがある。肩が凝つたから一つ揉んで貰はう、と此の按摩の家へ行くと、却つて余計に凝らされて歸るのである。よほど下手な按摩か、といふに然うでもない、曾て醫學專門學校の教授で、ドイツに留學までした事のある病理學の教授で、途中盲目になつた人である。此の先生は失明後、「あんま」の看板をあげた。人々は其の學歴に引かれ、最初のうちは玄關へ詰めかけたが、二度と行かなくなつた。そして今では猫の仔も往かぬ、といふ程の寂れ方だといふ。何故か、それは彼が客の肩を揉みながら、自分の悲しい境遇や泣言を並べ、めいり込む如き話を耳元で聞かすから、却つて肩を凝らせる、それで客も途中から逃げ出すといふ始末、つまり彼に近寄る者は、みんな其の悲觀的態度に凝りて、再び來らぬのである。此の按摩はドイツ語教授の看板を出しても、やつぱり同樣に客がない。原因は前同樣泣言を並べる、といふ事であつた。希望、喜悅、感謝、明朗は凡ての人に必要である。（ビリビ書二・一八）

三四一　伊太利首相と宗教

伊太利首相ムツソリニーは「國家と宗教」の中に論じて言うた。「ロマ帝政時代から現代まで、西歐諸文明國の凡ての歴史は、私共に次の如き教訓を與へる。爲政者が宗教に對して戰を挑まんとする時、結局は前者の敗北に終る、といふ事である。宗教に對する抗爭は、無限なもので……爲政者の武力を以てしても、教會に對して致命的な打擊を與へることは不可能である、之は既に試驗ずみの事實である」と。

三四二　ビスマルクと宗教闘爭

ドイツの鐵血宰相ビスマルクは、その八年に亘る文化闘爭で、ロマ法王無過失論の教理に抗し、僧侶を監禁、教會を閉鎖、カトリック團体の解体を斷行し、それらの賚金も差しおさへた事もあつた。彼の反ロマ闘爭は「ロマと手を切れ」を、標語としてなされたが、この强行策は反つてドイツ國會に對し、多數の議員選出を見る結果を招き、同教徒の精神的反抗が、如何に强固なものであるかを、世界的に示した。結局ビスマルクはレオ十三世の膝下に降伏、自分に對する各方面よりの非難攻擊の鎭撫者たらん事を乞ひ「父よ！」なる言を以て始まる書面を捧げねばならなかつた。

三四三　X光線發見者と殉死

X光線の發見者は、アルフレッド・テーラーである。發見の名譽を博したと同時に、殉死の犧牲を拂うた。一九二〇年といへば大正九年に當るが、彼は實驗室で各種の試驗中、恐るべき劇痛を伴ふ一種の皮膚病に冒され、それ以上研究を續け得ぬ事となつた。彼は臨終の床に於て「私がもう一度この世に生涯を送るものとすれば、今日までと同じ生涯を繰返すであらう、」と傍の者に洩した。彼は他人の苦痛を減ずるため、自ら犧牲を拂ひ苦痛をなめた。（ヨハネ傳一五・一三）

三四四　己の磔刑柱を擔げ

篤信の士大塚素が、後年名典獄と稱せられし有馬四郎助を、信仰に導かんとて、マルコ傳の講義を書き送つた中に、同八章二四節に施せし說明次の如し。「算盤づくの人は、トテも道には入られ不申候、新島先師在米の日、紙に十字の徽號を記し、それに「オマエ、オノレノ、ハリツケバシラヲカツゲ」と書きて、机上に置かれし由、その物現に先生の恩人なるハーデー氏の家に在りと申事に候、先生の如き大久保、木戸その他の人々、今現に內閣に在る人々より頻りに官途に就くべきことを勸められ給ひし由なれども、斷然之を辭し、洛陽の平民を以て終られ候事、而して其の天職に從ひしもの、千言万語より此處の活ける註釋と存じ候、小弟は先生の路を趨ひて同じくハリツケバシラを負ひて、一生相送り度存申候、私の願は全く此の外に無之候」と。書中、

新島先師とは同志社創立者新島襄先生の事である。（マタイ傳一〇・三八）

三四五　泣く子にビーチヤー

冬の寒い日、木枯の吹き荒ぶ中を名高い説教家ビーチヤーが歩いてゐた。人通りの少い場末に來たとき、男の兒が「あーんあーん」と泣いて居るのに出會うた。ビーチヤーは此の兒を抱きあげ、泣きやむまで色々あやした。泣きやんだ時、「坊はなぜ泣いて居たのか、」と尋ねたら、その答は「何でもないのです、でも叔父さんが來たのでうれしい」と、いふ事であつた。傷める心に慰め主なる聖靈が來り給ふをり、その涙は去り平和が來る。（ヨハネ傳一四・一八）

三四六　本分を盡した兵士

或る戰場でのこと、一軍人が激戰の跡を歩いてゐると、重傷で倒れてゐる一兵士に會うた。彼は早速、自分の外套を脱ぎ、其の兵士を臥させ介抱した。頻りに何か探す樣子なので、何かと思つたら鐵砲である事が判つた。それで彼が之を兵士に手渡しすると、之を堅く握りしめ其のまゝ再び人事不省に陷つた。やがて再び目を見開き、力の限り「止まれ、誰か、」と誰何した、が聞ゆるものは己が聲の反響ばかり、兵士は今一度叫んだ。「陛下、わが同胞諸君！私は其の本分を盡した兵士であります」と。この一語を發し終つたまゝ、遂に息を引取つた。（默示錄二・一〇）

三四七　自らの爲に生きず

モラビヤン派の大立者となりしジンゼンドルフ伯は、今から二百五十年程前、ドイツのサキソニヤ地方の貴族として生れた。生れて六週間目に父は死んだが、その他界の前に此の幼兒を神に獻げ、將來は神に忠義を盡す者となるよう、心から祈つた。父の此の祈は、彼が小學校生徒時代、既に其の曙光を示した。乃ち學友と「芥種會」といふを組織し、人々に親切を行ひ、奉仕をなし、これを救主イエスに導くを以て、その目的として努めた。この會員が身に着けた徽章には、小楯と主の十字架を描き、その下に「彼は傷き、我らは癒さる」と刻みつけた。更に各自が指輪をはめたが、それには會員の標語が彫刻してあつた。曰く「自らの爲に生きず」と。（ロマ書一四・七）

三四八　人間は裸で生れ裸で死ぬ

山室軍平先生は、誰でも一度は死ぬるの理を說き、その用意が必要なるを强調し、次の如く敎へられた。「ヤレドは九百六十二才、メトセラは一番長壽で九百六十九才まで生きたとある。此は個人の年齡としては余り長いから、多分此らの名によつて代表せらるゝ一家系の年數であらふなどゝいふ說もあるらしい。それが何れであるにもせよ、私共が此の章を讀んで學ぶ一つの敎訓は、人間は皆死ぬものだといふ事である。人は皆、裸にて母の胎を出づる如く、又裸にて彼處に歸るのである。いくら長生をしたからというて、終に壽命の盡きる時が來る」と。（ヘブル書九・二七）

三四九　積善の家に余慶あり

昔から「積善の家に必ず余慶あり」といひ、また「積不善の家に必ず余殃あり」といふ。これを西洋の例に見んとせば、アンドリユー・マーレーの家族はその一つであらう。彼は元來、スコツトランド人であり、極めて篤信の基督者であつた。彼はユーグノー派に屬するオランダの一少女と結婚したが、その間に十七人の子が生れた。此の子供らの中十二人が長生し、しかも皆この世を祝福する人格者となつた。三代或は四代にして、その血をうけた者が三百人以上となつたが、その中で最も有名なのは、南アフリカで多くの益ある信仰書を著した、同名のアンドリユー・マーレーで、あつたとの事である。（創世記二二・一六）

三五〇　人は煙草を喫ふ動物か

英國での話、數人の學者が集つて喫煙の可否に就き論じてゐた。甲論乙駁その止まる所を知らず、兎もすると禁煙論者が敗けさうであつた。時に炭坑夫ビリー・ブレーが横合から口を出した。彼は無學なれども篤信の人であつた。その論は次の如し、「私は人間が煙草を喫ふ動物でないと存じます。その理由は、神が若し私共に煙草を喫はせるつもりなら、煙の出づる鼻の孔を下向につけず、頭の頂上に口を開き給うた筈です。何處の家だつて、玄關の眞正面へ、而も下向に

煙突を設ける人はありますまい、以上の理由により、人間は煙草を喫うてならぬ、と存じます、」學者一同、互に顔を見合せ、ブレーの事實に基づける名論に感じ、禁煙禁煙と決定したとのこと。（コリント前書六・一九）

三五一　酒に羊、獅子、豚、猿あり

ユダヤの古典「タルムド」中に、意味深長な酒物語がある。大洪水の後、ノアが畑で働いてゐると、惡魔がやつて來て「何を作つて居ますか」と尋ねた。彼は「葡萄を植ゑて居るのだ、」と答へた。惡魔は「私も仲間に入れて呉れ、」と申出で、其の足で何處かへ姿を隱した。間もなく再び現れた時には、桶に眞赤の血を一ぱい携へて居た。その血は羊と獅子と、豚と猿との血を混合したものであつた。これを肥料だというて、惡魔は葡萄樹の根元に注いで歩いた。秋になつて收穫し、ノアは之で酒を造つた。彼は此の酒を鰐腹（たんぱく）のんだ結果、最初は羊のやうに柔しかつたが、醉が廻ると獅子の如く暴れ出し、家族一同その姿を隱す、といふ始末であつた。暫し乱暴をしたかと思ふと、今度は素裸になつて、泥地に胡坐（あぐら）をかいたり轉んだり、食うたものを戻したり、まるで豚同樣の始末に及んだ。それもよい加減に靜まつたから、家の蔭に隱れてゐた家人は、もう乱暴もしまいからと、彼に近づいてみると、今度は猿のやうに變な眞似や、惡戯をしたが其のうちに、ぐつすり寢込んでしまうた。（創世記九・二〇―）これが舊約聖書に出てくる、世界最初の飲酒失敗談である。それ以後、酒を飲むものは皆、この順序を踏んで酒に呑まれてしまふ、と敎へてある。（箴言二〇・一）

三五二　有てる者は尙與へらる

賀川豐彦先生が、クリーヴランド大統領の事を例に引き、常に努力奮鬪すべきを、敎へられたものゝ中に、次の一節がある。「米國大統領クリーヴランドが、プリストン大學を二番で出た時、一番でそのとき卒業した人は、辯護士になつた。この人は大酒呑になつて遂に監獄に這入つた。二番目のクリーヴランドは大統領に選ばれて當選ー、その號外の聲が町に鳴り響いた時、テキサス

の監獄の中で其の事を知つたのは友達の辯護士だつた。彼は其の時、氣が付いた、一緒に決心したのに、あの時やつてゐたら、と思つたが遅い。持たざる者は取られるとは此の事である。生命の木とはそんなもの、故に我々は絶へず努力して、自分の僅ばかりの物にも、成長を與へるやうに、しなければならぬ」と。（マタイ傳二五・二九）

三五三　いと小き者の一人に

青年新島襄を乘せて、米國に到着せし船長は、船の持主なるハーデーに、此の日本青年の處置につき相談した。とに角、同人に面會して相當の助力をする、との事に船長は氏を伴ひ、ボストン市ジョイ町にハーデーを訪ねた。氏は初對面の時から、深い印象を相手に與へた。その柔かい感情に包まれた貴公子然とした容子は、船長の推薦に背かず、ハーデーも一人の子を授かつた如く感じた。同時に思ひ起したのは、「此らのいと小き者の一人になしたるは、即ち我に爲したるなり、」といふ聖句であつた。ハーデーは此の時以來、この一日本青年に盡すは、そのまゝイエスに盡すことなるを深く信じ、至れり盡せりの世話をした。（マタイ傳二五・四〇）

三五四　近いうちに轉宅です

曾て米國大統領たりしジョン・クインシー・アダムスが、老人になつた時、杖を曳きつゝ外を歩いて居ると、知己の一人が彼に遭ひ、挨拶していうた。「近頃、御機嫌は如何ですか」と。彼は之に答へて言うた。「アダムス自身は、至つて壯健でありますが、その住家は大層破損して、屋根が落ち、壁がはげ、柱まで外に現れる有樣で、强い風が吹けば搖ぐものですから、支へ棒をして居るやうな始末です」と。まさか、大統領までした人が、そんな破屋（あばらや）に住んで居やうとは、思はれぬところから知人は「御冗談でせう、」と挨拶に及ぶと、彼は眞面目くさつて、禿げた頭を撫でて見せ、「ほら御覽この通り屋根は落ち、」次に痩せた肋骨をさすり「壁も落ちて柱が外から見えるでせう。」今度は手にせる杖を示しつゝ言うた。「風が吹けば家が動いて危い故、支へ棒を之この通り、いつ迄も此のやうな破屋に住んでは居られないから、近いうちに轉宅です、轉

宅です」と。天を指したといふ。（コリント後書五・一）

基督教例話金言名句集（終）

昭和十三年十一月二十日　印刷
昭和十三年十一月二十五日　發行

定價壹圓貳拾錢

著者　土肥書店編輯部

發行者　土肥省三　松山市湊町三丁目二五

印刷者　長谷川淳　松山市小坂町一八四

不許複製

發行所　松山市湊町三丁目南通　土肥書店　振替　大阪五九五九三番　東京四四三二番